

山梨県北巨摩郡高根町

# 次郎構遺跡

——株式会社キトースポーツ公園造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——



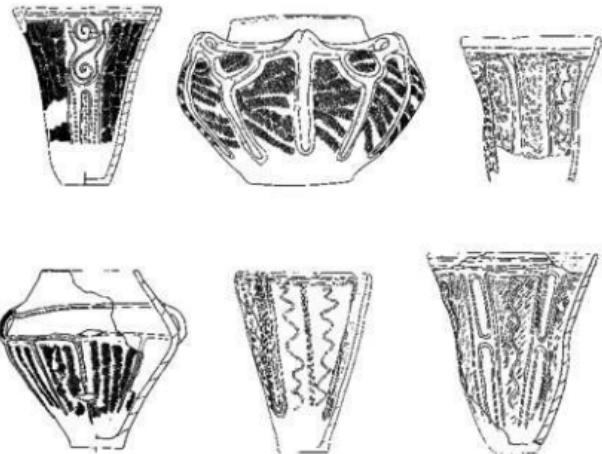
1996

高根町遺跡調査会  
次郎構遺跡調査団  
株式会社キト一  
高根町教育委員会

山梨県北巨摩郡高根町

# 次郎構遺跡

——株式会社キトースポーツ公園造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

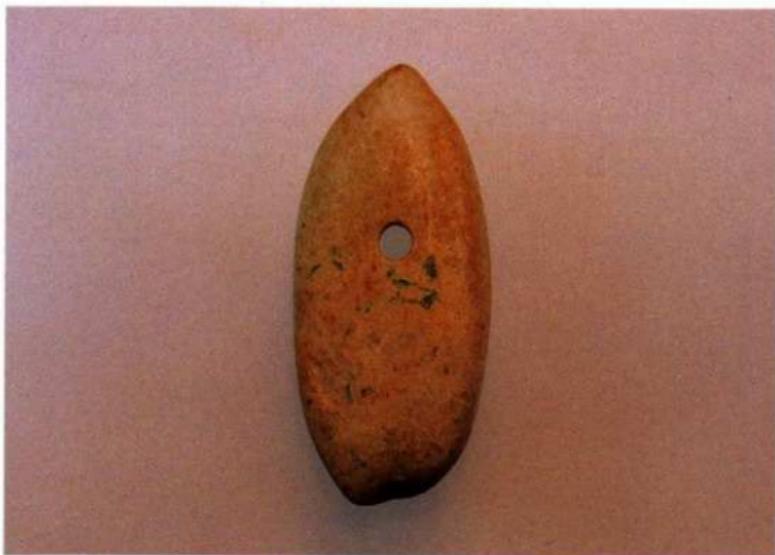


1996

高根町遺跡調査会  
次郎構遺跡調査団  
株式会社キト一  
高根町教育委員会



遺跡全景



翡翠大珠



旧石器 ナイフ型石器（表）



旧石器 ナイフ型石器（裏）

## 序

本町では、遺跡・文化財の保護・活用の円滑な運営を進めるために平成4年7月21日に高根町遺跡調査会を発足いたしました。

町内には原始・古代から中近世にいたるまでの貴重な遺跡の分布状況が、踏査等によって明らかにされ、ほ場整備事業に伴う発掘調査によっても数々の成果があげられております。

これらの文化財は先人が残してくれた過去からのメッセージであり、現在から未来へと引き継ぎ、文化財の充実を図ることを目指しています。

文化財を広く公開・調査・研究することによって、今後の社会・経済等の指針を裏付けるものとしての役割を担っていると思われます。

本書は、株式会社キトーのスポーツ公園造成に伴い、平成4年11月より平成5年12月まで発掘調査された次郎構遺跡の報告書であります。

日本の長い歴史の中で、歴史的事実として認識されているものはごくわずかであり、土中に保存されているものなかには、この歴史的事実を実証するものもあれば、これを覆すものもあり、本書がその一助となれば幸いです。

この度は、株式会社キトーの御理解と御協力により現地調査を行い数々の貴重な発見がありました。ここに、改めて感謝申し上げるしたいです。

終りに今回の調査に御協力・御指導いただいた、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成8年3月31日

高根町遺跡調査会会長

高根町長 大柴恒雄

## 例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡高根町下黒沢字打越2801番地外に所在した次郎構遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、開発事業（高根町保養所及びスポーツ公園造成）主体者株式会社キトーの委託のもとに高根町遺跡調査会が次郎構遺跡調査団を組織して実施した。
3. 調査は、平成4年度と平成5年度を行い、遺物整理は平成7年度に行った。
4. 発掘調査によって得られた出土遺物・記録図面及び写真等は、高根町教育委員会で保管している。
5. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の諸先生方・諸機関よりご指導・助言・協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。（順不同・敬称略）  
木本健、新津健、小野正文、八巻久志夫、保坂康夫、佐野隆、伊藤公明、竹田眞人、西井久光、県学術文化課、県埋蔵文化財センター、株式会社キトー、コンピュータ・システム㈱
6. 発掘調査参加者（順不同・敬称略）  
八巻洋二 八巻久子 八巻知子 田中恒子 日向たまの 永岡米子 内藤治恵 田中昭子  
植松栄子 古屋房子 水関富貴男 小宮山キヨ 吉田香代子 高柳静香 中嶋當子  
與水良教 桜井竹代 菊原幸男 菊原すえ子 新海登子 小林文治 半田初子 清水貞子  
清水よ志み 小林昭子 斎田金博 菊原はつよ
7. 遺物整理参加者（順不同・敬称略）  
八巻久子 八巻知子 田中恒子 日向たまの 永岡米子 内藤治恵 田中昭子 植松栄子  
古屋房子 小宮山キヨ 吉田香代子 高柳静香 中嶋當子 仲嶋まゆみ 清水貞子  
小林昭子 斎藤玲子

## 凡 例

1. 遺構エレベーション・セクション図において、水平線横の数字は海拔高度（m）を示す。
2. 縮尺は、各挿図ごとに示してある。
3. 方位は、磁北を示している。

# 目 次

## 序 文

## 例 言

第I章 調査状況	1
I 調査に至る経緯と経過	1
II 調査組織	1
III 周辺の地形	3
IV 周辺の地質	3
V 遺跡の立地	3
VI 周辺の遺跡	6
VII 調査方法	7
第II章 調査の成果	7
I 遺構	7
1 住居址	7
2 上 壇	26
3 井 戸	35
4 清	37
5 埋設土器	38
II 遺物	44
1 土 器	44
2 石 器	76
第III章 総括	85
1 遺構について	85
2 遺物について	86
参考・引用文献	87
おわりに	87

## 挿 図 目 次

第1図 次郎橋遺跡周囲	4	第37図 第2分井戸実測図	37
第2図 発掘調査区とその周辺	5	第38図 第1号堆積土器実測図	39
第3図 第1号住居址実測図	8	第39図 第2号埋設土器実測図	39
第4図 第2号住居址実測図	10	第40図 第3、4号埋設土器実測図	40
第5図 第3号住居址実測図	11	第41図 住居址内出土土器実測図(1)	45
第6図 第4号住居址実測図	12	第42図 住居址内出土土器実測図(2)	46
第7図 第5号住居址実測図	14	第43図 住居址内出土土器実測図(3)	47
第8図 第6号住居址実測図	15	第44図 住居址内出土土器実測図(4)	49
第9図 第7号住居址実測図	17	第45図 住居址内出土土器実測図(5)	50
第10図 第8号住居址実測図	18	第46図 住居址内出土土器実測図(6)	51
第11図 第9号住居址実測図	20	第47図 住居址内出土土器実測図(7)	53
第12図 第10号住居址実測図	21	第48図 住居址内出土土器実測図(8)	54
第13図 第11号住居址実測図	22	第49図 住居址内出土土器実測図(9)	56
第14図 第12号住居址実測図	23	第50図 住居址内出土土器実測図(10)	57
第15図 第13号住居址実測図	24	第51図 住居址内出土土器実測図(11)	58
第16図 第5、6、7、9号住居址埋立部実測図	25	第52図 住居址内出土土器実測図(12)	60
第17図 第1号土壤実測図	26	第53図 住居址内出土土器実測図(13)	61
第18図 第4号土壤実測図	27	第54図 土壌内出土土器実測図(1)	63
第19図 第12号土壤実測図	27	第55図 土壌内出土土器実測図(2)	64
第20図 第14号土壤実測図	28	第56図 土壌内出土土器実測図(3)	66
第21図 第41号土壤実測図	28	第57図 土壌内出土土器実測図(4)	68
第22図 第42号土壤実測図	29	第58図 土壌内出土土器実測図(5)	69
第23図 第43号土壤実測図	29	第59図 土壌内出土土器実測図(6)	71
第24図 第47号土壤実測図	30	第60図 這床外出土土器実測図(1)	74
第25図 第49号土壤実測図	30	第61図 這床外出土土器実測図(2)	75
第26図 第50号土壤実測図	31	第62図 進模外出土土器実測図(3)	77
第27図 第53号土壤実測図	31	第63図 出土石器実測図	78
第28図 第62、63、64号土壤実測図	32	第64図 出土石器実測図	79
第29図 第94号土壤実測図	32	第65図 出土石器実測図	80
第30図 第95、96号土壤実測図	33	第66図 出土石器実測図	81
第31図 第132号土壤実測図	33	第67図 出土石器実測図	82
第32図 第174、175号土壤実測図	34	第68図 出土石器実測図	83
第33図 第179号土壤実測図	34	第69図 住居址内および十種出土壤実測図	84
第34図 第181号土壤実測図	35		
第35図 第186号土壤実測図	35		
第36図 第1号井戸実測図	36		

# 表 目 次

第1表 検出土塚一覧表 ..... 40

# 図 版 目 次

- 巻頭図版 1 全景写真  
巻頭図版 2 純翠製人珠  
巻頭図版 3 ナイフ型石器
- 図版 1 1 全景 北より  
2 全景 東より  
3 全景 南より  
図版 2 1 第1号住居址遺物出土状況  
2 第1号住居址完掘状況  
3 第1号住居址炉壳完掘状況  
図版 3 1 第2号住居址遺物出土状況  
2 第2号住居址完掘状況  
3 第2号住居址炉壳半掘状況  
図版 4 1 第3号住居址遺物出土状況  
2 第3号住居址完掘状況  
3 第3号住居址炉壳状況  
図版 5 1 第4号住居址遺物出土状況  
2 第4号住居址完掘状況  
3 第4号住居址炉壳状況  
図版 6 1 第5号住居址遺物出土状況  
2 第5号住居址完掘状況  
3 第5号住居址炉壳半掘状況  
図版 7 1 第6号住居址遺物出土状況  
2 第6号住居址完掘状況  
3 第6号住居址炉壳半掘状況  
図版 8 1 第7号住居址遺物出土状況  
2 第7号住居址完掘状況  
3 第7号住居址炉壳半掘状況  
図版 9 1 第8号住居址遺物出土状況  
2 第8号住居址完掘状況  
3 第8号住居址炉壳半掘状況
- 図版10 1 第9号住居址遺物出土状況  
2 第9号住居址完掘状況  
3 第9号住居址炉壳半掘状況  
図版11 1 第10号住居址遺物出土状況  
2 第10号住居址炉壳完掘状況  
3 第10号住居址炉壳下部焼造
- 図版12 1 第11号住居址遺物出土状況  
2 第11号住居址炉壳調查前  
3 第11号住居址炉壳完掘状況  
図版13 1 第12号住居址完掘状況  
2 第12号住居址炉壳調査前  
3 第12号住居址炉壳半掘状況  
図版14 1 第13号住居址完掘状況  
2 第13号住居址炉壳調査前  
3 第13号住居址炉壳完掘状況  
図版15 1 第1号土壤遺物出土状況  
2 第1号土壤遺物出土状況アップ  
3 第1号土壤遺物出土状況  
図版16 1 第4号土壤遺物出土状況アップ  
2 第5号土壤遺物出土状況  
3 第12号土壤遺物出土状況  
図版17 1 第14号土壤遺物出土状況  
2 第41号土壤遺物出土状況  
3 第41号土壤遺物出土状況アップ  
図版18 1 第43号土壤遺物出土状況  
2 第43号土壤遺物出土状況アップ  
3 第47号土壤遺物出土状況  
図版19 1 第47号土壤下部遺物出土状況  
2 第47号土壤下部遺物出土状況アップ  
3 第49号土壤遺物出土状況  
図版20 1 第49号土壤遺物出土状況アップ

- 2 第50号土塙遺物出土状況  
3 第53号土塙遺物出土状況
- 図版21 1 第53号土塙遺物出土状況アップ  
2 第62号土塙遺物出土状況  
3 第63号土塙遺物出土状況
- 図版22 1 第94号土塙遺物出土状況  
2 第96号土塙遺物出土状況  
3 第96号土塙遺物出土状況アップ
- 図版23 1 第132号土塙遺物出土状況  
2 第132号土塙遺物出土状況アップ  
3 第155号土塙遺物出土状況
- 図版24 1 第155号土塙遺物出土状況アップ  
2 第174号土塙遺物出土状況  
3 第174号土塙遺物出土状況アップ
- 図版25 1 第179号土塙遺物出土状況  
2 第179号土塙遺物出土状況アップ  
3 第181号土塙遺物出土状況
- 図版26 1 第181号土塙遺物出土状況アップ  
2 第186号土塙検出状況  
3 第186号土塙完掘状況
- 図版27 1 第1号井戸上段  
2 第1号井戸中段  
3 第1号井戸完掘状況
- 図版28 1 第2号井戸 北より  
2 第2号井戸 西より  
3 第2号井戸完掘状況
- 図版29 1 第1号埋設土器検出状況  
2 第1号埋設土器半蔵状況  
3 第1号埋設土器完掘状況
- 図版30 1 第2号埋設土器検出状況  
2 第2号埋設土器半蔵状況  
3 第2号埋設土器完掘状況
- 図版31 1 第3号埋設土器検出状況  
2 第3号埋設土器半蔵状況  
3 第4号埋設土器半蔵状況
- 図版32 第2、3号住居址出土上器
- 図版33 第4、5号住居址出土土器
- 図版34 第5、6号住居址出土土器
- 図版35 第7号住居址出土土器
- 図版36 第7、8号住居址出土土器
- 図版37 第9、12号住居址出土上器
- 図版38 第1、4、9、14、41号土塙出土上器
- 図版39 第43、49、52、94、95、96号土塙出土土器
- 図版40 第132、174、181号土塙第1、4号埋設土器
- 図版41 出土遺物
- 図版42 出土遺物
- 図版43 出土遺物
- 図版44 出土遺物

# 第Ⅰ章 調査状況

## I 調査に至る経緯と経過

株式会社キトーでは、高根町下黒沢字打越に高根研修所があり、その隣接地に保養所とスポーツ施設を設けることが計画され、高根町教育委員会に遺跡の有無の照会があり、計画地一帯の踏査を行い遺物を確認し、遺跡であることが判明し、株式会社キトーにその旨を報告したが、詳しい遺構の分布状況及び分布状態を把握するために試掘調査を行うこととした。試掘調査は、工事区域が広範囲で桑畠及び荒れ地等であったことから重機によって行い、ほぼ半分の区域から遺構が検出された。これらの結果に基づき、山梨県教育委員会・町企画室・株式会社キトーと当教育委員会で協議を行った結果、調査は高根町遺跡調査会が行うこととした。

調査は、平成4年11月から調査区東側から調査に入り、開始当初から重機による表土除去作業と並行して作業員による遺構確認作業を行った、季節がら霜柱、土の凍結や降雪に悩まされながらも、遺構確認が順調に進み、確認後順次遺構の掘り下げを行ったが、土の凍結により遺構内の覆土と一緒に遺物が上がってしまったり、凍結による破損が激しくなり、作業効率の低下がみられたため、やむをえず一旦発掘調査を休業した。休業期間中は、確認された遺構のすべてに土をかけ、その上にビニールシートをかけて遺構面及び遺物の確保と保護を行った。

調査の再開は、遺構及び遺物の保護面から考慮して平成5年6月から引き続き行い平成5年12月17日に現地調査を終了した。

## II 調査組織

### 1 発掘調査地

山梨県北巨摩郡高根町下黒沢字打越次郎橋

### 2 調査主体

高根町遺跡調査会

### 3 調査機関

次郎橋遺跡調査会

#### 4 調査組織

〈高根町遺跡調査会組織〉

会長	町長	大柴恒雄
副会長	教育委員長	清水教昭 (後任 跡部義幸)
	町文化財審議会会长	手塚洋一
理事	学識経験者	加々見光栄
"	"	五味 彰
"	"	與水正弥
"	"	田丸又一 (後任 清水正也)
"	"	川端下成男
"	"	浅川和典
"	"	山本千杉
"	"	八巻洋二
"	"	谷口彰男
参与	教育庁学術文化課	小野正文 (後任 保坂康夫)
"	県埋蔵文化財センター	八巻與志夫
監事	町収入役	原重信 (後任 清水喜一)
"	町監査委員	小尾章雄 (後任 小池益太郎)

〈高根町次郎構遺跡調査団組織〉

团长	町教育委員会教育長	中嶋新蔵 (後任 中嶋靖)
副团长	町教育委員会事務局長	與水悦朗 (後任 小清水淳三)
調査担当	高根町教育委員会	雨宮正樹
調査員		根本 勝

事務局

事務局長	町教育委員会教育長	中嶋新蔵 (後任 中嶋靖)
事務局員	町教育委員会事務局長	與水悦朗 (後任 小清水淳三)
	社会教育係長	原一元
	社会教育主任	雨宮正樹

### III 周辺の地形

高根町は、山梨県の北西部に県境として聳えている八ヶ岳の南麓に広がる高原の町である。この山は、日本列島を東西に二分する大地溝帶上（フォッサマグナ）に噴火した火山性の山であり、噴出物の特性のため裾野は比較的なだらかな地形（台地状をていする）であるが、町内東部は飯盛山火山群に属するため、この周辺はやや急峻である。

八ヶ岳からつづくこの台地は、国道141号線の垂崎から小諸へ抜ける途中の弘法坂付近で合流する大門川と川俣川によって2つに分断することができ、北側は標高約1,000m以上の亜高山帯に属し、南側は標高約600mから約900mの範囲で高根町の主要部を占め、基幹作物は水稻等を主としている。

町の東は、八ヶ岳の赤岳を水源とし南流する川俣川・大門川（須玉川）によって侵食された比高差約40~50mを測る垂直に切り立った崖が20数km南北につづき、北は前述の南北に折り重なるように列になった八ヶ岳連峰によって隔離された地域となっている。唯一開けた西側も隣町である長坂町及び小淵沢町の西側を南流する釜無川（富士川）によって隔離されているが、この両河川に挟まれた台地は、南北20数km、東西の最大幅は10数kmを測り、台地上を流れる小河川は南流し、前述の大河川に合流している。

### IV 周辺の地質

八ヶ岳は、本州を中央で二分する大地溝帶-糸魚川静岡構造線上に噴火した火山群で、その生成時期は地質年代で第三紀末から第四紀の洪積世前期といわれ、形成している熔岩はいわゆる輝石安山岩類で標高1,000m以上に分布し、それ以下の広大な山麓の斜面は、熔岩の粉砕物や、噴火による堆積物からなる火山質崩積土の黒褐色をした表土が覆っている。

標準的な土層堆積状態は上から、黒色土（20~40cm）、ローム層（3~4m）、御岳山を起源とする細粒軽石層いわゆる鹿沼土（40~60cm）、白色系粘土層（10~20cm）、暗赤褐色礫粘土層（八ヶ岳火碎泥流）となる。

### V 遺跡の立地

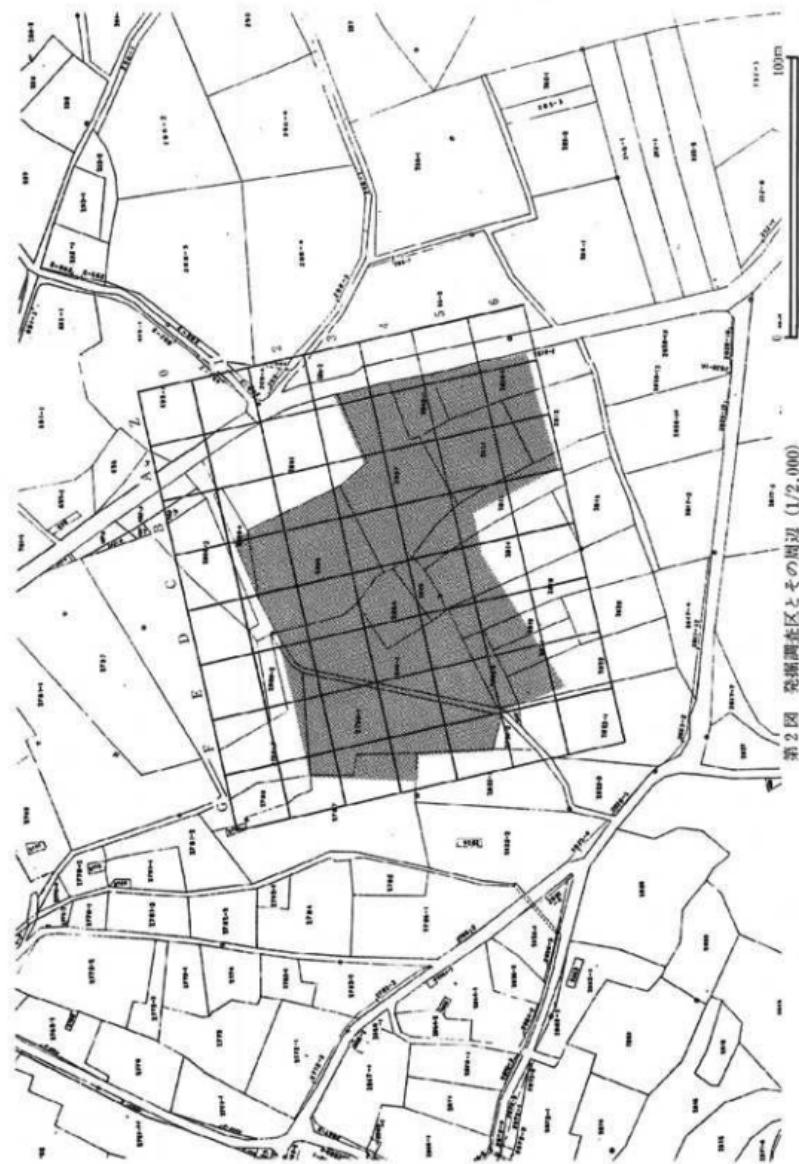
当遺跡は、国道141号線（佐久甲州街道）の須玉町若神子で分岐する県道須玉八ヶ岳公園線を北上した沿線沿いに所在する、町指定文化財「原山神社」のすぐ南の標高約620mを測る台地上に立地している。

原山神社は、町誌によれば延元元年（1336）の創建といわれ、本殿には安永7年（1778）の上棟の棟札があり、棟梁河内領下山村松木喜内の墨書がある。かつては、63体の人形淨瑠璃用



第1図 次郎講遺跡の位置(1) (1/50,000)

第2図 発掘調査区とその周辺 (1/2,000)



の人形があり、祭典には氏子の人たちによって演じられたというが現在は人形も無く形骸もない。原山神社本殿の下には鈴石と呼ばれる石が御神体となって祀られているが、町内の昔話によれば、『昔、若神子村から中村に入る坂道に大きな石があった。この石は、月のよい夜は、独りでにチリチリと鳴ったので、鈴石とも鈴石様とも呼ばれた。この石は、たいそう靈験あらたかで、数々の祈願をかけると、たちまち御利益を受けることができた。石に御宿願をかけて御開届になるときは、石の中で鈴がなったそうである。このような靈現あらたかな石を路傍に置くことは勿体無いということで黒沢村へ移し神様として勧進しようということになった。早速村全員で鈴石の運搬にあたったが、原山神社の辺りまで来たときに動かなくなつたため、御神体として納め、その上に神社を勧進した。』という話であるが、石について述べるならば、古来より利用してきた石に対して一種の神格化をしたと思われるが、このような伝承は縄文時代の遺跡と重なりあうことが見受けられる。

この付近は、交通の要所の地であり国道141号線・JR中央本線・中央自動車道がほぼ並行して南北に縱断して、長野方面に向かっている。

遺跡は、原山神社の南側に広がり、東側の小山の斜面には下黒沢の共同墓地がありそれから続く、微高地からそれにつながるテラス状の低地への連続した比較的平坦面を形成し、現況は桑畠・蔬菜畠・荒れ地である。

## VI 周辺の遺跡

この台地上には南流する小河川が数条あり、この小河川によって開析され、肥沃化された土地は古くから開拓されてきたが、下黒沢周辺では小河川が多数合流することにより水量が増えることにより、侵食が激しく遺跡の存在する台地は広いところもあれば馬の背状にやせている場所もある。昭和37年に作成された県下の埋蔵文化財分布調査台帳によれば、42ヶ所の遺跡が記載され、昭和61年に高松町教育委員会が行った埋蔵文化財分布調査では142ヶ所の遺跡が確認されているが、下黒沢一帯では遺跡の分布状況はまばらではあるが、これは付近一帯が現在も開墾の手がほとんど入らず、山林として残されていることも一因であろう。

これらの遺跡の多くは、縄文時代中期と平安時代を中心としているが、昭和58年に発掘調査が行われた下黒沢字湯沢遺跡からは平安時代の官衙的な意味合いの強い造構及び遺物が検出されていることなどから、この地域一帯の中心地であったと思われる。以下にこの周辺で調査された遺跡について若干の説明をしてみたい。

1は『湯沢遺跡』で昭和58年に岐阜北地域中核工業団地造成工事に伴う発掘調査が行われ旧石器、縄文時代中期の住居址8軒、平安時代の住居址27軒が検出され、その造構の配置状況及び規模等から官衙的な遺跡であると思われる。2は『神取遺跡』で平成4年に県営は場整備事業に伴う発掘調査が行われ、縄文時代早期、中期から古墳時代・平安時代の集落が検出されてい

る。3は『日影山遺跡』で平成5年に県営住宅建設に伴う発掘調査が行われ、縄文時代中期、近世の遺構が検出されている。4は『頭無遺跡』で昭和48年に中央自動車道西宮線建設工事に伴う発掘調査が行われ、縄文時代中期の住居址15軒、古墳時代初頭の住居址2軒が検出されている。5は『柳坪遺跡』で、ここは中央道の本線工事に伴う発掘調査が昭和48年に、インター・チェンジ建設工事に伴う発掘調査が昭和59年に行われ、縄文時代中・後・晚期、弥生時代中・後期、古墳時代、平安時代の集落が検出されている。6は『西ノ原遺跡』で、昭和60年に県営は場整備事業に伴い調査され、縄文時代中期の遺物と古墳時代の遺構が検出されている。7は『下風呂遺跡』で平成2年に県営は場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代中期の遺構が検出されている。8は『梅ノ木遺跡』で昭和57年に県営は場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代中期の遺構が検出されている。9は『川又坂上遺跡』で昭和57年と平成4年に団体営は場整備事業とハケ戸広域農道建設に伴い発掘調査が行われ、縄文時代中・後期・平安時代の遺構が検出されている。

## VII 調査方法

試掘調査の結果により工事対象面積のほぼ半分から遺構の広がりが確認されたことにより、面積が広範囲であるため、重機によって表土を除去し、遺構の確認及び掘り下げは人力によって行った。

遺跡内に任意で20m四方のグリッドを設定し、その中を4等分して10mをサブグリッドとして遺構の確認状況に合わせて調査を行った。グリッドは、東西に東からアルファベットで、南北に北からアラビア数字で番号を付した。

# 第II章 調査の成果

## I 遺構

### 1 住居址

確認された住居址は、遺跡内のほぼ中央付近にある隠れ沢の黒色土の堆積を掘り込んで構築されており、遺構精査中に遺物の集中した部分のほとんどが住居址で、検出遺構の状況はまばらではあるが近接し、単独で存在している。以下に個々に説明していきたい。

#### 第1号住居址

(位置) 調査区中で最も東に位置するA-3-2グリッドにある。

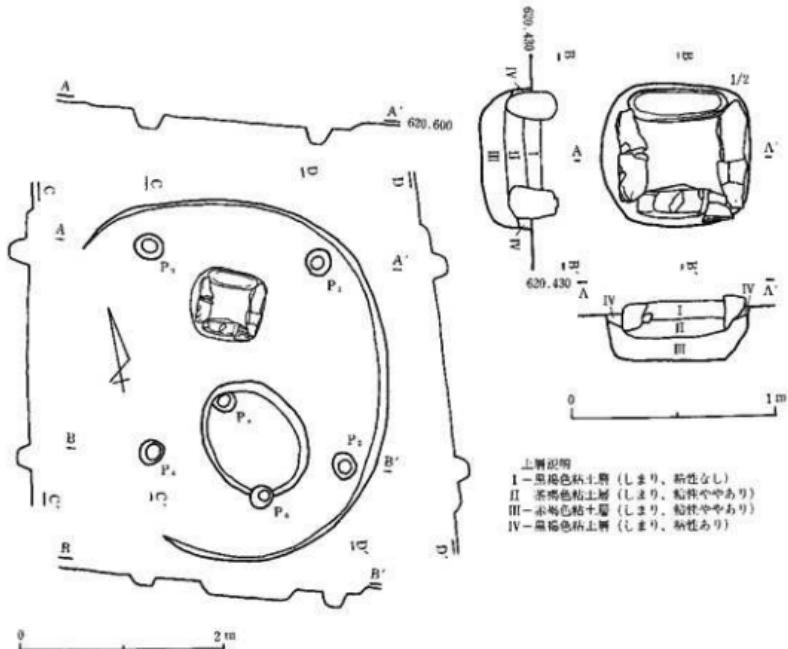
(形状・規模) ローム層を掘り込んで造られていた住居であるが、全体的に耕作による削平を受けており壁の立上りは一部不明であるが長軸約3.6m、短軸約3m前後の橢円形と推定される。

(か) 住居址の中央よりかなり北側に偏って位置する。1辺約60cmのほぼ方形を呈する石圓壙で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようだが石の石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っていた。炉の焼り方は東西南北とも70cmのほぼ方形を呈し、深さは床面より30cmを測る。

(柱穴) ピットは6ヶ所確認されているが、どの柱穴も細く浅いため住居のピットと断定はできないが、ピットの位置関係から判断すればP 1・2・3・4が妥当であろう。

(その他の施設) 造構内中央よりやや南に偏った位置に第159号土坑があり、この住居に伴うかどうかは不明である。

(出土遺物) 住居内の覆土は非常に薄く遺物の出土は極少量であった。



第3図 第1号住居址実測図

## 第2号住居址

(位置) B-5-2グリッドにある。

(形状・規模) 全体的に耕作による削平を受けてはいるが、壁の立上りは10cmほど残っており、直径約5.8mの円形を呈する。

(炉) 住居址の中央よりかなり北側に偏って位置する。すでに炉の石は抜きとられており、炉を堀り進めた段階で南の炉石と思われる砾が1個と土器片が8点出土したのみである。

堀り方は直径約130cmのほぼ円形を呈し、深さは床面より約30cmを測り、焼土の残存状況は良好であった。

(柱穴) ピットは住居内に6ヶ所確認され、住居外にも2ヶ所あり、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4が主柱穴と考えられるが、外の2ヶ所も関係があるのかもしれない。

(その他の施設) 住居の壁直下に深さ10cm程度の周溝が全周し、この周溝の内側に正位の埋甕が1基認められ、屋内の施設と考えられる。

(出土遺物) 遺構が確認できた場所は、黒色土の堆積があり、遺構精査中より遺物の集中する場所であり、トレンチを設定し遺構の確認を行うことができた。床面上からほぼ完形の土器が5個体ほど出土している。

## 第3号住居址

(位置) B-5-1グリッドがあり、第2号住居址の近くに存在する。

(形状・規模) 第2号住居址と同様に全体的に耕作による削平を受けてはいるが、壁の立上りは10cmほど残っており、直径約5mのほぼ円形を呈する。

(炉) 住居址のほぼ中央東よりに位置する。炉の残存状況は非常に良く、東側を除いた三方間に40cm~50cmの範囲で半石を敷き詰めた施設が造られていた。炉自体の石はすべて半石を用いて造られて北側が若干開く造りであった。1辺50~70cmを測り、ほぼ方形を呈する。

堀り方は直径約80cmのほぼ円形を呈し、深さは床面より約30cmを測る。

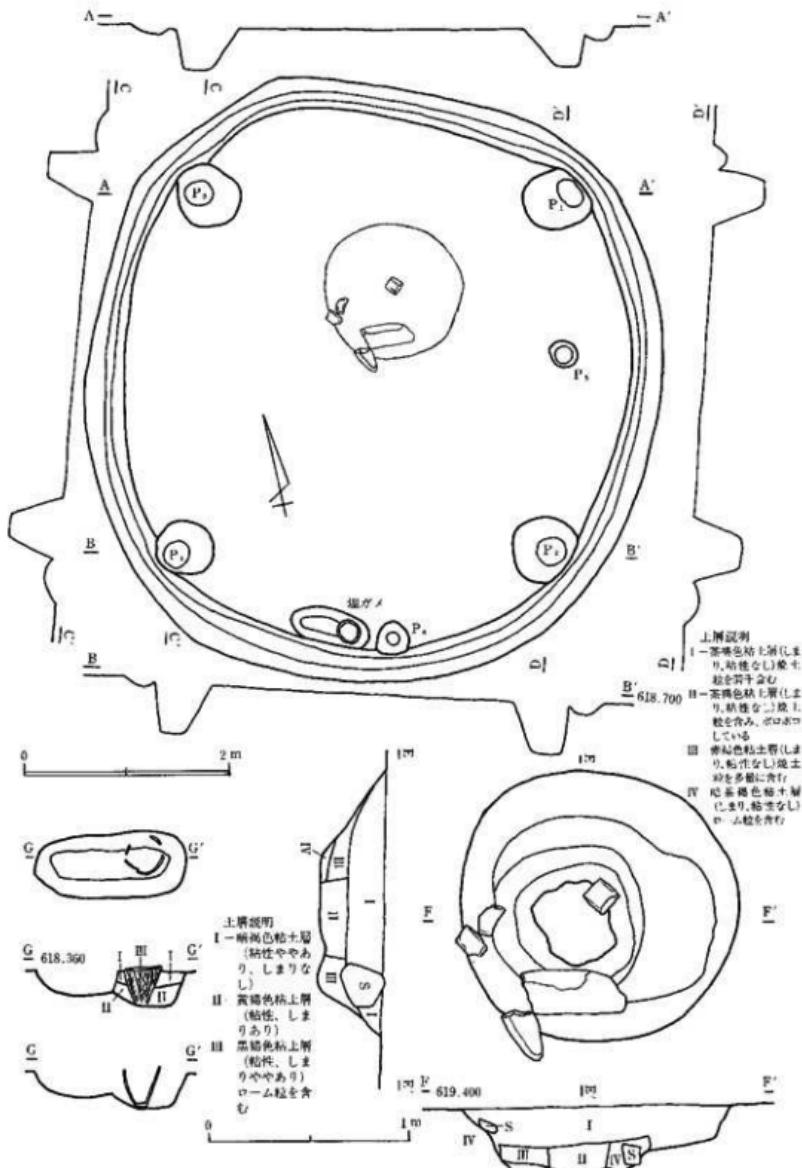
(柱穴) ピットは10ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4・5・6が主柱穴と考えられる。

(出土遺物) 遺構が確認できた場所は、黒色土の堆積があり、遺構精査中より遺物の集中する場所であり、トレンチを設定し遺構の確認を行うことができた。床面上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどがより北側の比較的高い位置で確認されている。

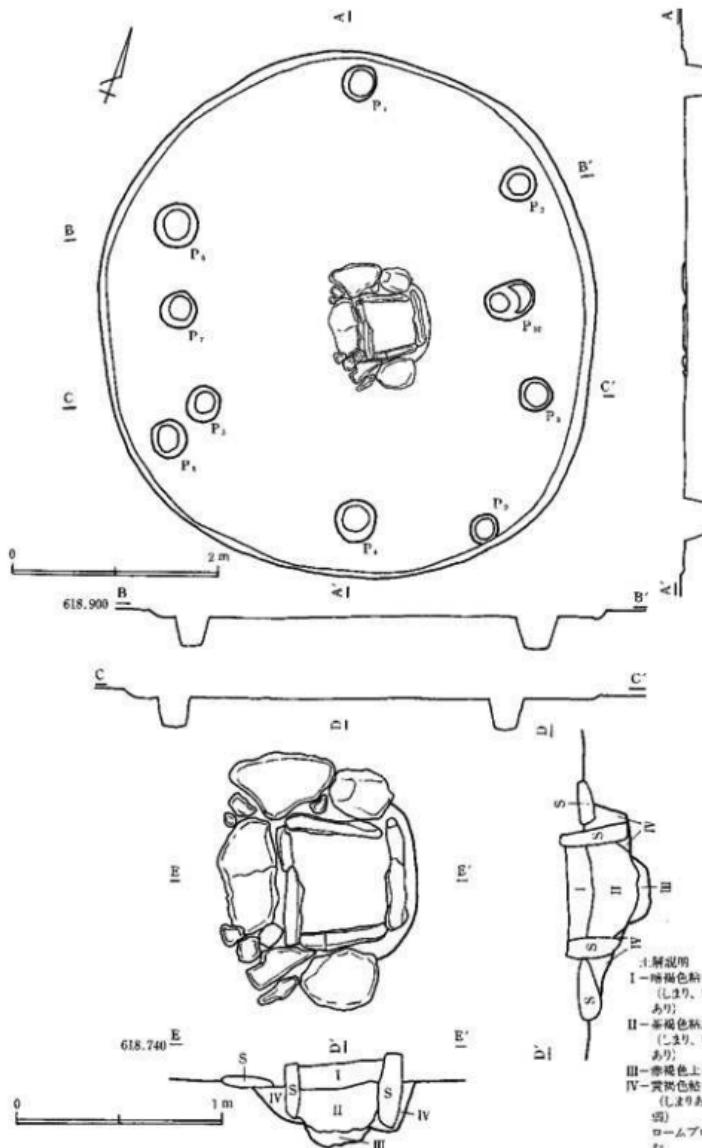
## 第4号住居址

(位置) C-4-1グリッドに位置する。

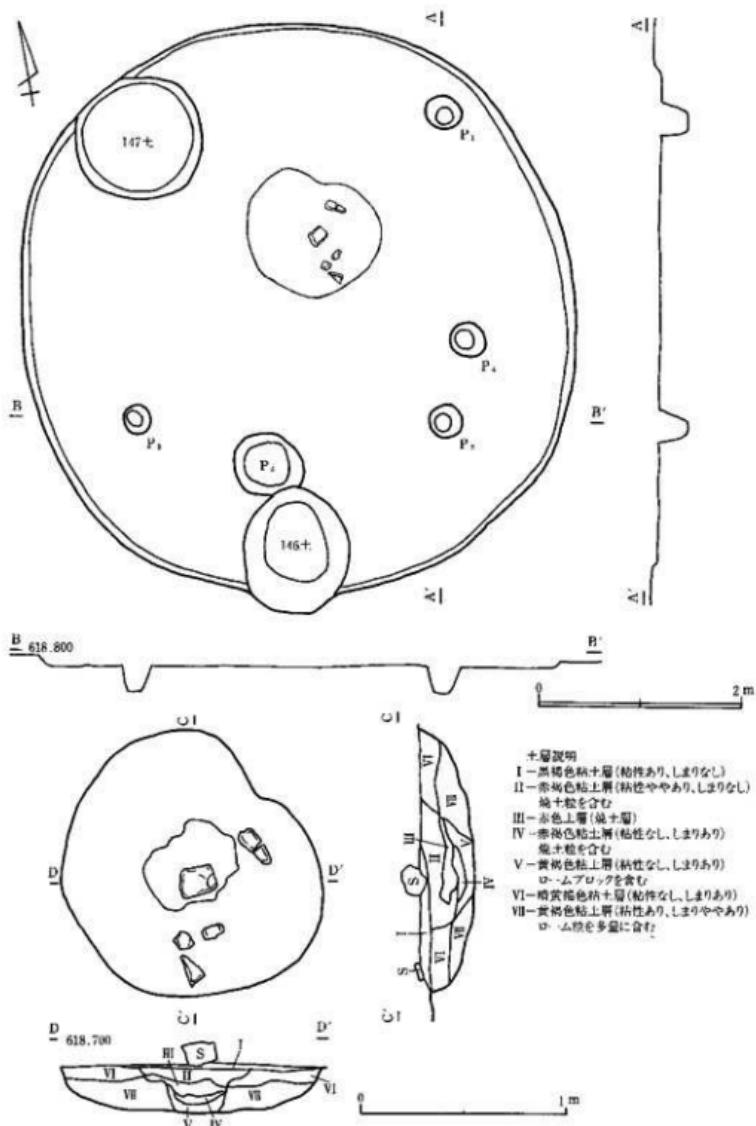
(形状・規模) このグリッドから南西にかけて黒色土が堆積した隠れ谷があり、遺物の集中する部分の調査によって検出された住居である。遺構内の覆土は比較的浅く、壁の立上りは約北



第4図 第2号住居断面実測図 (1/80)、炉 (1/40)



第5図 第3号住居址実測図



第6図 第4号住居址実測図

で20cm南で5cmを測る程度であった。このような状況から壁の精査により確認できた住居の規模は、直径約5.6mの円形を呈すると思われる。

(炉) 住居址中央部よりやや北側に位置する。すでに炉の石は抜き取られており、掘り方のみが検出された。掘り方は直径130cmの不定円形を呈し、深さ20cmを測る。焼土の残存状況は良好であった。

(柱穴) ピットは5ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3が主柱穴と考えられ、残りの1本は、第147号土坑により確認できなかった。

(その他の施設) 遺構内あるいは切り合いの関係として第146・147号土坑がある。

第146号土坑は住居との位置関係からこれに伴うものではないが、第147号土坑は壁を共有することなどからこの住居の施設の一部と思われる。

(出土遺物) 遺構が確認できた場所は、黒色土の堆積があり、遺構精査中より遺物の集中する場所であり、トレンチを設定し遺構の確認を行うことができた。床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のはほとんどが住居内中央付近より北側の比較的高い位置で確認されている。

## 第5号住居址

(位置) C-3-4とC-4-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 第2号住居址と同様に全体的に耕作による削平を受けてはいるが、壁の立上りは20cmほど残っており、長軸約5.5m、短軸約4.5mの南北に偏平する楕円形を呈する。

(炉) 住居址中央部よりやや北側に位置する。すでに炉の石は抜き取られており、西と北側に若干炉石の破片が残されているのみであり、掘り方は直径110cmの不定円形を呈し、深さ30cmを測る。焼土の残存状況は、良好であった。

(柱穴) ピットは7ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4が主柱穴と考えられる。

(その他の施設) 埋甕が2ヶ所より確認され南よりのものを埋甕1とし、これより北へ70cmほど離れた地点に埋甕2が存在する。埋甕1の依存状態は不良であるが、埋甕2は良好であった。

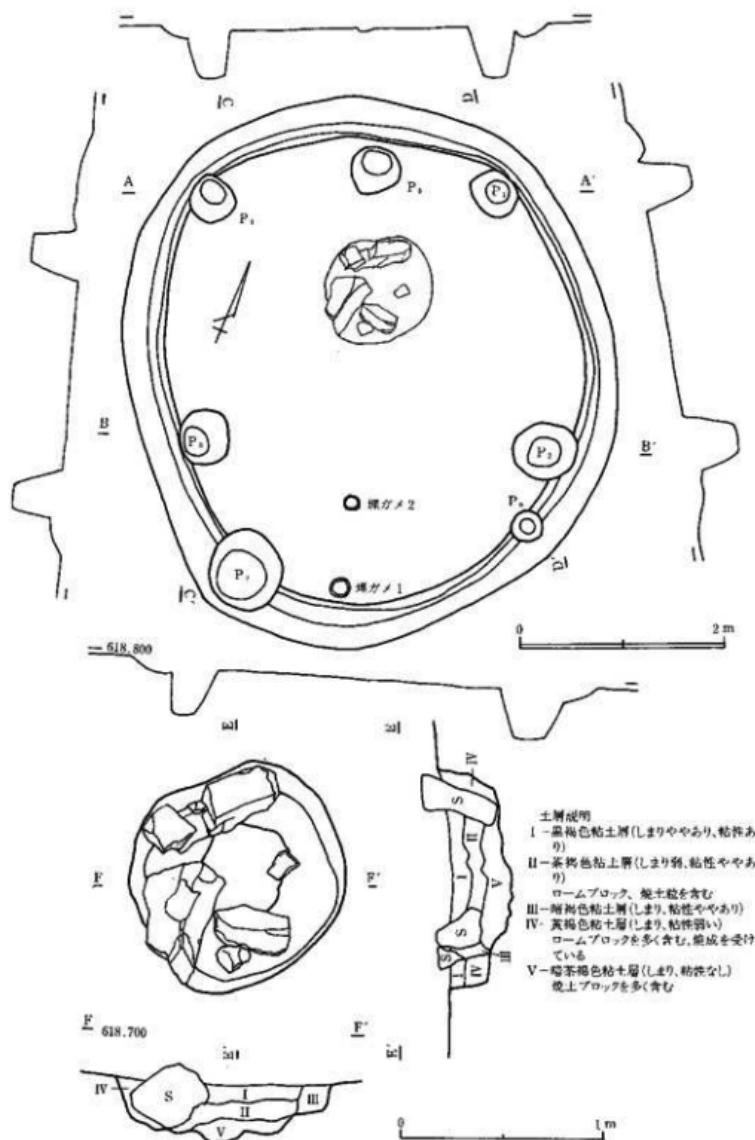
(出土遺物) 遺構が確認できた場所は、黒色土の堆積が厚くなりはじめる地点であり、遺構精査中より遺物の集中する場所であり、トレンチを設定し遺構の確認を行うことができた。

床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のはほとんどが住居内中央付近より北側からの比較的高い位置で確認されている。

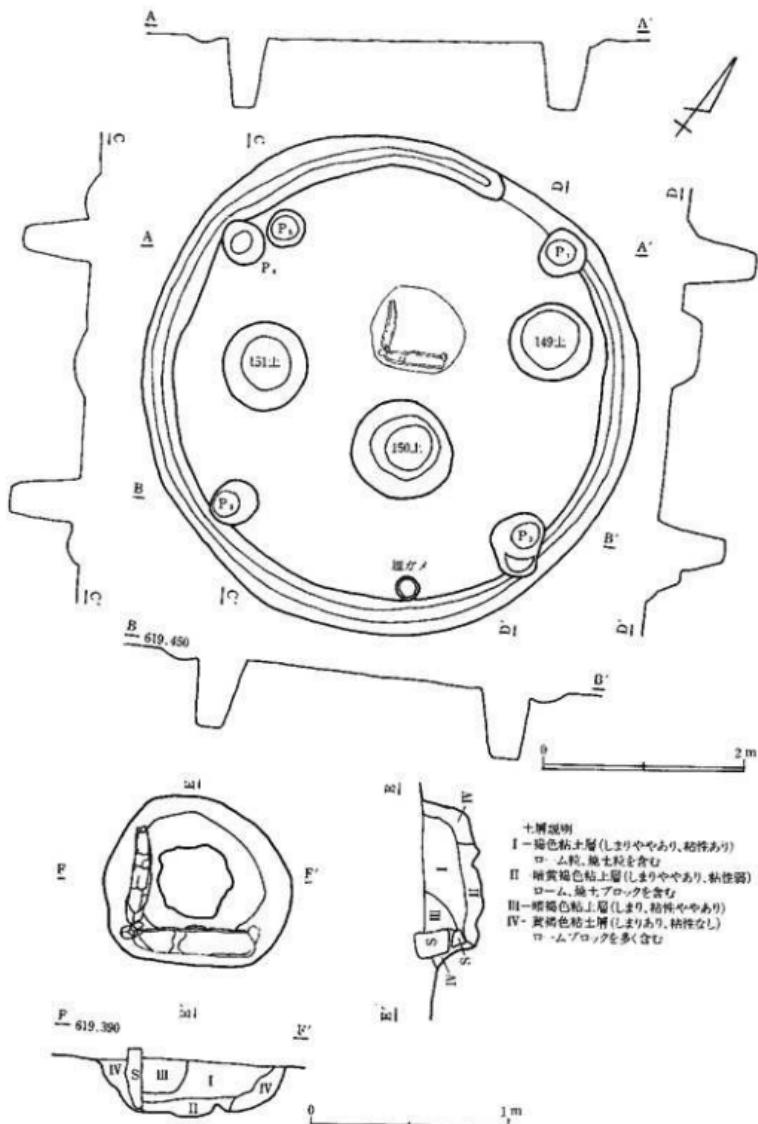
## 第6号住居址

(位置) D-3-2グリッドに位置する。

(形状・規模) 全体的には耕作による削平を受けており、壁の立上りは20cmを測り、直径約6



第7図 第5号住居址実測図



第8図 第6号住居址実測図

mの円形を呈し、北壁の一部を残して、周溝は壁直下に全周する。

(炉) 住居址中央部よりやや北側に位置する。炉を構成する北と東の石は抜き取られているが、残されていた石は現位置を保っているようである。掘り方は東西90cm、南北80cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。焼土の残存状況は、良好であった。

(柱穴) ピットは6ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4が主柱穴と考えられる。

(その他の施設) 南の壁直下に埋甕が一個体設置されていた。

(出土遺物) 床面上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近より北側からの比較的高い位置で確認されている。

#### 第7号住居址

(位置) E-4-4とE-5-3グリッドに位置する。

(形状・規模) この付近一帯は全体的に南傾斜がきつくなるため、北壁の残存状況は良好であるが、南壁はほとんど残っていない状況であり、第4号溝により南側は切られている。残存している部分より推測すると、…辺約6mの隅丸方形を呈し、周溝は壁直下に全周すると思われる。

(炉) 住居址中央部よりかなり北側に位置する。炉石は南側の石を残してすでに抜き取られており、周囲に破片が散乱していた。掘り方は直径約1.2mの不定円形を呈し、深さ30cmを測る。焼土の状況は、良好であった。

(柱穴) 床面上にピットは9ヶ所、周溝内に8ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4が主柱穴と考えられ、周溝内のものは土止め用の杭と思われる。

(その他の施設) 南の壁直下と思われる場所に埋甕が、東西に二個体並んで設置されていた。住居址中央部よりやや南側に赤褐色に変色した場所がみられ、地焼炉と思われる。

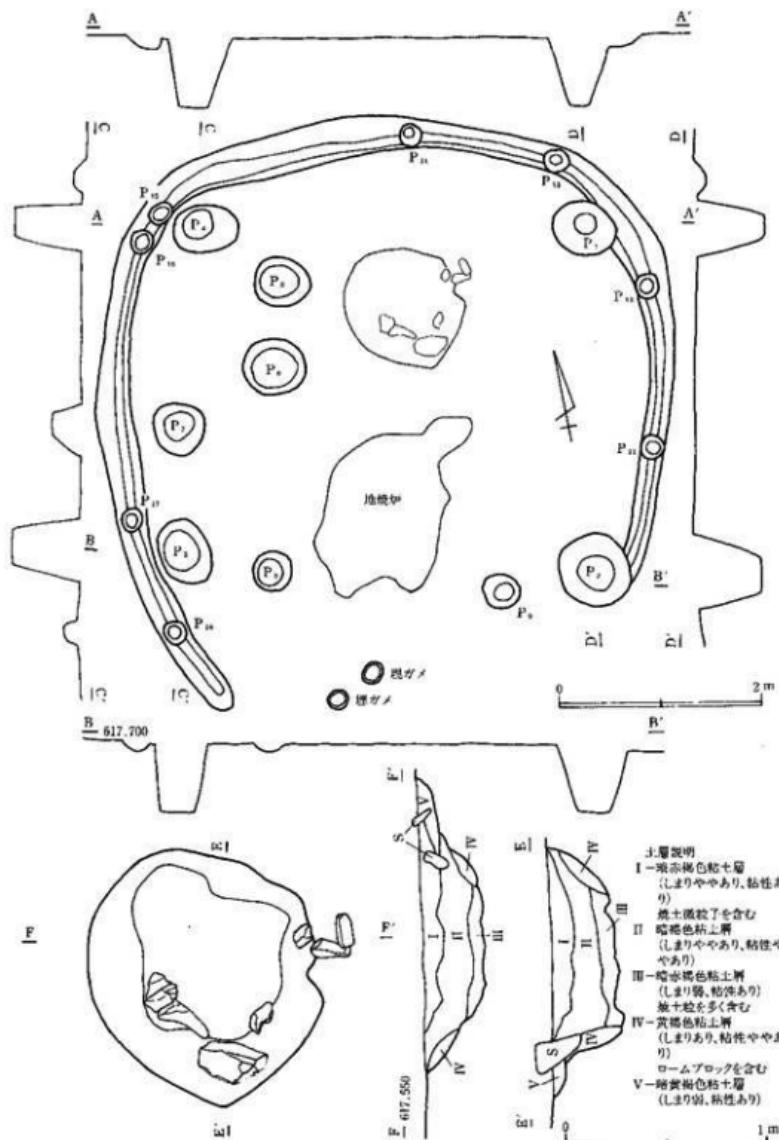
(出土遺物) 床面上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近の比較的高い位置で確認されている。

#### 第8号住居址

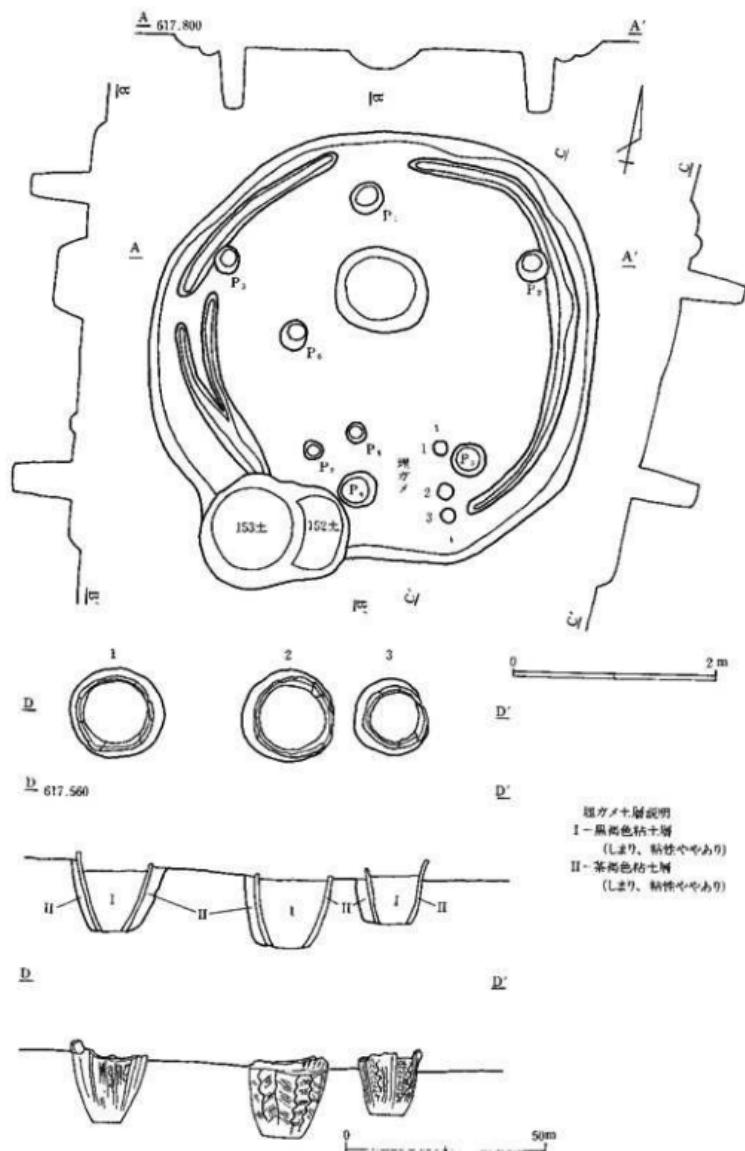
(位置) D-5-3とE-5-1グリッドに位置する。

(形状・規模) この付近一帯は全体的に傾斜が緩やかになり沢の中のような状況で比較的フラットな面を構成しているため、全体的に黒色七の堆積は厚くなっている。土坑内精査中に焼土層が確認されたことから掘広げたことにより確認された住居址である。形態は直徑約4mの円形を呈し、周溝は3カ所で分断されて南西の周溝は2又に分れていることや壁より若干離れた所を周溝が回るため、建て替えが予想される。

(炉) 炉と推測される部分は、住居址中央部よりかなり北側に位置する。炉石はすでに抜き取



第9図 第7号住居址実測図



第10図 第8号住居址実測図

られており、掘り方は直径約1.2mの円形を呈し、深さ30cmを測る。焼土の状況は、良好であった。

(柱穴) 床面上にピットは8ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4・5が主柱穴と考えられる。

(その他の施設) 南の壁直下に埋甕が、南北に三個体一直線に並んで設置されていた。住居址の南西側に第152・153号土壙により切られている。

(出土遺物) 床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近の比較的高い位置で確認されている。

#### 第9号住居址

(位置) E-5-1とE-5-2グリッドに位置する。

(形状・規模) 第8号住居址と同様に沢の中の比較的フラットな面に位置する。住居址の形態は南北約5m、東西約4.5mの楕円形を呈し、周溝が壁直下に全周する。

(炉) 住居址中央部よりかなり北側に位置する。炉石はすでに抜き取られており、掘り方は一辺約80cmの方形を呈し、深さ40cmを測る。焼土の状況は、良好であった。

(柱穴) 床面上にピットは10ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4が主柱穴と考えられる。

(その他の施設) 南の壁直下に埋甕が、南西から北東にかけて二個体並んで設置されていた。

(出土遺物) 床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近より北側からの比較的高い位置で確認されている。

#### 第10号住居址

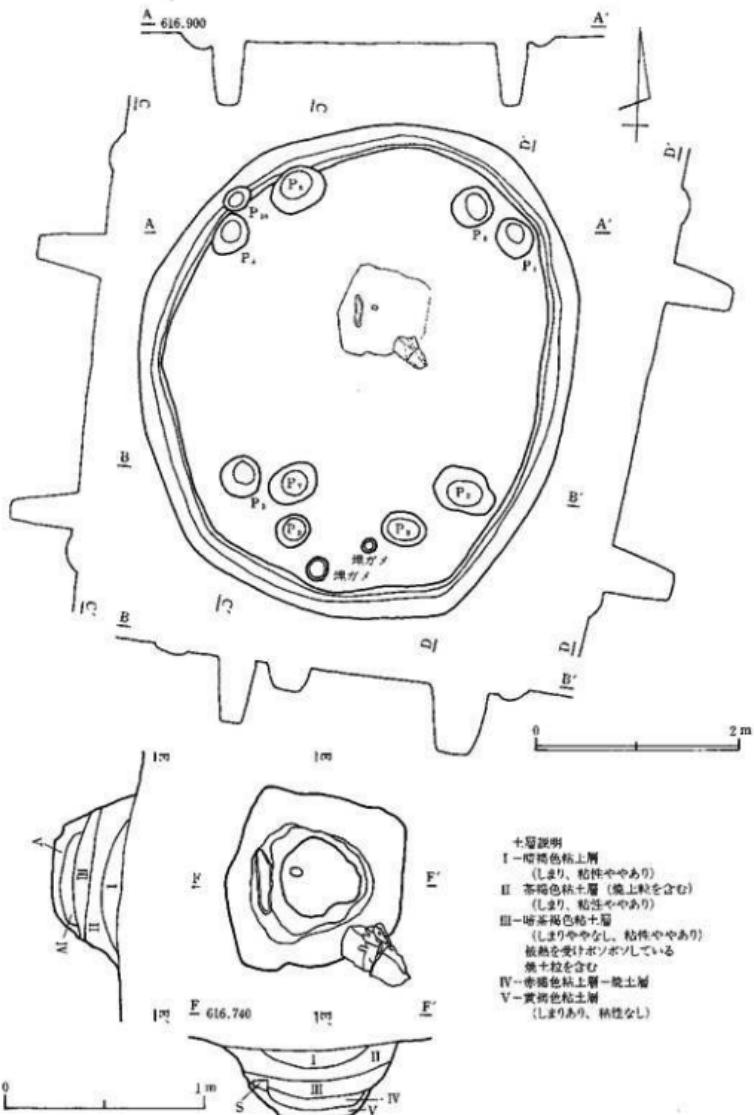
(位置) F-5-1グリッドに位置する。

(形状・規模) 東西に走る第4号溝の北に位置し直径約4mの円形を呈し、周溝は壁直下に全周する住居である。

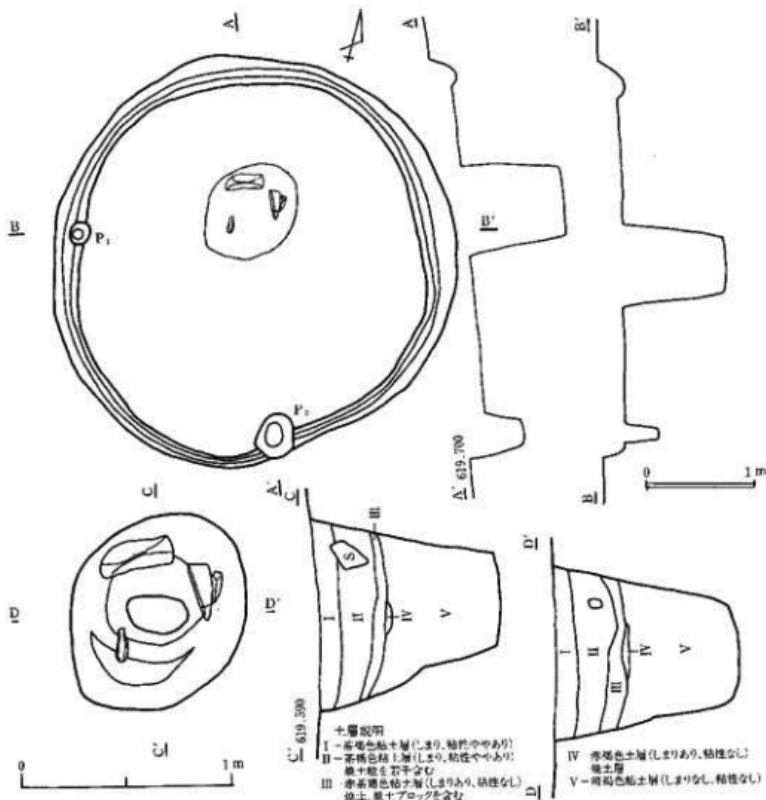
(炉) 住居址中央部よりかなり北側に位置する。炉石はすでに抜き取られており、掘り方は長軸約1.1m、短軸80cmの楕円形を呈し、深さ85cmを測る。焼土層は、床面より40cmのところに存在し、残存状況は良好であった。このような状況から、住居址構築当時にこの炉と思われる土坑は存在し、これを転用してかにしたと思われる。

(柱穴) 周溝内にピットは2ヶ所確認されており、すべて住居に伴うものであろう。

(出土遺物) 床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近の比較的高い位置で確認されている。



第11図 第9号住居址発掘図



第12図 第10号住居址実測図

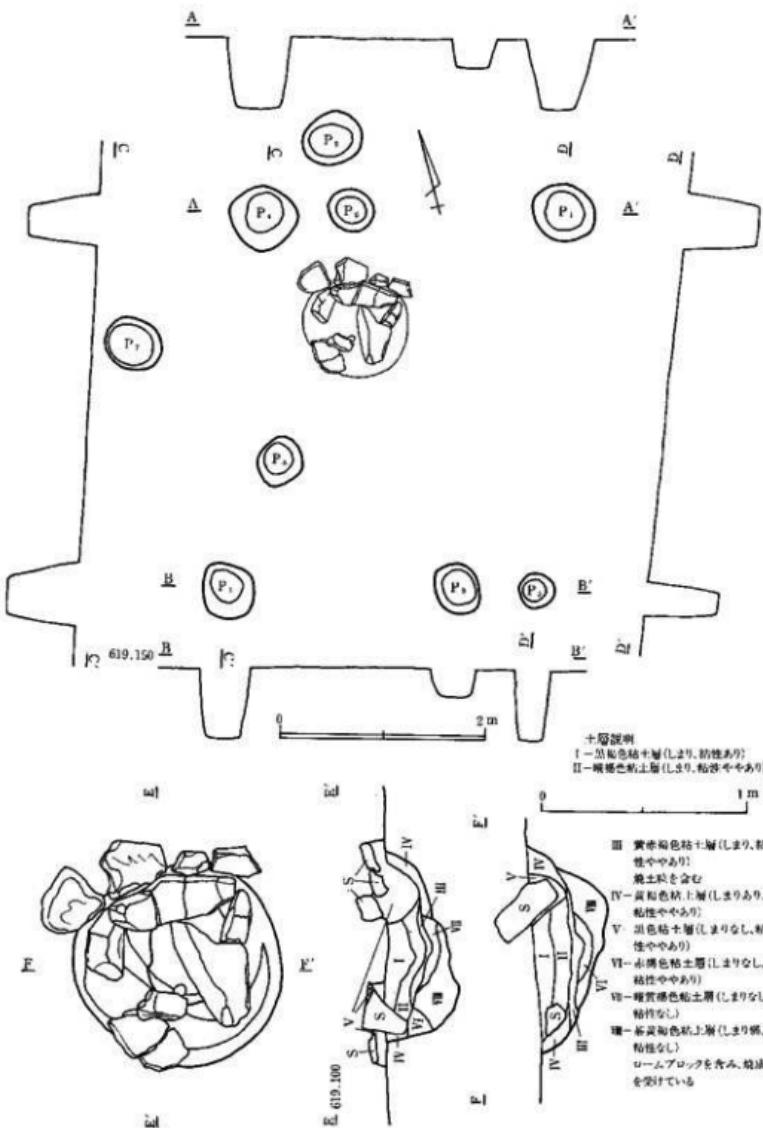
### 第11号住居址

(位置) E-5-3、E-5-4、F-5-2グリッドに位置する。

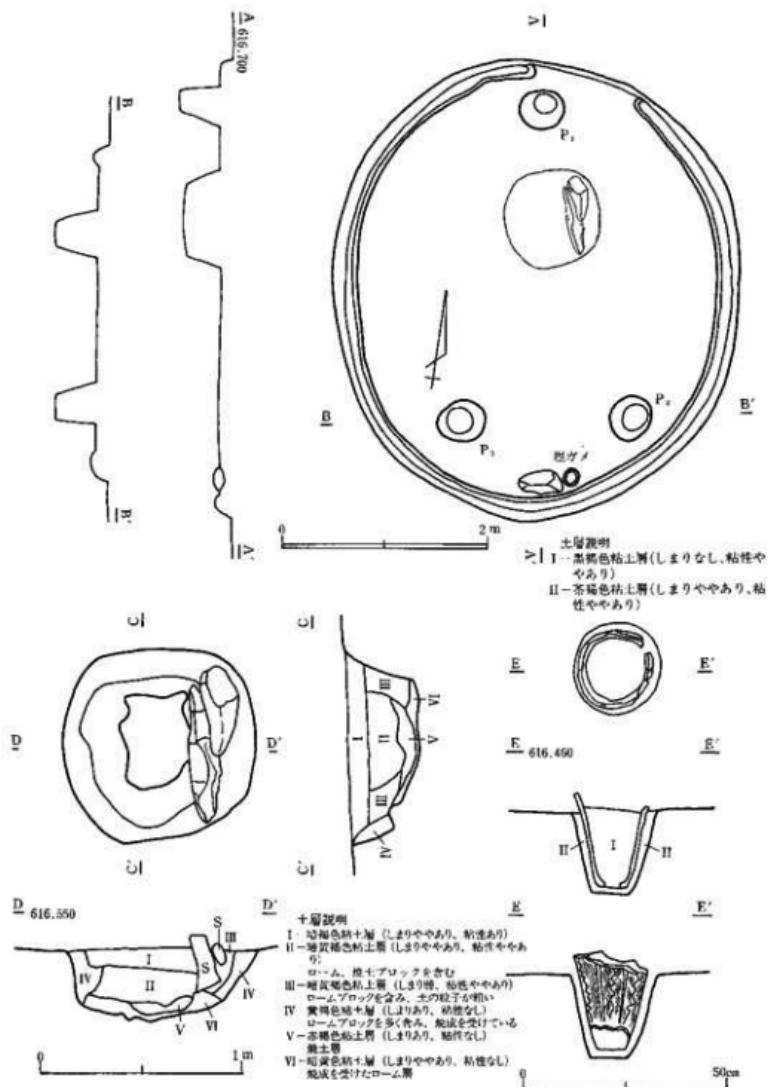
(形状・規模) 表土除去途中において集石が検出され、集石の調査により炉と確認された住居で、精査を行ったが形状、規模とも示すような埋込みは確認できなかったが、検出されたピット等の配置状況により直径約5mの円形あるいは椭円形を呈すると思われる。

(炉) 住居址中央部よりかなり北側に位置すると思われ、炉はすでに取り壊されており、周辺に石が散乱していた。掘り方は直径約1mの円形を早し、深さ40cmを測る。焼土の残存状況は、良好であった。

(柱穴) 炉周辺にピットは9ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3・4が主柱穴と考えられる。



第13図 第11号住居址実測図



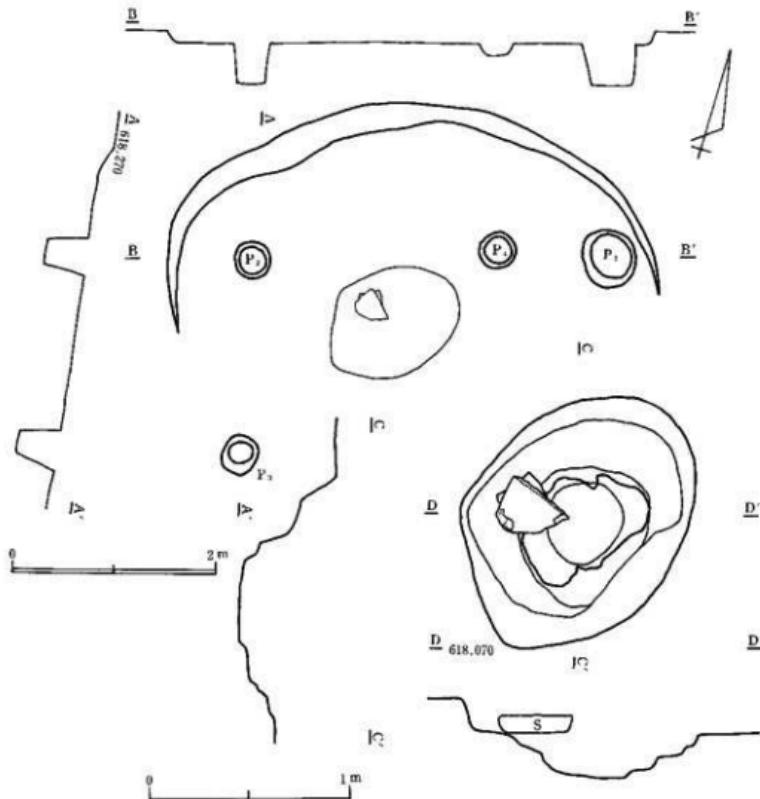
第14図 第12号住居址実測図

### 第12号住居址

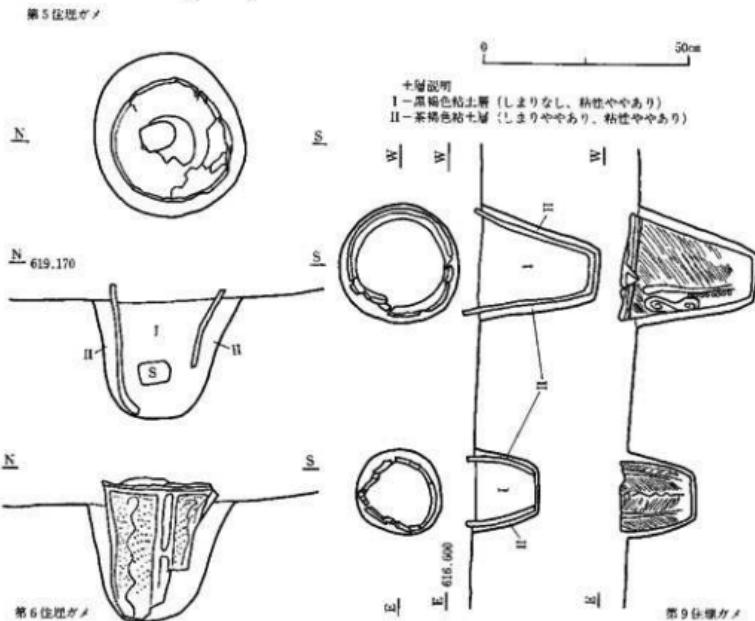
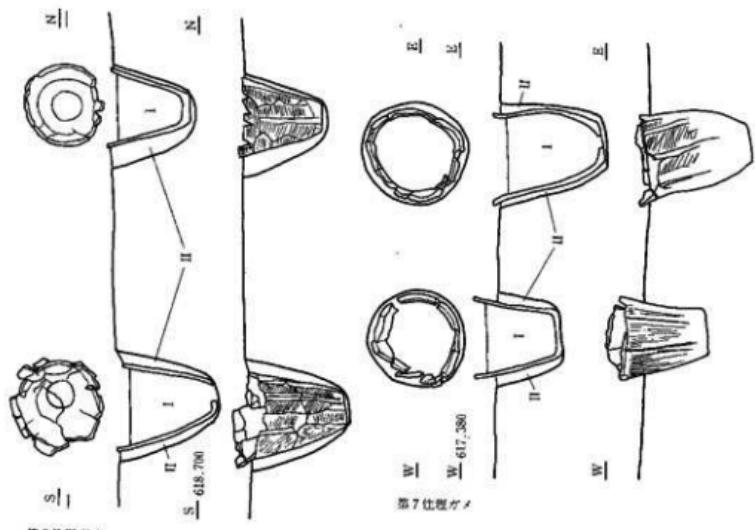
(位置) F-5-2 グリッドに位置する。

(形状・規模) 東西に走る第4号溝の南に位置し南北約4.5m、東西約4mの橢円形を呈し、周溝は北壁の一部分を残し壁直下に全周する住居である。

(炉) 住居址中央部よりかなり北側に位置する。炉石はすでに東の炉石を残し抜き取られており、掘り方は一辺約1mの方形を呈し、深さは約40cmを測る。焼土の残存状況は、良好であった。



第15図 第13号住居実測図



第16図 第5、6、7、9号住居址埋ガメ実測図

(柱穴) 床面上にピットは3ヶ所確認されており、すべて住居に伴うものである。

(その他の施設) 南の壁直下に埋甕が一個体と自然甕が1つ設置されていた。この自然甕は、住居に伴うものと思われ、出入口部の高さ調節のためのものであろう。

(出土遺物) 床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近の比較的高い位置で確認されている。

### 第13号住居址

(位置) E-4-2とE-4-4グリッドに位置する。

(形状・規模) 第7号住居址と同様に斜面上に位置する住居であり、第4号溝により南側の半分以上が削り取られていた住居である。精査を行ったが形状、規模とも不明であるが、検出されたピット等の配置状況により直径約5mの円形あるいは梢円形を呈すると思われる。

(か) 第4号溝の精査中に発見され、位置は住居址中央部よりかなり北側にあると思われ、炉石はすでに抜き取られており、掘り方は長軸約1.3m、短軸約1mの梢円形を呈し、深さ40cmを測る。焼土の残存状況は、良好であった。

(柱穴) 床面上にピットは4ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さからP1・2・3が主柱穴と考えられる。

## 2 土 壤

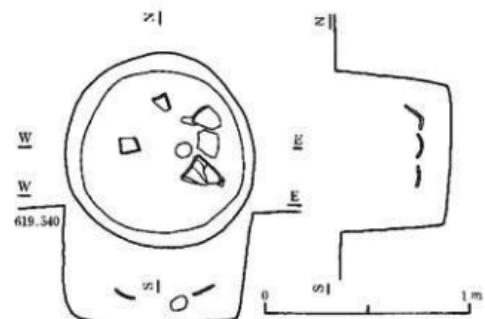
調査区域内の北西域を中心として上塙が187基確認されており、特に土塙が集中する部分も確認されている。この部分は、調査区の北西部の一番高いところからであるが、この部分は桑畠であったため耕作が激しく行われたことが推測され、削平及び後世の擾乱が考えられる。本報告では、土塙内より遺物が出土したものを中心に行う。

### 第1号土塙

(位置) A-5-1グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径95cmの円形を呈し、深さは約60cmを測る。

(遺物) 土塙内部の北側よりほぼ完全形の深鉢1点と凹石1点が底から15cmを測るところから出土している。



### 第4号土塙

(位置) E-2-4グリッドに位置

第17図 第1号土塙実測図

する。

(形状・規模) 直径1.4mの不定円形を呈し、深さは約80cmを測る。

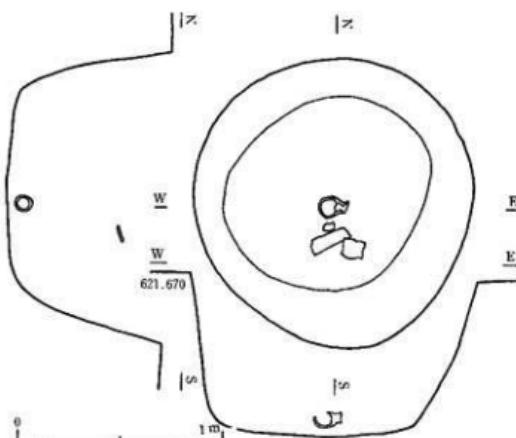
(遺物) 土壙内部のほぼ中心から縄文土器が4点出土している。

#### 第12号土壙

(位置) B-5-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 長軸約1.2m、短軸約1mの不定円形を呈し、深さは約75cmを測る。

(遺物) 土壙内部のほぼ中心から縄文土器が出土している。



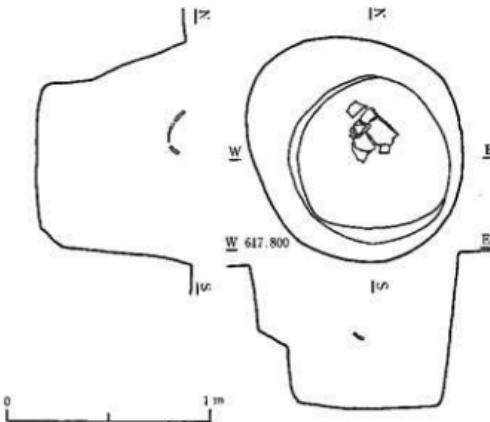
第18図 第4号土壙実測図

#### 第14号土壙

(位置) B-5-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約1mの不定円形を呈し、深さは約45cmを測る。

(遺物) 土壙内部の西側から縄文土器が1点出土している。



第19図 第12号土壙実測図

#### 第41号土壙

(位置) F-2-1グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約1.2mの不定円形を呈し、深さは

約70cmを測る。

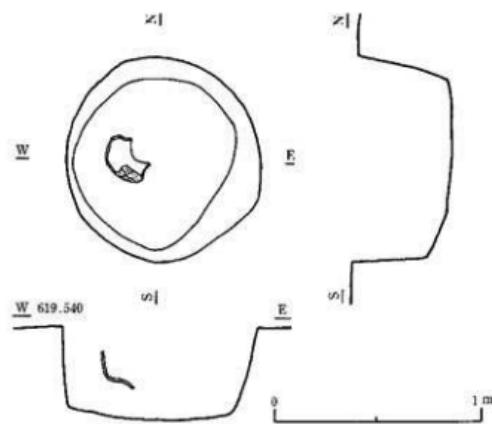
(遺物) 土壙内部の北側からほぼ完形の縄文土器の浅鉢1点と縄文土器5点が出土している。

#### 第42号土壙

(位置) B-5-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約60cmの不定円形を呈し、深さは約25cmを測り、底はU字状に埋り込まれている。

(遺物) 土壙内部の上面から縄文土器10点が出土している。



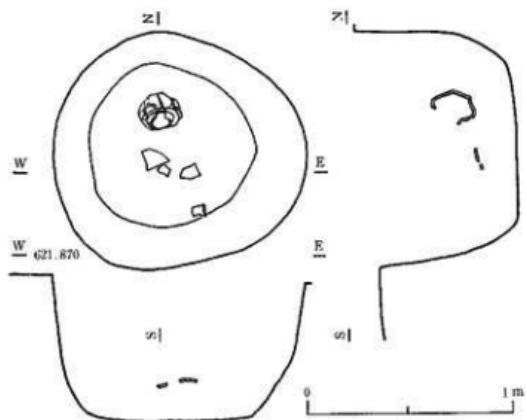
第20図 第14号土壙実測図

#### 第43号土壙

(位置) E-2-2グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約1.3mの円形を呈し、深さは約80cmを測る。

(遺物) 土壙内部の南よりの底から20cmほど上から縄文土器の深鉢1個体分と石錐1点が出土している。



第21図 第41号土壙実測図

#### 第47号土壙

(位置) F-2-2グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約1.4mの円形を呈し、深さは約1mを測る。

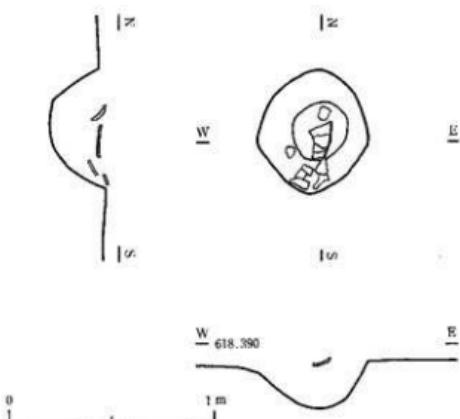
(遺物) 土壙内部には確認面より40cmと70cmの2層に分かれて縄文土器の深鉢2個体分と磨石1点が出土している。

#### 第49号土壙

(位置) E-3-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 長軸約95cm、短軸約80cmの橢円形を呈し、深さは約70cmを測る。

(遺物) 土壙内部のはば底直上から器台部を欠損した縄文土器の深鉢1個体が出土している。



第22図 第42号土壙実測図

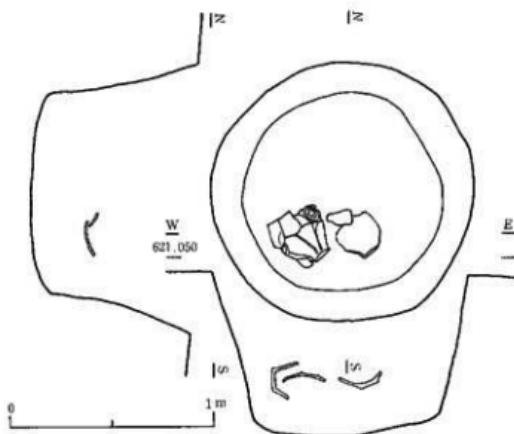
#### 第50号土壙

(位置) F-4-1グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約1.2mの円形を呈し、深さは約75cmを測る。

(遺物) 土壙内部には上部下半から底部にかけて人頭大の礫が投げ込まれるかのように混入していた。

そのなかに磨石3点、やや偏平した疑丸石1点が出土している。



第23図 第43号土壙実測図

#### 第53号土壙

(位置) F-3-2グリッドに位置し、第52号土壙と

重複する。

(形状・規模) 長軸約1.6m、短軸約1.3mの楕円形を呈し、深さは約90cmを測る。

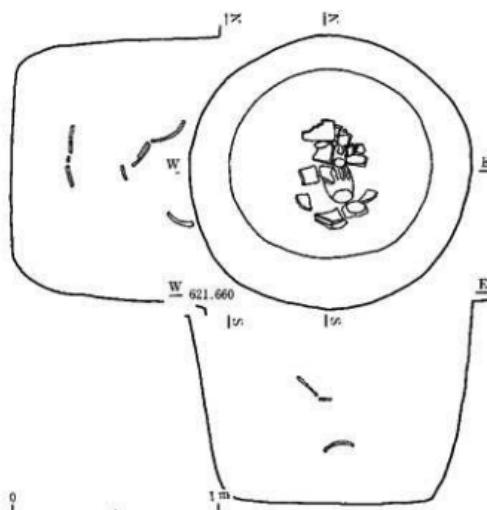
(遺物) 土壙内底部に土丘で押しつぶされたかのようにはば光形の縄文土器深鉢が逆位で1点出土している。

#### 第62号土壙

(位置) E-2-1・2グリッドに位置し、第63・64号土坑と重複する。

(形状・規模) 直径約1.2mの円形を呈すると思われ、深さは約60cmを測る。

(遺物) 土壙内ほぼ中間の北よりに縄文土器が一括出土している。



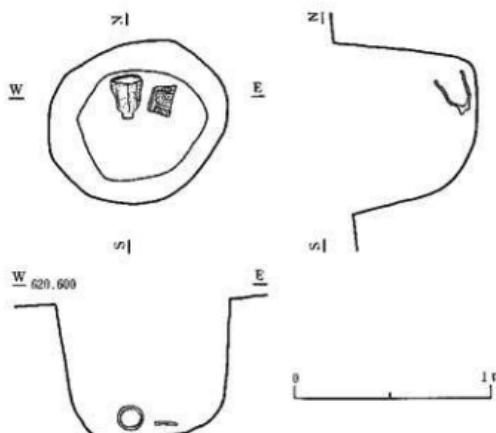
第24図 第47号土壙実測図

#### 第63号土壙

(位置) E-2-1・2グリッドに位置し、第62・64号土坑と重複する。

(形状・規模) 直径約1.2mの円形を呈すると思われ、深さは約90cmを測る。

(遺物) 土壙内ほぼ中心の中間位置より縄文土器が一括出土している。



第25図 第49号土壙実測図

#### 第65号土壙

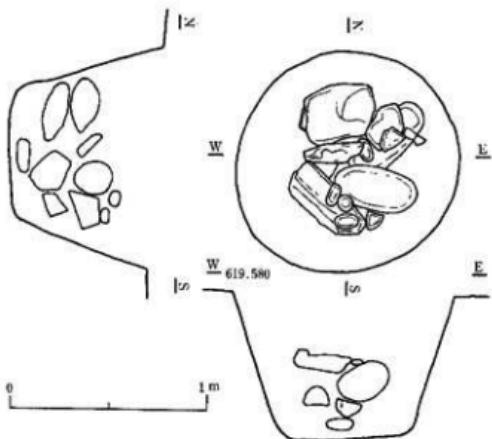
第1号井戸と改名。

### 第94号土壤

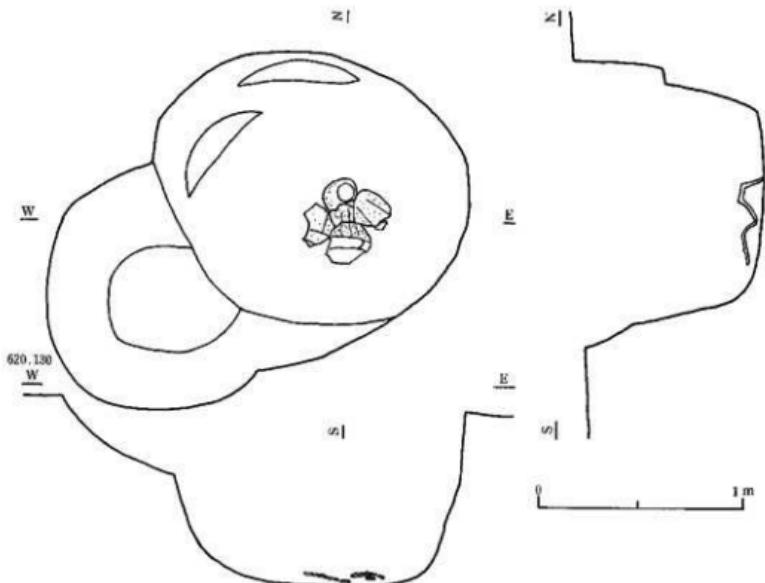
(位置) F - 2 - 4 グリッド  
ドに位置する。

(形状・規模) 直径約1.2m  
の円形を呈し、深さは約70  
cmを測る。

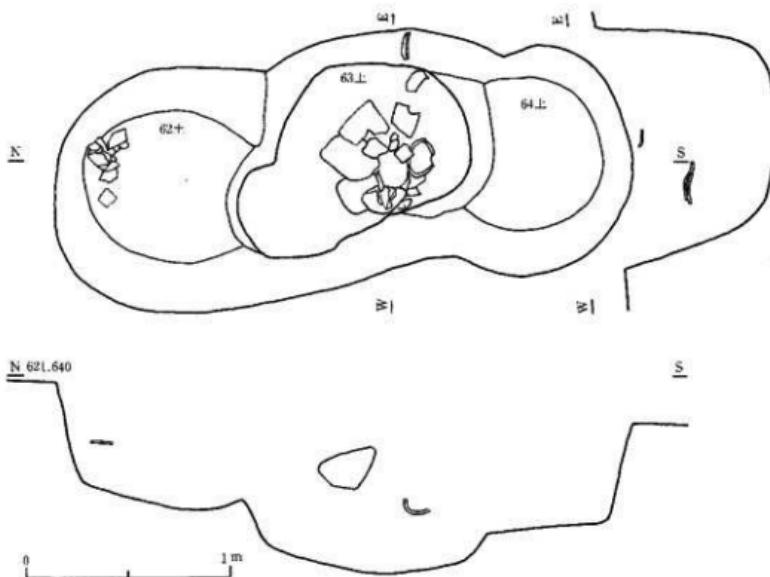
(遺物) 覆土内の上面より  
縄文土器が3点出土してい  
る。



第26図 第50号土壤実測図



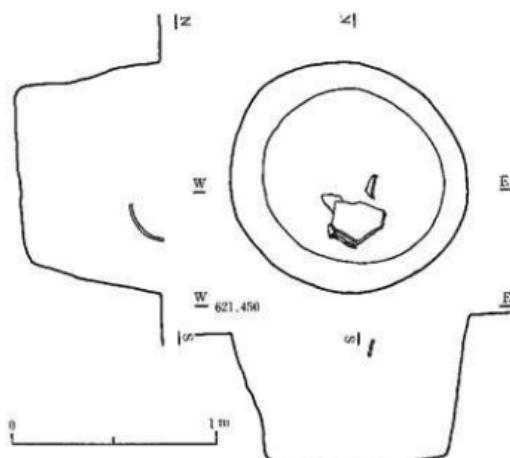
第27図 第53号土壤実測図



第28図 第62、63、64号土壙実測図

(形状・規模) 第95号土壙は長軸1.8m、短軸約1.4mの梢円形を呈し深さは約70cmを測り、第96号土壙は直径80cmのほぼ円形を呈し、そのなかにすっぽりはある形で存在し、深さは約90cmを測る。

(遺物) 底部から20cmほど上がった南よりの部分から口縁部を欠損した縄文土器の深鉢が1点出土している。



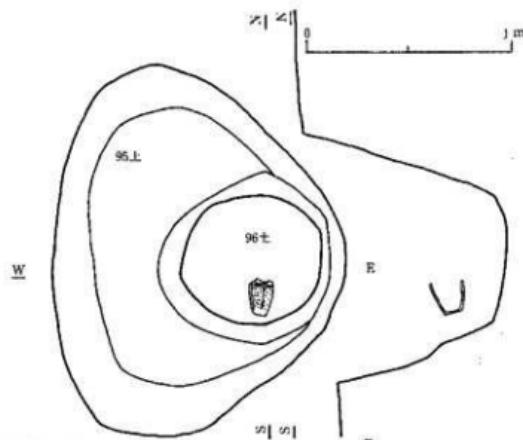
第29図 第94号土壙実測図

### 第132号土壙

(位置) D - 3 - 2 グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径約1.2mの円形を呈し、深さは約70cmを測る。

(遺物) 土壙内には中心部の中間より縄文土器深鉢が1点出土している。



### 第174号土壙

(位置) F - 3 - 2 グリッドに位置し、第175号土壙と重複する。

(形状・規模) 第175号土壙とあわせて長軸1.6m、短軸約1mの楕円形を呈し第175号土壙は深さ約60cmを測り、第174号土壙は、深さは約80cmを測る。

(遺物) 底部から20cmほど上がった南よりの部分からほぼ完形の小型の縄文土器の深鉢が横倒しの状態で1点出土している。

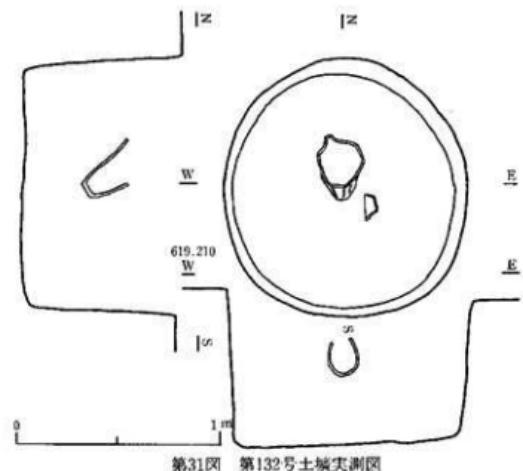
### 第179号土壙

(位置) B - 2 - 3 グリッドに位置する。

(形状・規模) 東西0.8m、南北約0.8mの楕円形を呈し深さ約15cmを測る。

(遺物) 土壙内には中央付近の上面において、石皿の

第30図 第95、96号土壙実測図



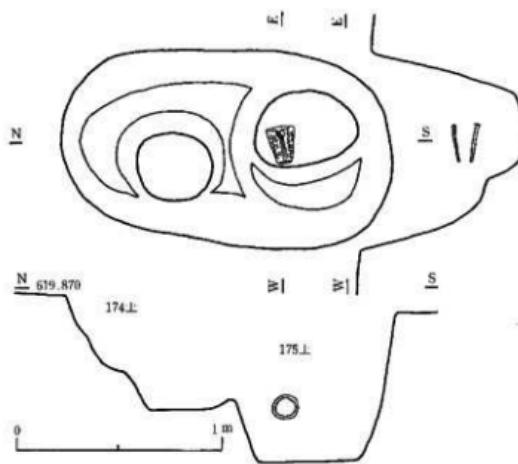
底部を上にして確認され、  
5 cmほど離れたところより  
磨石が1点出土している。

#### 第181号土壤

(位置) E - 5 - 3 グリッドの第4号溝中に位置する。

(形状・規模) 直径1.2mの  
ほぼ円形を呈し、深さは約  
80cmを測る。

(遺物) 底部から20cmほど  
上がった雨よりの部分から  
口縁部と胴体のほぼ半分を  
欠く繩文土器の深鉢が横倒  
しの状態で1点出土してい  
る。

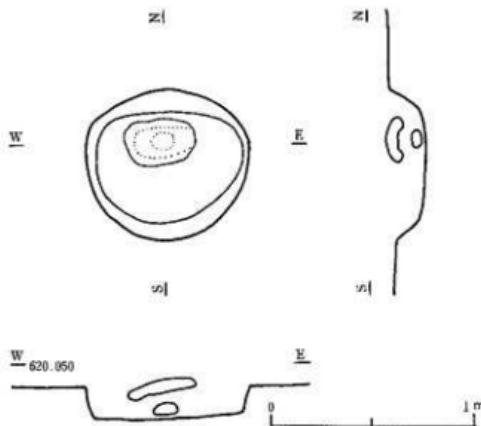


第32図 第174、175号土壤実測図

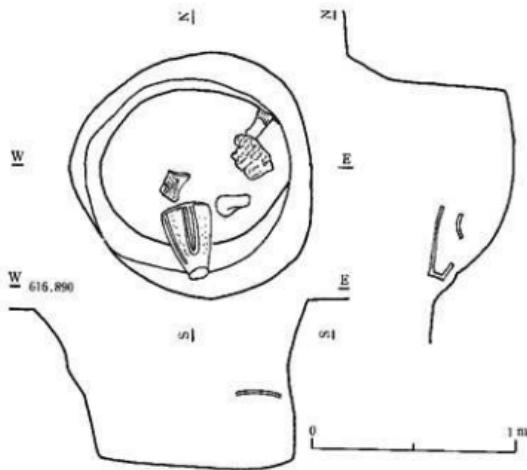
#### 第186号土壤

(位置) C - 2 - 2 グリッドに位置する。

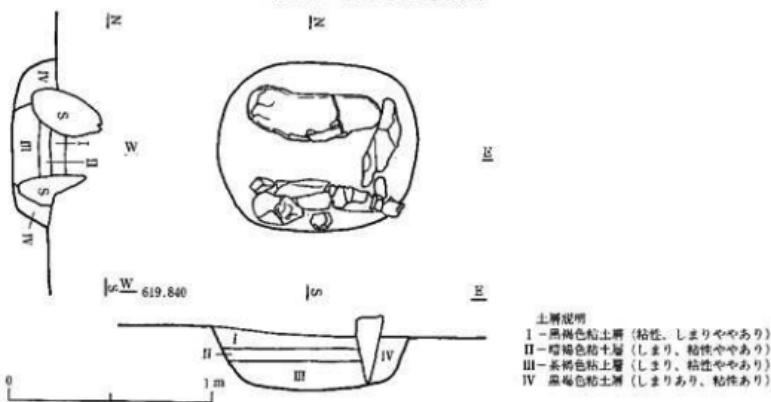
(形状・規模) 東西約1 m、  
南北約0.9mのほぼ方形を  
呈し、深さは約30cmを測り、  
遺構検出において、立石を  
伴う土壤とされていたが、  
掘進めた段階でかと確認さ  
れた。しかし、周辺の精査  
を行ったが、これに伴うと  
思われる、柱穴は確認され  
なかったため、単独のかで  
あろう。



第33図 第179号土壤実測図



第34図 第181号土塚実測図



第35図 第186号土塚実測図

### 3 井戸

#### 第1号井戸

(位置) F-4-2 グリッドに位置する。

(形状・規模) 一辺約1.8mの隅丸方形呈し、深さは約4mを測る。確認面から下部1mまでは漏斗状に上が開く形を呈し、それ以下約1.5mまではやや下方に開きその後はしだいに閉じて行き底部はU字状である。遺構検出当初は、集石土壙と思われるほどの礫の混入がみられたが、

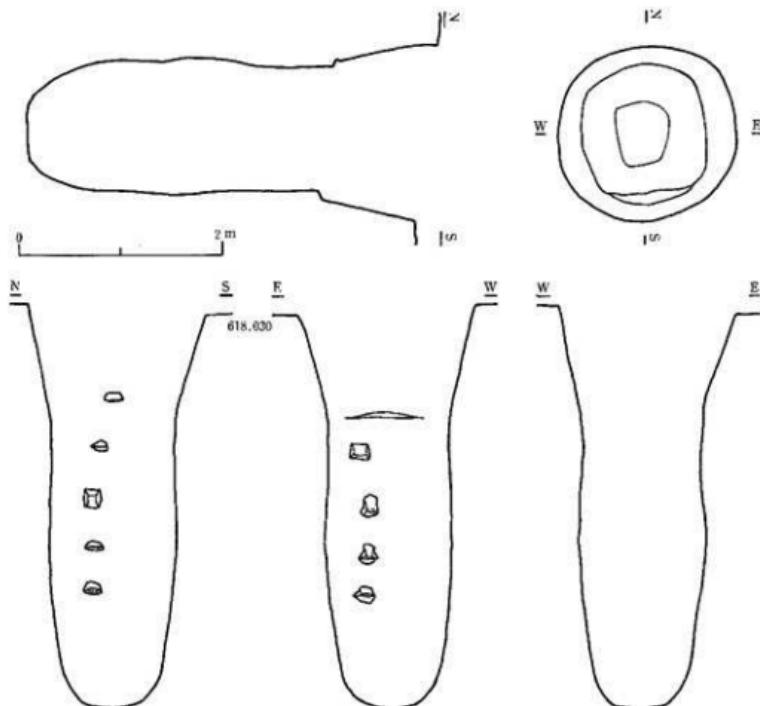
遺構内を掘り下げるにしたがって、ある一定の間隔で南と北の相対する壁面に7~11cmの奥行を測る方形ないし円形の凹みが確認できたことから、これは井戸等を比較的深く掘る際に足や手を掛けるための掘込みと思われるため井戸と断定した。しかし、調査中において遺構内の水の湧出はみられなかった。

(遺物) 確認面から60cmまでの部分には投げ込まれたかのように河原石や石器が混入していた。

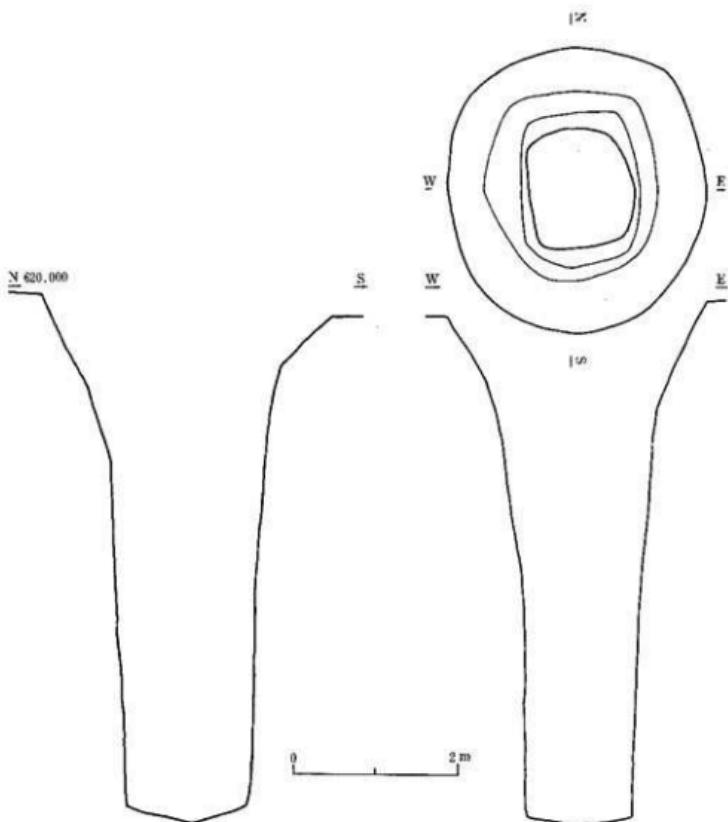
## 第2号井戸

(位置) E-3-4グリッドに位置する。

(形状・規模) 南北約3.5m、東西約3.2mの橢円形を呈し、深さは約6.5mを測る。確認面から下部2mまでは漏斗状に上が開く形を呈し、しだいに閉じて行き底部はU字状である。遺構検出当初は、比較的大型の掘込みであったため住居址と思われたが、遺構内を掘り下げるにしたがって、ある一定の間隔で南と東の壁面に7~11cmの奥行を測る方形ないし円形の凹みが確認



第36図 第1号井戸実測図



第37図 第2号井戸実測図

できたことから、これは井戸等を比較的深く掘る際に足や手を掛けるための掘込みと思われるため井戸と断定した。調査中において遺構内の水の湧出が若干みられた。

(遺物) 遺構中からほとんど遺物の出土はみられなかった。

#### 4 溝

##### 第1号溝

(位置) A-4 から A-6 グリッドにかけて位置する。

(形状・規模) 全長約50m、幅1~1.5m、深さ0.1~1mを測り、北から南へほぼ一直線で走っている。溝の底部の形態は三角の形をしたいわゆる薺研堀であること、この溝を境にして西

と東では高低差があることなどから根切りの溝と思われる。

(遺物) この溝中からはナイフ型石器1点をはじめ複数の時代の遺物が出土している。これらのことから溝が掘削されたのは、近世の所産と思われる。

### 第2号溝

(位置) D-1・2・3、E-3・4からD-4グリッドにかけて位置する。

(形状・規模) 全長約76m、幅1~2m、深さ0.1~1mを測り、北から南へかけてほぼ直角に2回屈曲し走っている。溝の底部の形態は溝幅の狭いところは三角の形をしたいわゆる薬研堀であるが、溝幅の広いところはU字状を呈している。この溝の北端を延長すると神社の鳥居付近にいたることから神社への参道としての可能性もあるが、根切りの溝とも思われる。

(遺物) この溝中からは複数の時代の遺物が出土している。これらのことから溝が掘削されたのは、近世の所産と思われる。

### 第3号溝

(位置) D-2からE-2・3グリッドにかけて位置する。

(形状・規模) 第2号溝の途中から西側に分岐し、約20m西進したところで再び第2号溝と合流し幅は60cm、深さ約80cmを測る。溝の底部の形態は三角の形をしたいわゆる薬研堀であることから根切りの溝と思われる。

(遺物) この溝中からは複数の時代の遺物が出土している。これらのことから溝が掘削されたのは、近世の所産と思われる。

### 第4号溝

(位置) C-4、D-4、E-4・5、F-5グリッドにかけて位置する。

(形状・規模) 全長約70m、幅1~3m、深さ0.1~1mを測り、東から西へかけてほぼ直角に2回屈曲し走っている。溝の底部の形態は平らであること、第2号溝と接近していることなどから、第2号溝と同様の可能性がある。

(遺物) この溝中からは複数の時代の遺物が出土している。これらのことから溝が掘削されたのは、近世の所産と思われる。

## 5 埋設土器

### 第1号埋設土器

(位置) B-4-4グリッドに位置する。

(形状・規模) 周辺の精査を行ったが、住居址等の遺構を確認することができず、単独の屋外の埋設土器と思われる。土器を埋設するピットは直径約25cm、深さ約22cmに掘られており、曾

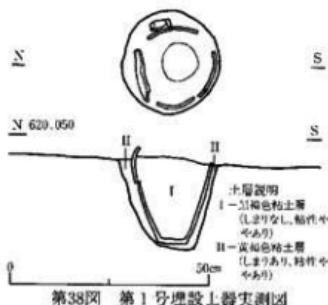
利V式期の所産であろう。

#### 第2号埋設土器

(位置) D-4-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 2個体が南北に並んで検出された。周辺の精査を行ったが、住居址等の遺構を確認することができず、単独の屋外の埋設土器と思われる。

土器を埋設するビットは直径約50cm、深さ約30cmに掘られており、両方共曾利IV式期の所産であろう。

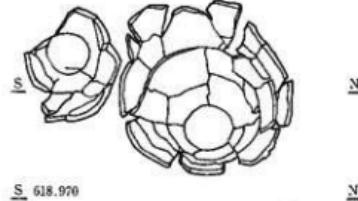


第38図 第1号埋設土器実測図

#### 第3号埋設土器

(位置) D-4-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 周辺の精査を行ったが、住居址等の遺構を確認することができず、単独の屋外の埋設土器と思われる。土器を埋設するビットは直径約24cm、深さ約25cmに掘られており、曾利III式期の所産であろう。



第39図 第2号埋設土器実測図

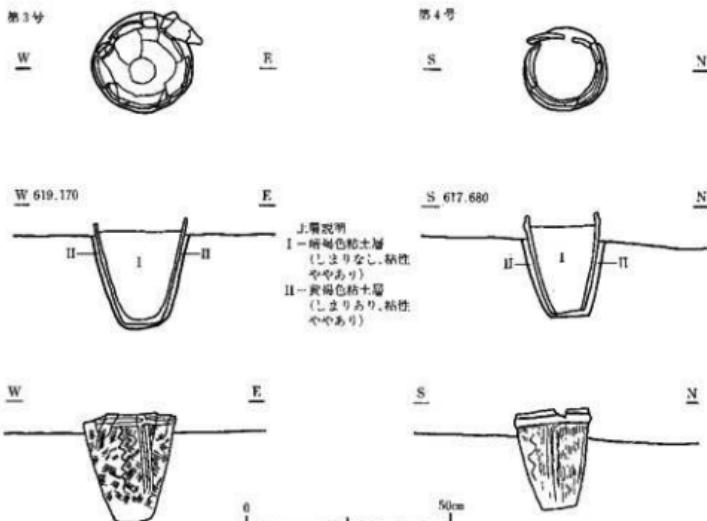
#### 第4号埋設土器

(位置) F-4-3グリッドに位置する。

(形状・規模) 周辺の精査を行ったが、住居址等の遺構を確認することができず、単独の屋外の埋設土器と思われる。土器を埋設するビットは直径約24cm、深さ約24cmに掘られており、曾利IV式期の所産であろう。



第39図 第2号埋設土器実測図



第40図 第3、4号埋設土器実測図

検出土壙表一覧

土壤No.	所在グリッド	形態	東西×南北×深さ	備考
1	A-5-1	円形	190: 190: 110	完形土器出土
2	A-5-2	円形	140: 180: 100	
3	A-5-2	円形	140: 140: 90	
4	E-2-4	円形	135: 142: 80	土器出土
5	C-3-2	卵形	140: 140: 55	石器出土
6	B-4-2	卵形	100: 100: 80	
7	B-5-4	円形	100: 100: 75	
8	B-5-4	円形	95: 95: 70	
9	B-5-1, 2	円形	140: 135: 85	
10	B-5-1, 3	円形	220: 200: 105	
11	B-4-2, 5-1	円形	120: 80: 60	
12	B-5-3	方形	115: 105: 75	土器出土
13	B-5-1	円形	160: 140: 50	
14	B-5-3	円形	100: 95: 45	土器出土
15	B-5-3	円形	100: 100: 95	
16	B-5-3	円形	110: 110: 80	
17	C-3-3	円形	140: 100: 80	
18	B-4-2	円形	100: 100: 120	
19	B-4-2	円形	120: 130: 110	
20	B-4-4	円形	110: 110: 105	
21	B-5-3	円形	120: 120: 120	22号土壤と連続
22	B-5-3	円形	50: 50: 50	21号土壤と連続

土壤No	所在グリッド	形 態	東西×南北×深さ	備 考
23	B - 4 - 2	円 形	100 : 100 : 75	
24	B - 5 - 3	円 形	100 : 100 : 70	
25	C - 2 - 3	円 形	140 : 120 : 130	
26	C - 2 - 4	円 形	140 : 180 : 150	
27	B - 4 - 1	長 橫 円	100 : 140 : 135	
28	B - 4 - 3	円 形	120 : 140 : 155	
29	C - 3 - 4	円 形	100 : 120 : 90	
30	B - 3 - 3	円 形	90 : 90 : 90	
31	C - 4 - 1	円 形	110 : 130 : 100	
32	B - 3 - 3	円 形	80 : 90 : 75	
33	C - 2 - 2, 4	長 橫 円	100 : 100 : 65	
34	C - 2 - 4	卵 形	100 : 70 : 50	
35	C - 2 - 4	卵 形	100 : 90 : 60	
36	D - 3 - 1	卵 形	130 : 150 : 85	
37	D - 2 - 2	長 橫 円	130 : 140 : 90	
38	D - 2 - 1	円 形	130 : 160 : 120	
39	D - 1 - 2, 2 - 1	長 橫 円	150 : 200 : 140	
40	D - 2 - 1	長 橫 円	160 : 140 : 100	
41	F - 2 - 1, 2	円 形	120 : 115 : 70	土器出土
42	B - 5 - 3	円 形	55 : 60 : 25	土器出土
43	E - 2 - 2	円 形	130 : 130 : 80	土器出土
44	B - 5 - 1	円 形	90 : 80 : 60	
45	E - 2 - 2	円 形	120 : 140 : 55	
46	B - 5 - 1, 2	円 形	120 : 140 : 70	
47	F - 2 - 2	円 形	135 : 135 : 100	土器出土
48	F - 2 - 2	円 形	150 : 150 : 150	
49	E - 3 - 3	円 形	85 : 90 : 70	土器出土
50	F - 4 - 1	円 形	115 : 115 : 80	石器出土
51	C - 2 - 4	円 形	70 : 50 : 50	
52	F - 3 - 2	円 形	120 : 80 : 35	2基結合
53	F - 3 - 2	円 形	155 : 135 : 95	土器出土 2基結合
54	C - 3 - 4	方 形	50 : 70 : 50	55号土壤と連続
55	C - 3 - 4	長 円	180 : 120 : 100	54号土壤と連続
56	C - 3 - 4, D - 3 - 2	方 形	200 : 200 : 120	57号土壤と連続
57	C - 3 - 4	円 形	100 : 70 : 80	55号土壤と連続
58	D - 2 - 1	円 形	180 : 140 : 120	
59	D - 2 - 3	円 形	90 : 90 : 60	
60	E - 1 - 4	円 形	100 : 120 : 55	
61	E - 2 - 3	円 形	130 : 110 : 70	
62	E - 2 - 1	円 形	120 : 90 : 65	土器出土 3基結合
63	E - 2 - 1	円 形	120 : 120 : 90	土器出土 3基結合
64	E - 2 - 2	円 形	110 : 70 : 70	3基結合
65	F - 4 - 2	円 形	180 : 170 : 390	第1号井戸と変更
66	E - 2 - 1, 3	円 形	140 : 120 : 65	
67	E - 2 - 4	円 形	110 : 120 : 85	
68	E - 2 - 4	円 形	120 : 120 : 90	
69	E - 2 - 3	円 形	150 : 180 : 120	
70	E - 2 - 3	円 形	120 : 120 : 110	
71	E - 2 - 4	円 形	110 : 120 : 105	
72	E - 2 - 4, F - 2 - 2	円 形	110 : 150 : 90	
73	E - 2 - 4	円 形	140 : 120 : 110	
74	F - 2 - 1, 2	円 形	120 : 120 : 100	
75	F - 2 - 2	円 形	80 : 100 : 90	
76	F - 2 - 2	円 形	120 : 120 : 100	
77	F - 2 - 2	円 形	150 : 180 : 105	

土壤No	所在グリッド	形態	東西×南北×深さ	備考
78	F - 2 - 2	円 形	130 : 110 : 95	
79	F - 2 - 2	方 形	120 : 150 : 120	
80	F - 2 - 2	円 形	120 : 100 : 130	
81	F - 2 - 2	円 形	90 : 110 : 100	
82	F - 3 - 1	卵 形	180 : 140 : 55	83号土壤と連続
83	F - 3 - 1	長 圓	120 : 120 : 85	82号土壤と連続
84	F - 2 - 2, F - 3 - 1	円 形	140 : 120 : 75	
85	F - 3 - 1	五角形	120 : 120 : 95	
86	F - 3 - 1	方 形	70 : 100 : 100	3基結合
87	F - 3 - 1	方 形	80 : 80 : 95	3基結合
88	F - 3 - 1	長 圓	120 : 100 : 105	3基結合
89	F - 3 - 1	長 圓	120 : 140 : 95	
90	F - 3 - 1	長 圓	180 : 150 : 100	
91	F - 3 - 1	円 形	120 : 150 : 90	
92	F - 3 - 1	円 形	150 : 140 : 110	
93	F - 3 - 1, 2	円 形	150 : 180 : 75	
94	F - 2 - 4	円 形	115 : 115 : 80	土器出土
95	F - 3 - 1, 2	三角形	50 : 185 : 70	2基結合
96	F - 3 - 1, 2	卵 形	90 : 85 : 100	土器出土, 2基結合
97	F - 3 - 1, 3	長 圓	150 : 200 : 75	
98	F - 3	円 形	100 : 100 : 90	
99	F - 2 - 1	円 形	120 : 120 : 100	
100	F - 3 - 2	円 形	120 : 160 : 80	
101	F - 3 - 2	円 形	120 : 140 : 70	
102	F - 3 - 2, 4 - 1	円 形	100 : 120 : 65	
103	F - 3 - 2	円 形	100 : 110 : 105	
104	F - 3 - 2, 4 - 1	円 形	150 : 120 : 100	
105	F - 3 - 4	円 形	140 : 160 : 85	
106	F - 3 - 4	円 形	120 : 140 : 115	
107	F - 3 - 4	円 形	100 : 120 : 85	
108	F - 4 - 3	円 形	110 : 120 : 75	
109	F - 4 - 1	円 形	90 : 80 : 70	
110	F - 4 - 1	円 形	140 : 120 : 100	
111	F - 4 - 1	円 形	110 : 110 : 85	
112	F - 4 - 1	長 圓	80 : 50 : 70	3基結合
113	E - 4 - 3	長 圓	100 : 160 : 140	3基結合
114	F - 4 - 1	方 形	120 : 100 : 135	3基結合
115	F - 3 - 2	円 形	100 : 140 : 90	
116	E - 3 - 4, 4 - 3	不正円形	150 : 130 : 90	
117	E - 3 - 4, 4 - 3	卵 形	160 : 200 : 85	
118	F - 4 - 1	円 形	100 : 150 : 75	
119	E - 4 - 3	不正円形	150 : 90 : 70	2基結合
120	E - 4 - 3	不正円形	120 : 100 : 65	2基結合
121	E - 4 - 3	三角形	120 : 140 : 100	
122	B - 5 - 2	円 形	80 : 100 : 50	
123	E - 4 - 3	円 形	120 : 140 : 80	
124	E - 4 - 3	円 形	120 : 140 : 80	
125	E - 3 - 2	円 形	100 : 100 : 90	
126	E - 3 - 3	円 形	110 : 130 : 100	
127	E - 3 - 4	長 圓	100 : 130 : 85	
128	E - 2 - 2	円 形	150 : 100 : 80	
129	E - 2 - 2	円 形	120 : 100 : 75	
130	D - 3 - 2	長 圓	100 : 100 : 60	2基結合
131	D - 3 - 2	円 形	60 : 120 : 80	2基結合
132	D - 3 - 2	円 形	120 : 130 : 75	土器出土

土壤No	所 在 グ リ ッ ド	形	態	東	西	南	北	×深さ	備 考
133	D - 2 - 3, 4	円	形	140	140	80			
134	D - 1 - 4, 2 - 3	円	形	140	120	75	2基結合		
135	D - 1 - 4	円	形	100	80	80	2基結合		
136	D - 4 - 2	円	形	90	100	85			
137	C - 4 - 4	円	形	130	170	90			
138	C - 4 - 3	不正	円 形	170	140	80			
139	D - 4 - 2	円	形	120	120	90			
140	D - 4 - 4	円	形	80	100	80			
141	E - 5 - 1	長	円	100	140	50	2基結合		
142	E - 5 - 1	長	円	120	140	80	2基結合		
143	E - 5 - 1	円	形	100	120	70			
144	E - 4 - 4	円	形	60	60	50			
145	E - 4 - 4	円	形	60	80	55			
146	C - 4 - 1	円	形	100	120	60	第4号住居址内		
147	C - 4 - 1	円	形	120	130	65	第4号住居址内		
148	C - 4 - 3	円	形	60	60	60	第5号住居址内		
149	D - 3 - 2	円	形	80	80	80	第6号住居址内		
150	D - 3 - 2	円	形	120	120	80	第6号住居址内		
151	D - 3 - 4	円	形	100	110	75	第6号住居址内		
152	D - 5 - 3	円	形	90	120	90	第8号住居址内		
153	E - 5 - 1	円	形	70	90	70	第8号住居址内		
154	E - 4 - 3	長	円	140	120	90			
155	D - 4 - 3	長	円	140	120	50	翡翠大珠出土		
156	D - 4 - 3	長	円	140	120	55			
157	D - 4 - 3	円	形	80	90	80			
158	D - 4 - 3	円	形	100	120	55			
159	A - 3 - 2	長	形	100	130	40	第1号住居址内		
160	F - 3 - 1	円	形	110	140	75			
161	D - 4 - 3	円	形	140	200	35			
162	E - 5 - 4	円	形	110	120	50			
163	F - 2 - 2	方	形	100	60	60			
164	F - 2 - 2	円	形	100	80	80			
165	E - 5 - 3	円	形	120	120	50			
166	E - 2 - 4	円	形	110	130	70			
167	D - 4 - 3	円	形	120	160	40			
168	E - 5 - 4	円	形	140	120	65			
169	E - 4 - 4	円	形	80	70	55			
170	E - 4 - 4	長 方	形	90	140	50			
171	D - 4 - 3	円	形	140	140	75			
172	D - 4 - 3	不正	円 形	140	110	40			
173	E - 2 - 1	円	形	190	170	60			
174	F - 3 - 2	円	形	80	100	75	土器出土		
175	F - 3 - 2	円	形	85	90	55			
176	D - 2 - 3	円	形	140	150	60	3基連結		
177	D - 2 - 3	円	形	50	90	55	3基連結		
178	D - 2 - 3, E - 2 - 1	円	形	90	130	75	3基連結		
179	B - 2 - 3	円	形	80	75	20	石皿と磨石のセット		
180	E - 3 - 3, 4	長	円	100	140	75			
181	E - 5 - 3	円	形	110	115	85	土器出土		
182	E - 3 - 3	円	形	110	120	80			
183	E - 3 - 4	長	円	100	150	75			
184	F - 4 - 1	円	形	100	100	100			
185	E - 4 - 4	円	形	110	105	80			
186	C - 2 - 2	長 方	形	95	85	25	單独の屋外炉		
187	F - 3 - 3	円	形	120	140	95			

## II 遺 物

全体的には遺物の出土量は少ないが、土器については縄文時代中期後葉に属するものがほとんどであり、石器についてもこの時代の範疇に入るものであろう。個々の遺構より出土したものについて、見ていく。

### 1 土 器

#### 第1号住居址（1・2）

遺物の出土量は極端に少なく図示できるものは以下の2点である。1は棒状工具による2本の沈線によって縦の区画を行い中に櫛齒状工具による短い条線。2は口縁部は無文でありその下部には棒状工具による横位の沈線による楕円形の区画線が施され、その中に棒状工具によるハの字の施文がされている。以上のことにより当住居址は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第2号住居址（3～7）

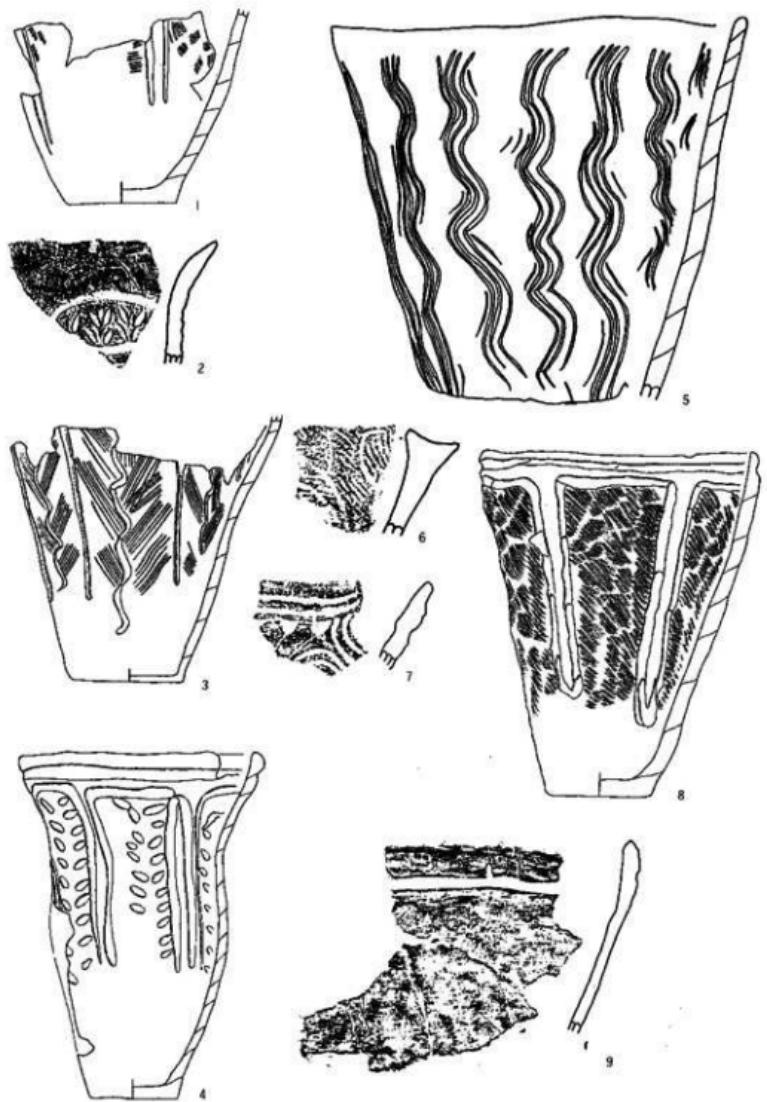
3は埋甕であり、胴部下半のみの出土である。降線による縦の区画を行い、区画された中に櫛齒状工具による斜線文の中に蛇行懸垂文。4は被熱を受けており全体的にボロボロしているが焼成は良好である。沈線による逆U字により縦の区画を行い、その中にハの字状の雨垂れ文。5は住居内中央付近において逆位で出土したもので底部付近が欠損している。土器全体の焼成は良好である。器部全体には6本の櫛齒状工具による蛇行沈線文が施されている。6は地文はR Lの単節縄文が施され、その上から細めの棒状工具による沈線がひかれている。7は棒状工具による施文が施されている。以上のことにより当住居址は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第3号住居址（8～10）

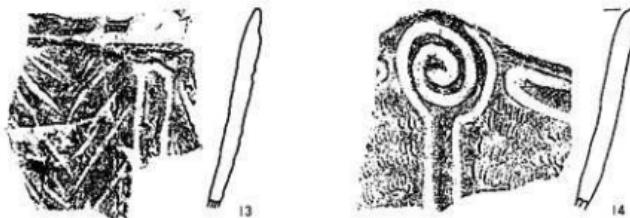
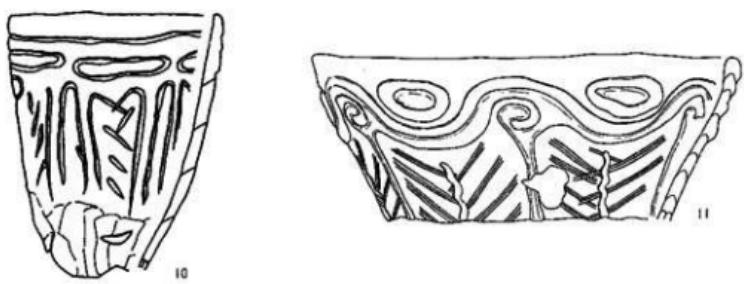
8は粘土紐による縦6単位に区画され、その中にR Lの単節縄文が施されている。9は口縁部に棒状工具による沈線が施されている。10は棒状工具による施文があり、かなり簡略化された印象があり、底部付近には鋸削りによる調整がみられるが、底部は欠損している。296は沈線2本により縦5単位に区画され、そのなかに櫛齒状工具による縦及び斜の沈線。以上のことにより当住居址は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第4号住居址（11～20）

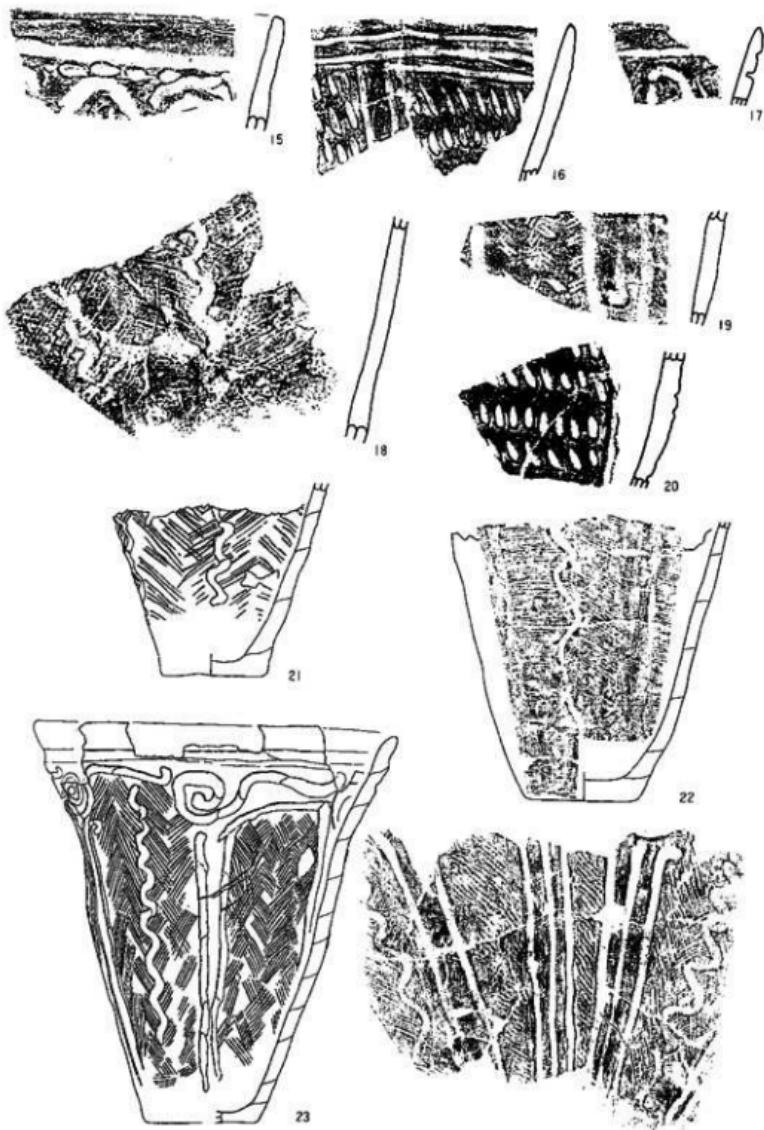
11は口縁部に横に蛇行する隆帯があり、外側に湾曲するところから蕨手状の縦の区画が入り、その中に3本の櫛齒状工具による斜行条線と沈線の蛇行懸垂文。12は胴部上半は棒状工具による沈線が縦位に逆さコの字状に施され、下半も同様だと思われる。区画された中には2本1単位とする櫛齒状工具によるハの字状の沈線を施文。13は棒状工具による沈線の縦位の区画を施



第41圖 住居址內出土土器實測圖(1)



第42圖 住居址內出土土器實測圖(2)



第43図 住居址内出土土器実測図(3)

し、その中にヘラ状工具によるハの字状の沈線が施されている。14は5単位程度の波状口縁部を呈すると思われ、その波状の高い部分に棒状工具による沈線の右回りの渦巻文とそれから下へ伸びる直線によって区画している。縦位に区画された口縁部付近には沈線の横位の棒円形が施されている。胴部にはヘラ状工具による施文。15は口縁部に棒状工具による横1本の沈線があり、そのすぐ下には縦の懸垂文があり、中間に棒状工具と思われる横の刺突紋が施されている。16は口縁部に2ないし3本の横の沈線があり、そこから縦に区画する沈線がある。区画された所には棒状工具による雨垂れ状の施文がある。17は口縁部に横の沈線1本と逆U字状の沈線。18は棒状工具による蛇行沈線文があり、その間を埋めるかのように櫛齒状工具によるハの字状の沈線を施文。19は棒状工具による縦の区画があり、その中には2本1単位のハの字状の沈線を施文。20は棒状工具による雨垂れ状の施文がある。297は小型の壺であり、胎土・焼成とも良好である。X字状の把手をもち、棒状工具による渦巻文と把手の下部に縦の区画をしている。その中にR Lの半節繩文が施されている。以上のことにより当住居址は曾利IV式期の所産と思われる。

#### 第5号住居址（21～54）

21は櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施した後、棒状工具による蛇行懸垂文が施されている。22は坪堀であり櫛齒状工具による横及び斜行沈線文があり、その中央付近に蛇行懸垂文が施されている。23は縦に沈線により6面に区画され4面は櫛齒状工具による綾杉状沈線が施され、その中3面には蛇行懸垂文が施されているが、残りの1面には施文されていない。残りの2面はR Lの半節繩文が施されているだけである。24は4つの把手を持つと思われ粘土紐による隆帶によって区画され、その間にヘラ状工具による沈線が施文されている。25は縦コの字状の区画をし、その中に雨垂れ状のハの字状沈線を意識した施文を施し、蛇行懸垂文を施す区画も存在する。26は降帯により6面に区画され、区画された中にR Lの半節繩文が施されている。27は口縁部付近と縦に区画する沈線を施し、区画された中に綾杉状沈線文を充填している。28は棒状工具による口縁部付近の横と縦の区画線が施され、区画された中に櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施している。29は口縁部付近を粘土紐による降帯によって区画され、その中に櫛齒状工具による沈線が充填されている。その下は粘土紐による降帯によって縦に区画され、櫛齒状工具による斜行沈線があり蛇行懸垂文が施されている。30は4単位の波状口縁を呈し、口縁にそって棒状工具による沈線文と縦に区画する2本の沈線文があり、その間に棒円形がある。縦に区画された中には棒状工具によるハの字状の沈線を施文。

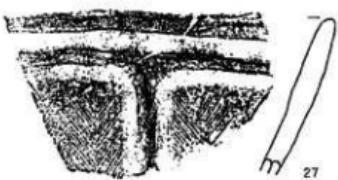
31は地文にR Lの半節繩文を施し、棒状工具による沈線を施文。32は棒状工具による沈線によって縦に区画され、その中にヘラ状工具によるハの字状の沈線を施文。33は櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施した後に、棒状工具による蛇行懸垂文が施されている。34は棒状工具によるII縫部付近の横と縦の区画線が施され、区画された中に棒状工具による円弧を描く沈線文を



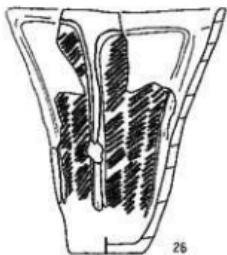
24



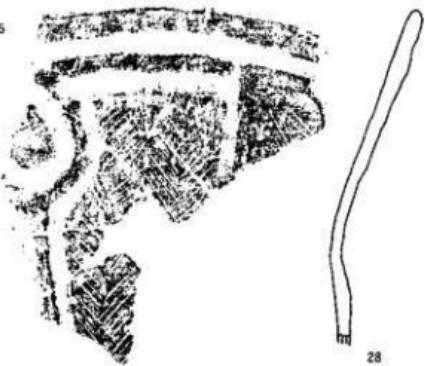
25



27

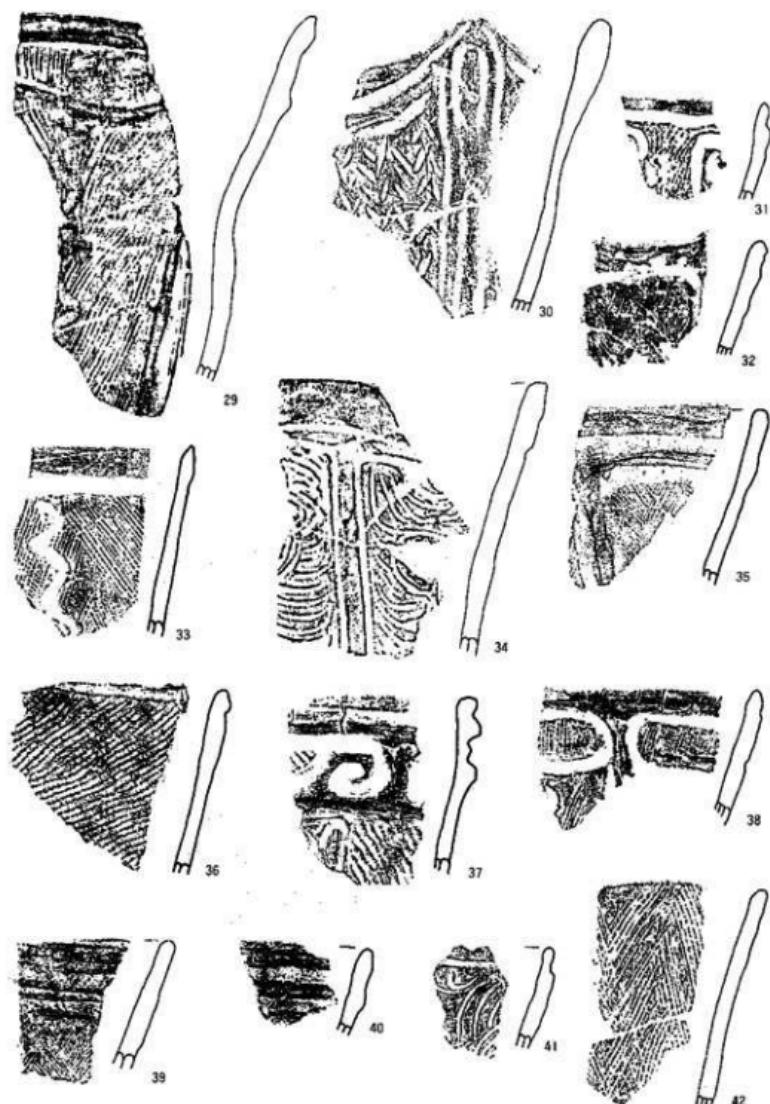


26

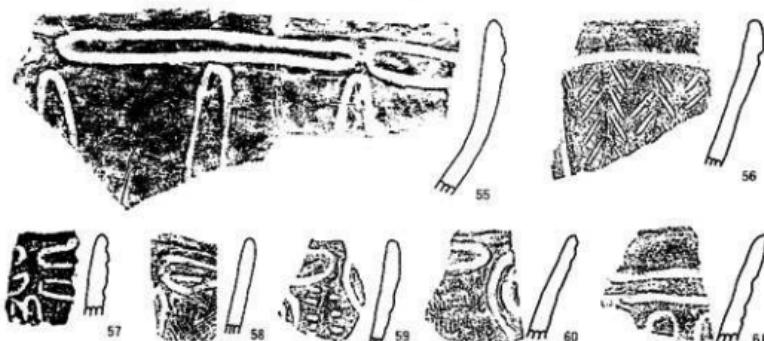
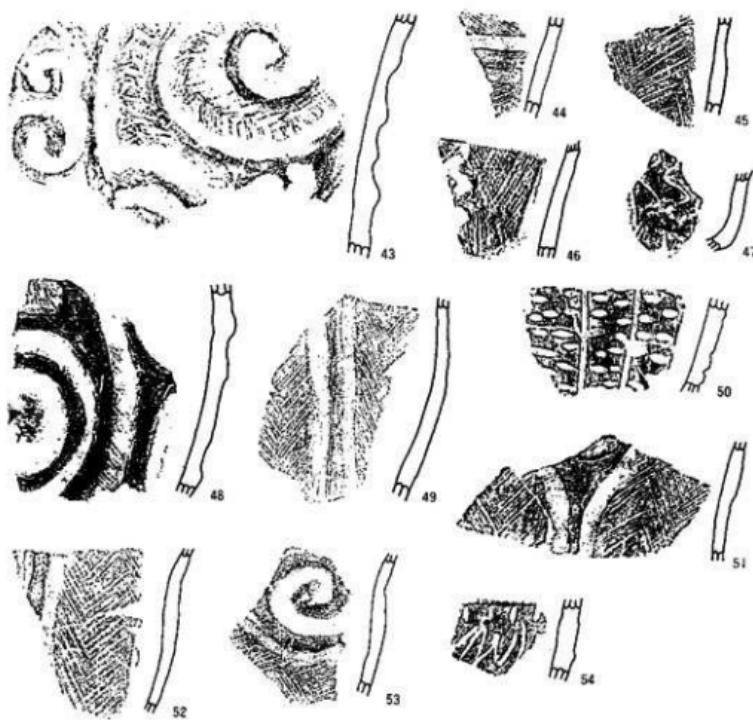


28

第44图 住居址内出土土器实测图(4)



第45図 住居址内出土土器実測図(5)



第46圖 住居址內出土土器尖測圖(6)

施している。35は27と同一個体と思われる。36は地文にR Lの単節繩文を施文。

37は口縁部に粘土紐による隆帯を横の区画として施し、その他の部分はR Lの単節繩文を施文。38は棒状工具により横及び縦の区画を施し、櫛齒状工具による沈線を施文し、棒状工具による蛇行懸垂文が施されている。39は口縁部に2本の隆帯があり、その下にはヘラ状工具による綾杉状沈線文を施文。40は口縁部に2本の隆帯がある。41は棒状工具による沈線を施文。42は櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。43は粘土紐による隆帯によって区画され、その間にヘラ状工具による沈線が施文されている。44は棒状工具による沈線があり、櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。45は櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。46は櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施し、棒状工具による蛇行懸垂文が施されている。47は棒状工具による沈線を施文。48は粘土紐による隆帯によって区画され、その間にヘラ状工具による沈線が施文されている。49は隆帯と沈線による縦の区画が施され、区画された中に櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。50は棒状工具による沈線によって縦の区画が施され、棒状工具による押付文が施されている。51は棒状工具による沈線によって縦の区画が施され、区画の中に櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。52は隆帯と沈線による縦の区画が施され、区画された中に櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。53は粘土紐による隆帯によって区画され、その間にヘラ状工具による沈線が施文されている。54は棒状工具による沈線を施文。

298は半截竹管及び櫛齒状工具による縱行沈線。以上のことにより当住居址は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第6号住居址 (55~83)

55は棒状工具による沈線によって横及び縦の区画を施文。56は沈線による縦の区画が施され、区画の中にハの字状の沈線。57は棒状工具による楕円形を沈線により施文。58は棒状工具による縦と横の区画を施し、区画された中に櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。

59は棒状工具による沈線と雨垂れ状の沈線を施文。60は棒状工具による沈線と櫛齒状工具による沈線を施文。61は口縁部に2本の並行する沈線があり、下部には棒状工具による沈線を施文。62は埋甕であり、口縁部には2本の沈線が並行に施文され、下部には6単位の区画が沈線によって施文されている。この区画の中には櫛齒状工具による刺突文が施され、沈線より蛇行懸垂文がある。63は器体部に2本を1単位とする櫛齒状工具による斜行沈線。

64は棒状工具による縦の区画とハの字状の沈線。65は棒状工具による縦と横の区画が施され、区画された中に櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。66は65と同一個体と思われる。67は口縁部に2本の並行する沈線があり、下部には棒状工具によるハの字状の沈線。

68は波状口縁を呈し、隆帯と沈線により横に区画している。その中にR Lの単節繩文を施文。69は棒状工具による横の沈線と櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施文。70は棒状工具による沈線。71は棒状工具による縦の区画する沈線と蛇行懸垂文を施文。72は棒状工具による蕨手文沈



第47圖 住居址內出土土器及測量圖(7)



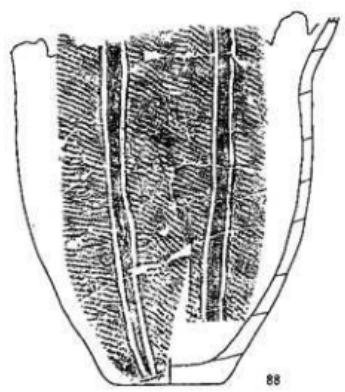
第48図 住居址内出土土器尖洞(8)

線。73は棒状工具による縦と横の区画を施し、区画された中に刺突文が施され、ハの字状の沈線。74は棒状工具による縦と横の区画を行い、縦の区画の中に簡略化されたハの字状の沈線。75は棒状工具による縦と横の区画を施す。76は沈線による右回りの満巻文。

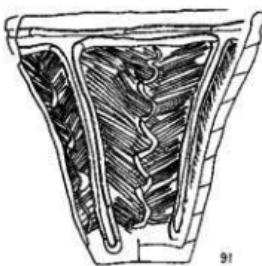
77は沈線による縦と横の区画を施し、縦の区画の中にハの字状の沈線。78は口縁部に一直線の横の沈線と雨垂れ状の沈線を施す。79は2本の並行する沈線があり、その下部に櫛齒状工具によるハの字状の沈線を施す。80は沈線による横の区画が施され、櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。81は2本の並行する沈線があり、櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。82は鉢と思われる範状工具による渦巻状の沈線と竹管による刺突文を施している。83は降帯による横位の区画が施されており、把手がついている。以上のことにより当住居址は曾利IV式期の所産と思われる。

#### 第7号住居址（84～104）

84は地文にR Lの単節繩文を施し、蛇行懸垂文を持つ。85は6単位の隆帯と沈線による縦の区画が施されており、区画された中にヘラ状工具による斜行沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。86は壺の肩の部分にのみ沈線による横の区画をしており、区画の中に櫛齒状工具による縦条線がある。87は口縁部と胴部過半は無文であり、胴部上半分には降帯による区画紋及び満巻文が施されている。88は沈線により縦に区画されており、区画された中にはR Lの単節繩文が施されている。89は2単位の有孔の把手がつき、沈線による縦の区画があり、区画された中に櫛齒状工具による縦行沈線文を施すし。90は降帯による縦の区画が施され、区画の中に横方向の櫛齒状工具による沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。91は6単位の沈線による縦の区画が施されており、区画された中には櫛齒状工具による斜行沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。92は隆帯による6単位の縦の区画を施し、区画中に櫛齒状工具による横行条線と蛇行懸垂文。93は沈線と降帯により区画され、区画された中にヘラ状工具による沈線が施されている。土器の形態は非常に歪でおり、底部と胴部の接合面は非常に薄くできていた。94は隆帯による縦の区画が施され、区画の上半分には横方向が、下半分には縦方向の櫛齒状工具による沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。95は櫛齒状工具による縦行沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。96は6単位の隆帯と沈線による縦の区画が施されており、区画された中にヘラ状工具による斜行沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。97は横に伸びる沈線があり、櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。98は横に伸びる沈線があり、櫛齒状工具による綾杉状沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。99は波状口縁を呈し、波状頂上の本に右回りの満巻文がある。100は横に一直線の沈線があり、その下部に並行する沈線の懸垂文が施されている。101は波状口縁を呈し、隆帯による区画がされている。102は縦に区画された中に棒状工具による斜行沈線と蛇行懸垂文がある。103は沈線と隆帯によって縦の区画が施され、区画の中に櫛齒状工具による沈線文を施すし、蛇行懸垂文がある。104は横に一直線の沈線があり、その下



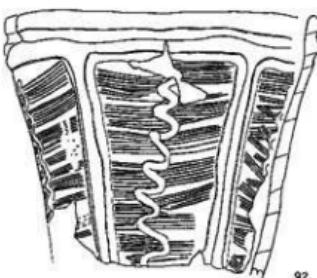
88



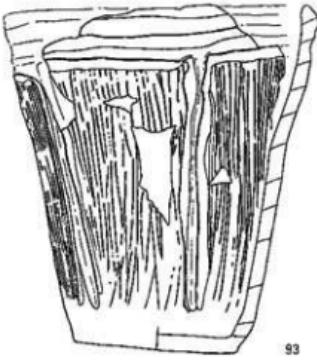
89



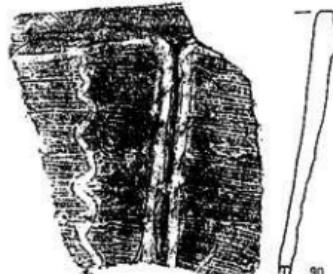
90



91

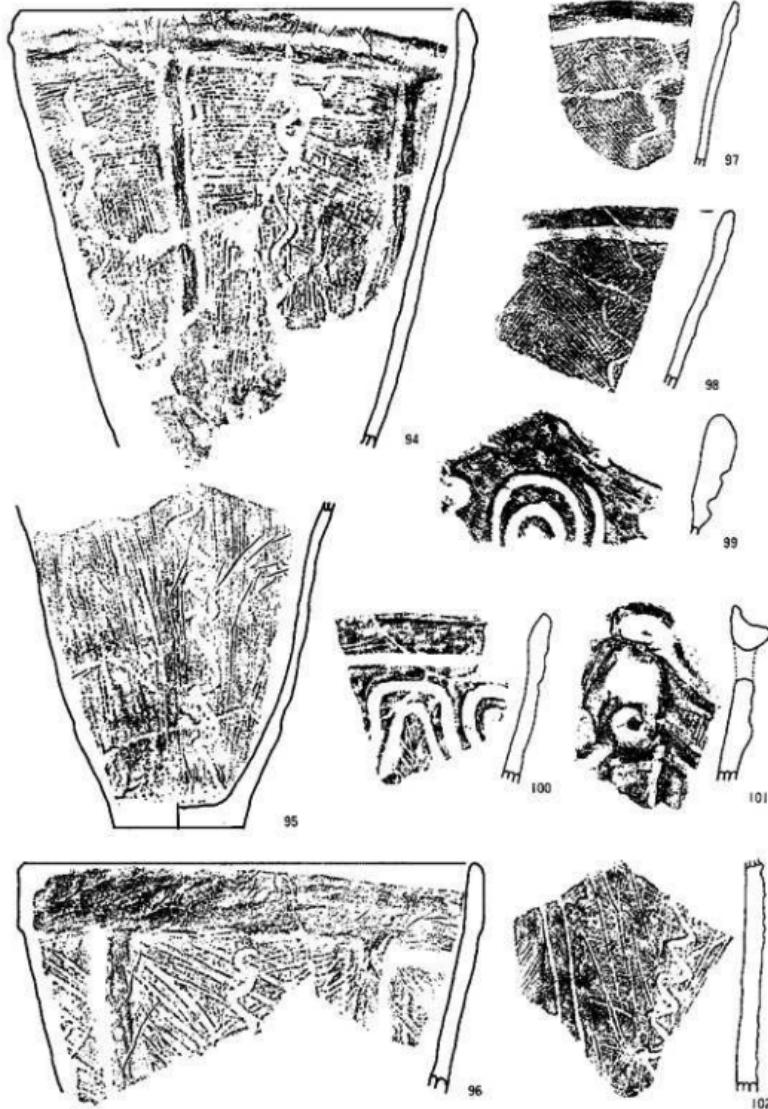


92



93

第49圖 住居址內出土上上器尖測圖(9)



第50圖 住居址內出土土器尖測圖(1)



第51図 住居址内出土土器実測図①

部に横に伸びる蛇行沈線があり、蛇行が上に向かうところに縦の区画をする沈線が施されており、その空間に横齒状工具による沈線文を施文。以上のことにより当住居址は曾利IV式期の所産と思われる。

#### 第8号住居址（105～118）

105は隆帯による6単位の縦の区画がされ、区画の中には横齒状工具による縦行沈線文と蛇行懸垂文を施文している。106は隆帯による6単位の縦の区画がされ、区画の中には横齒状工具による斜行沈線文と蛇行懸垂文を施文している。107は隆帯による縦の区画を行い、区画中に横齒状工具による斜行条線と蛇行懸垂文。108は口縁部に隆帯の縦の区画がされ、区画された中に横齒状工具による縦行沈線文を施文している。109は横に並行する2本の沈線があり、その下部にハの字状の沈線を施文。110は沈線による横と縦に区画され、区画された中にヘラ状工具による斜行沈線文を施文し、蛇行懸垂文があり、区画間に左回りの渦巻文がある。111は沈線と隆帯によって縦の区画が施され、区画の中に横齒状工具による沈線文を施文し、蛇行懸垂文がある。112は横齒状工具による斜行沈線文を施文している。

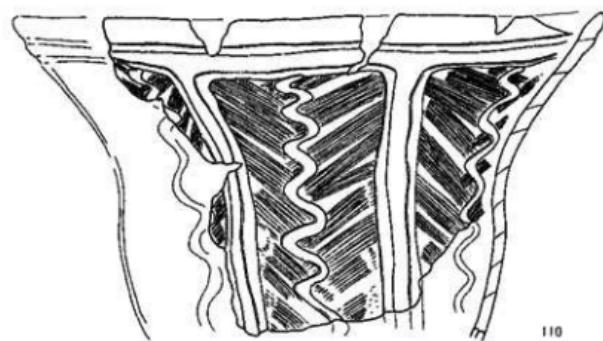
113は口縁部に沈線による縦の区画がされ、区画された中に横齒状工具による縦行沈線文を施文している。114は横に並行する2本の沈線があり、その下部にハの字状の沈線を施文。

115は横に並行する2本の沈線があり、その下部から縦に区画する沈線が2本あり、ハの字状の沈線を施文。116は横に1本の沈線があり、その下部から縦に区画する沈線が2本あり、区画された中に横齒状工具による縦行沈線文を施文している。117は横に並行する2本の沈線があり、その下部に横齒状工具による縦行沈線文を施文している。118は横に並行する2本の沈線があり、その下部から縦に区画する沈線が2本あり、ハの字状の沈線を施文。

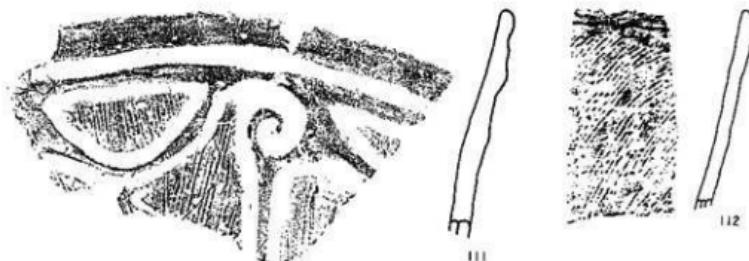
299は埋甕であり、焼成は良好である。棒状工具による沈線3本により縦5単位に区画し、その中にハの字状と蛇行懸垂文。以上のことにより当住居址は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第9号住居址（119・120）

119は横に並行する2本の沈線があり、その下部から縦に2単位に区画するM字形の沈線が施文され、その上部に上下に対抗する渦巻文がある。M字形の空間部3ヶ所に刺突文がある。区画された中には地紋としてRLの単節繩文が施されている。120は縦と横に区画する沈線があり、区画された中に地文としてRLの単節繩文が施されている区画とされていない区画がある。300は埋甕であり、二次焼成を受けており非常にもろくなっている。隆帯による縦5単位に区画され、その中に横齒状工具による斜行条線と蛇行懸垂文。以上のことにより当住居址は曾利IV式期の所産と思われる。

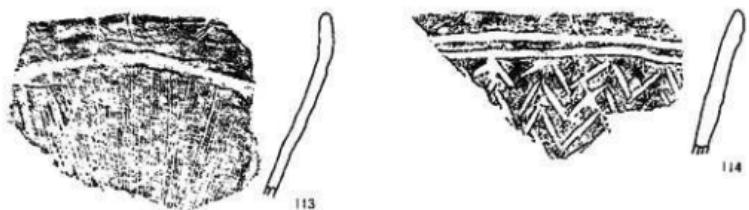


110



111

112

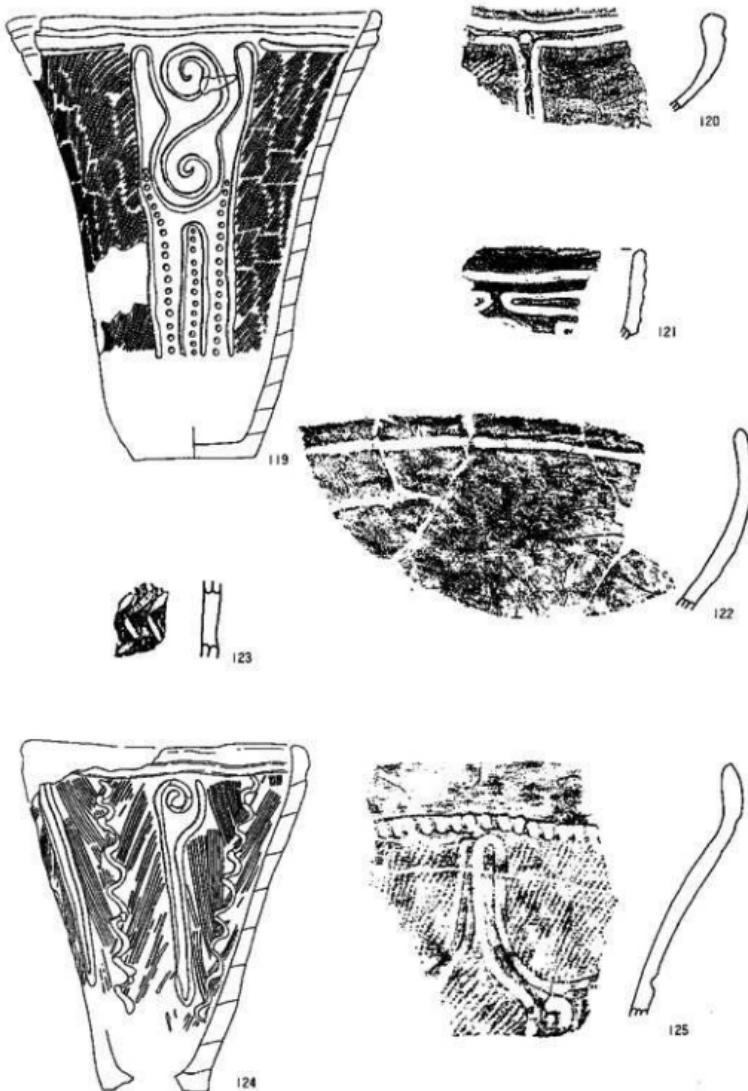


113

114



第52圖 住居址內出土土器実測図03



第53圖 住居址內出土土器實測圖03

### 第10号住居址

図示できるほどの遺物はみられなかつたが、当住居址は曾利IV～V式期の所産と思われる。

### 第11号住居址 (121・122)

113は沈線による横の1本線があり、その下部に横位に区画する沈線がある。114は口縁部に横の1本線があるのみで、下部は無文である。以上のことにより当住居址は曾利V式期の所産と思われる。

### 第12号住居址 (123～125)

115は埋甕であり、沈線による縦の6単位の区画がされ、区画された中に櫛齒状工具による斜行沈線文と蛇行懸垂文を施文している。116は棒状工具によるハの字状の沈線を施文。

117は口縁部付近に棒状工具による縦の短い沈線を横一列に施紋し、その下部にY字形の沈線があり、地文としてR Lの単節縄文が施されている。以上のことにより当住居址は曾利IV式期の所産と思われる。

### 第13号住居址

図示できるほどの遺物はみられなかつたが、当住居址は曾利III式期の所産と思われる。

### 第1号土壙 (126・127)

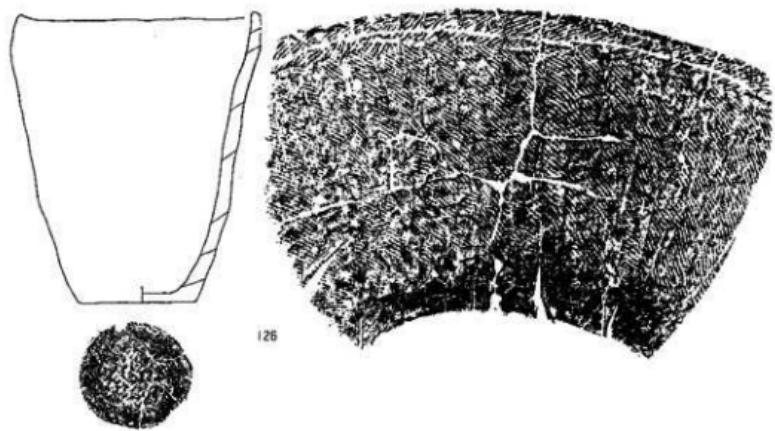
126は焼成・残存状況ともに非常に良好であるが、意図的に胴部中央部が破壊されていた。器部全体に地文としてR Lの単節縄文が施されている。127は棒状工具による沈線が縦の区画を施し、区画の中に稀薄ではあるがR Lの単節縄文が施されている。以上のことにより当土壙は曾利V式期の所産と思われる。

### 第3号土壙 (128～130)

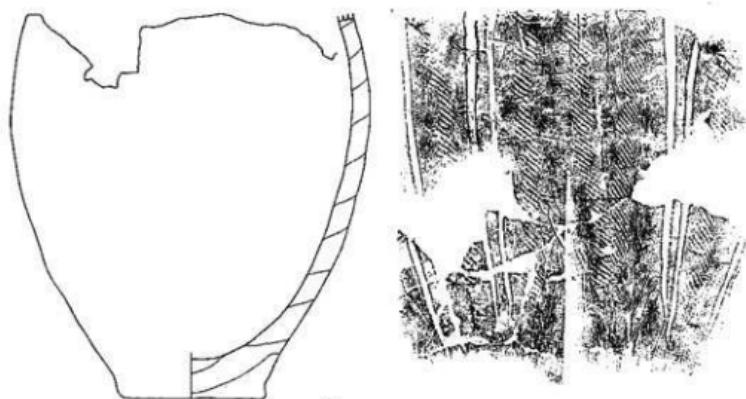
128は隆帶による区画を施している。129は口縁部に地文としてR Lの単節縄文が施されており、その下部には棒状工具による沈線が縦の区画のみを施している。130は隆帶による横の区画を行い、区画されたなかおよび器体全体に櫛齒状工具による縦行沈線文が施されている。以上のことにより当土壙は加曾利E 3式期の所産と思われる。

### 第9号土壙 (131)

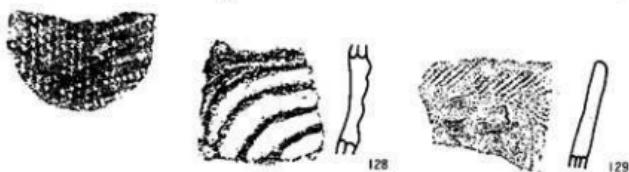
11縁部に4つの小突起があり、ここに右回りの溝巻文があり口縁部を途切れながら全周する。この溝巻文の下には逆U字状の懸垂文が1ヶ所あるが、その他は逆U字状の懸垂文の中に縦の沈線が入っている。縦に区画された空間部には櫛齒状工具による縫杉状沈線が施されている。



126



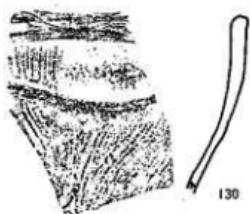
127



128

129

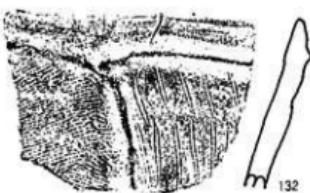
第54图 土塘内出土土器实测图(1)



130



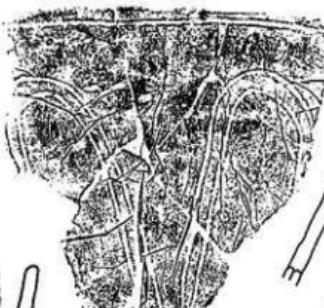
131



132



133



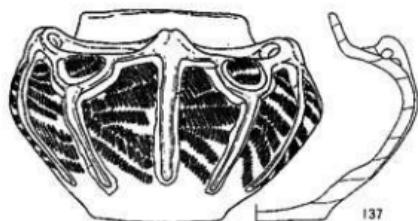
134



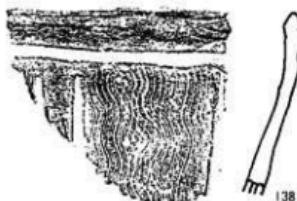
135



136



137



138

第55図 土壌内出土土器実測図(2)

以上のことにより当土壌は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第11号土壌 (132)

隆帯による縦と横の区画を行い、それぞれの区画の中にR Lの単節縄文とヘラ状工具による沈線が施されている。以上のことにより当土壌は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第12号土壌 (133)

棒状工具による縦に区画する沈線があり、この区画の中に箇齒状工具による縦行沈線文が施されている。以上のことにより当土壌は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第14号土壌 (301)

口縁部は無文であるが、肩の部分にx字状の把手もち、肩及び胴部は隆帯による横・縦に区画されており、その中にヘラ状工具によるハの字状文。以上のことにより当土壌は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第26号土壌 (134)

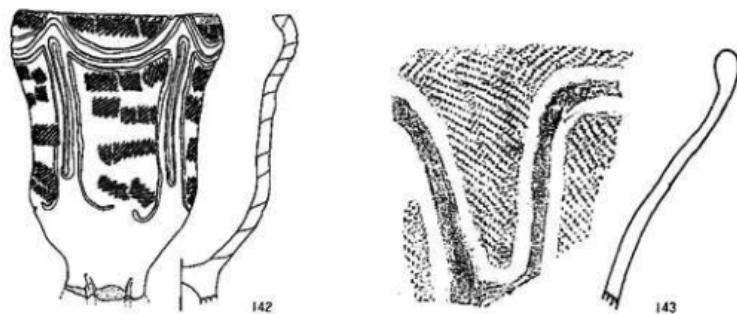
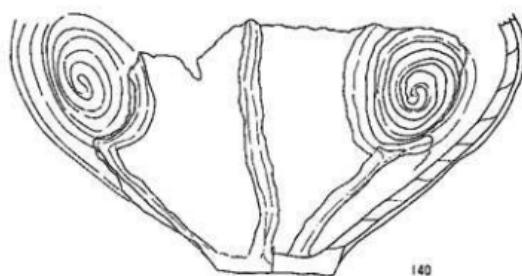
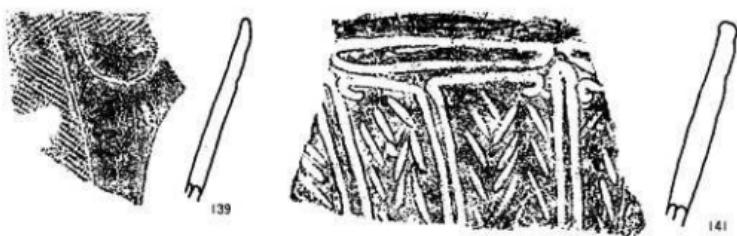
地文は無文であるが、棒状工具による口縁部の横線と二重の波状沈線が施されている。以上のことにより当土壌は加曾利E 3式期の所産と思われる。

#### 第29号土壌 (135・136)

126は口縁部に棒状工具による横の沈線が三本ひかれ、その間にヘラ状工具による沈線が縦に入っている。その下部にも縦の沈線が施されている。127は波状口縁を呈し、棒状工具による沈線が施されている。施文は、右回りの渦巻文および箇齒状工具による比較的短い縦行沈線文が施されている。以上のことにより当土壌は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第41号土壌 (137~139)

137は、ほぼ完形で出土したものである。橋状の把手は5単位でつき、紐を通して吊るせるような状況ではあるが、紐を通したような痕跡はみられなかった。隆帯と幅の広い沈線により5単位に区画され、区画内にはR Lの単節縄文を横位及び斜位に施文している。138は口縁部付近に横の沈線を1本入れ、そこから縦の区画の沈線を2本入れ区画している。区画の中には箇齒状工具による縦位の蛇行沈線が施されている。139は棒状工具による縦と横の区画を行い、区画の中にR Lの単節縄文を斜位に施文している。以上のことにより当土壌は加曾利E 3式期の所産と思われる。



第56圖 土壤內出土土器実測図(3)

#### 第43号土壙 (140)

比較的焼成は良好であるが、胴部過半のみの出土である。粘土紐貼り付けによる縦の区画を行い、その上部に左回りの溝巻文を施している。以上のことにより当土壙は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第49号土壙 (141・142)

141は沈線による縦と横の区画を行い、縦に区画された中には簡略化されたハの字状の沈線を施文。142は施文はかなり粗雑で、半截竹管による平行の沈線を施すところもあれば、1本線のみのところもある。区画された中にはR Lの単節繩文を押圧しているが非常に弱く、施文単位及び長さ・方向がまちまちである。器形としては高台付きの深鉢であり、高台欠損後も使用したと思われる。以上のことにより当土壙は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第52号土壙 (302)

口縁部は無文であるが、肩の部分にX字状の把手をもち、肩及び胴部は隆帯による横・縦に区画されており、その中にR Lの単節繩文が施されている。以上のことにより当土壙は加曾利E 4式期の所産と思われる。

#### 第63号土壙 (143)

隆帯と沈線による縦の波状の区画を行い、区画された中にはR Lの単節繩文を全面的に施している。以上のことにより当土壙は加曾利E 4式期の所産と思われる。

#### 第62号土壙 (144)

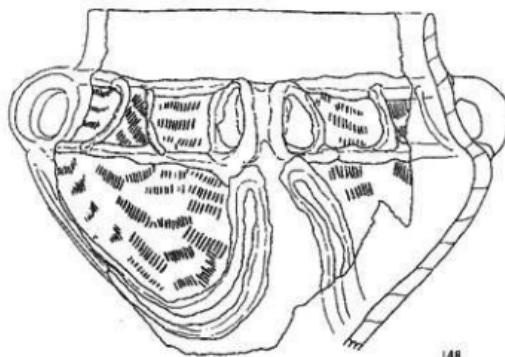
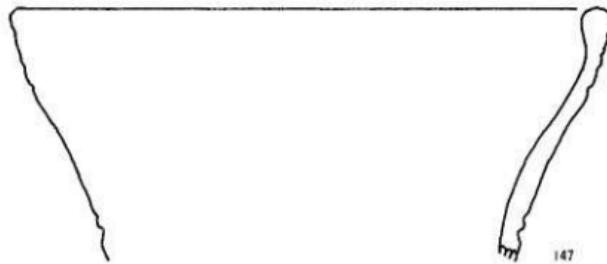
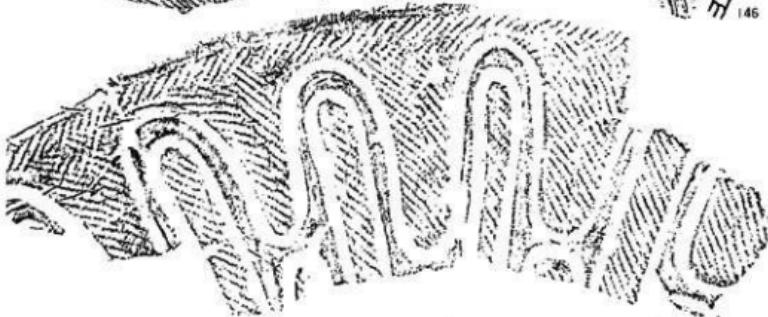
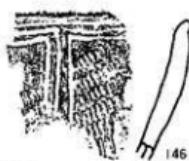
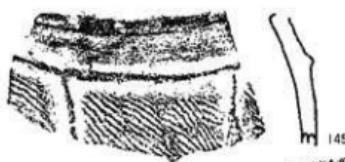
4単位の波状口縁を呈すると思われ、器部には8単位と思われる平行するやや幅広の縦に区画する沈線があり、区画された中にはR Lの単節繩文全面的に施している。以上のことにより当土壙は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第64号土壙 (145)

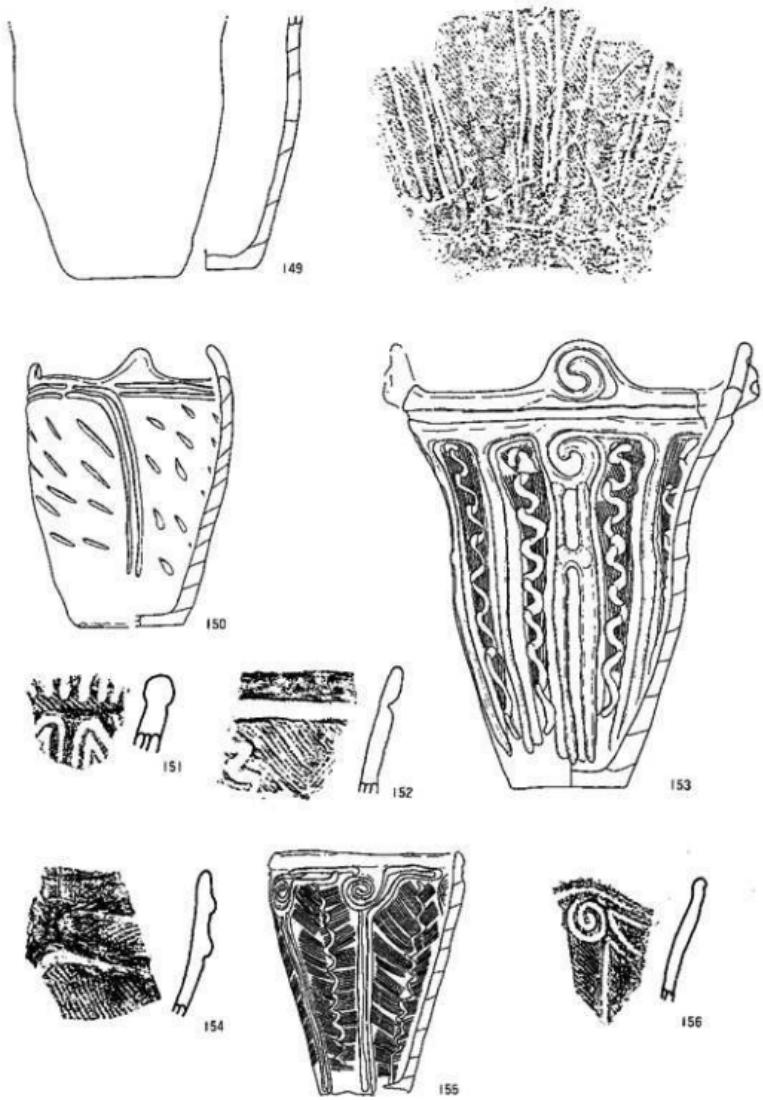
口縁部は無文であるが、隆帯による縦に区画され、区画された中にはR Lの単節繩が文全面的に施している。以上のことにより当土壙は加曾利E 4式期の所産と思われる。

#### 第74号土壙 (146)

沈線により縦と横に区画されており、縦に区画された中に櫛齒状工具による斜位沈線が施されている。以上のことにより当土壙は曾利V式期の所産と思われる。



第57圖 上塘內出土土器實測圖(4)



第58圖 土壤內出土土器實測圖(5)

#### 第82号土壙 (147)

幅広の横に蛇行する沈線を上下にあい向き合う形で施し、その空いた空間には縦の長楕円を沈線により表し、空いた空間には R L の単節繩文を全面的に施している。以上のことにより当土壙は加曾利 E 3 式期の所産と思われる。

#### 第94号土壙 (148)

4 単位の X 字状把手をもち、隆帶により縦と横に区画している。区画された中にはまばらではあるが、櫛齒状工具によるハの字状の沈線を施文。以上のことにより当土壙は曾利 V 式期の所産と思われる。

#### 第95号土壙 (149)

平行する 2 本の沈線により 6 単位程度に縦に区画され、区画された中は R L の単節繩文を全面的に施している。平行する 2 本の沈線のあいだに懸垂文を入れている。以上のことにより当土壙は加曾利 E 3 式期の所産と思われる。

#### 第96号土壙 (150)

口縁部に 4 つの小突起があり、器部には平行する 2 本の沈線が横と縦に区画しており、区画された中には雨垂れ状の沈線がまばらではあるが施されている。以上のことにより当土壙は曾利 V 式期の所産と思われる。

#### 第118号土壙 (151)

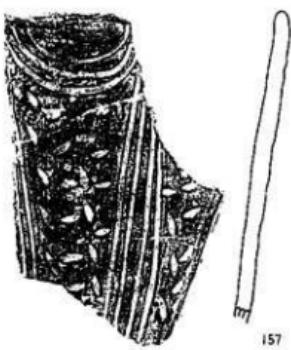
口縁部にヘラ状工具による縦の切り込みを入れ、その下部には平行して蛇行する沈線を入れ、空間には R L の単節繩文を施している。以上のことにより当土壙は曾利 IV 式期の所産と思われる。

#### 第132号土壙 (152・153)

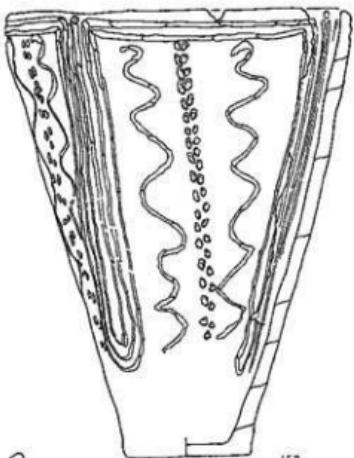
152は口縁部に比較的幅の広い横の沈線を入れ、そこから蛇行懸垂文があり、櫛齒状工具による綾衫状沈線が施されている。153は口縁部に 4 つの小突起があり、突起部には右回りの渦巻文があり、この下にも施されている。胴部は隆帶により 8 単位に縦に区画され、区画された中には沈線による蛇行懸垂文と櫛齒状工具による沈線が施されている。以上のことにより当土壙は曾利 IV 式期の所産と思われる。

#### 第159号土壙 (154)

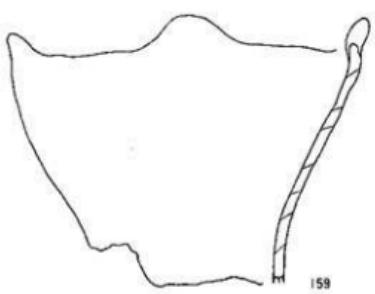
口縁部に隆帶による縦と横の区画が施され、区画された中に R L の単節繩文を全面的に施し



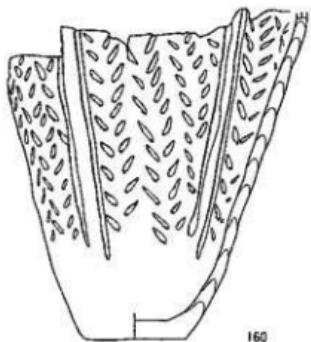
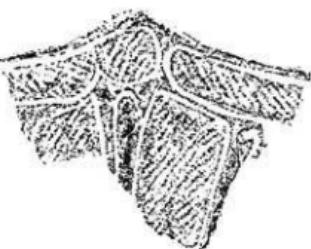
157



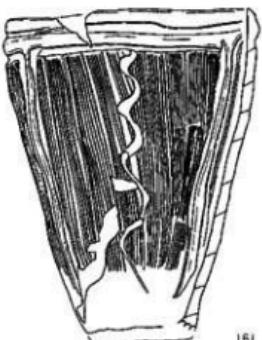
158



159



160



161

第59圖 土壤內出土土器實測圖(6)

ている。以上のことにより当土墳は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第174号土壙 (155)

沈線により縦の区画が施され、区画された中に沈線による蛇行懸垂文と櫛齒状工具による絞杉状沈線が施されている。以上のことにより当土墳は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第186号土壙 (156)

波状口縁を呈し、波状頂上部に左回りの渦巻文がある。この下に縦と横に区画する沈線があり、渦巻文の下にはR Lの単節繩文を施している。以上のことにより当土墳は曾利IV～V式期の所産と思われる。

#### 第176号土壙 (157)

口縁部に沈線による三重の連弧文があり、縦に4本の沈線が入り区画している。この縦に区画された中に雨垂れ状の沈線がまばらではあるが施されている。以上のことにより当土墳は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第181号土壙 (158・159)

158は2本の平行する沈線により縦と横に区画し、4面に区画されている。区画された中には2本の蛇行懸垂文があり、このあいだに刺突紋が平行して施されている。159は4単位の波状口縁を呈し、地文はR Lの単節繩文を施し、その中に沈線による区画を行っている。以上のことにより当土墳は曾利V式期の所産と思われる。

#### 第1号埋設土器 (160)

隆帯による縦の区画があり、区画の中にはハの字文。以上のことにより曾利V式期と思われる。

#### 第4号埋設土器 (161)

隆帯と沈線により4単位に区画され、区画された中に蛇行懸垂文と櫛齒状工具による縦の沈線が施されている。以上のことにより曾利IV式期と思われる。

#### 遺構外出土土器 (第60図～第62図)

#### 第1類土器 (第60図、162～171)

地文にR Lの単節繩文等を施し、この中を縦および横の単位に区画するもの。以上のことによ

より曾利III式期と思われる。

#### 第2類土器（第60図、172～178）

沈線および隆帯により縱および横の単位に区画した中に、櫛歯状工具による横や斜方向に沈線があり、蛇行懸垂文があるもの。以上のことにより曾利IV式期と思われる。

#### 第3類土器（第61図、179～185）

ヘラ状工具及び棒状工具によりハの字状の沈線がみられるもの。このハの字についてはさまざまな形態があるものの、第2類土器の形態をひくものであろう。以上のことにより曾利V式期と思われる。

#### 第4類土器（第61図、186～190）

沈線によって縦及び横方向に区画された中に、櫛歯状工具による均一化された沈線がみられるもの。以上のことにより曾利IV式期と思われる。

#### 第5類土器（第61図、191～195）

口縁部に連弧文がみられるもの。以上のことにより曾利III式期と思われる。

#### 第6類土器（第61図、196・第62図197）

棒状工具による大柄な沈線が施されているもの。以上のことにより曾利IV式期と思われる。

#### 第7類土器（第62図、198～202）

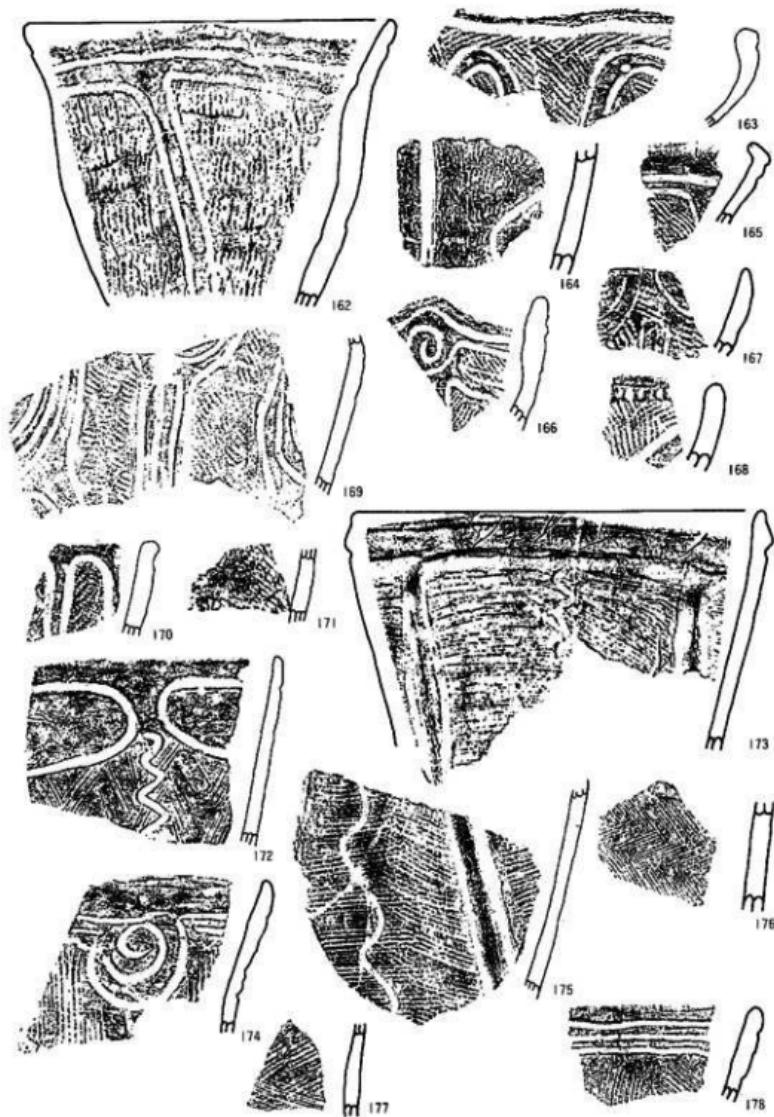
区画された中や外の間を埋めるかのように棒状工具による刺突文があるもの。以上のことにより曾利IV式期と思われる。

#### 第8類土器（第62図、203・204）

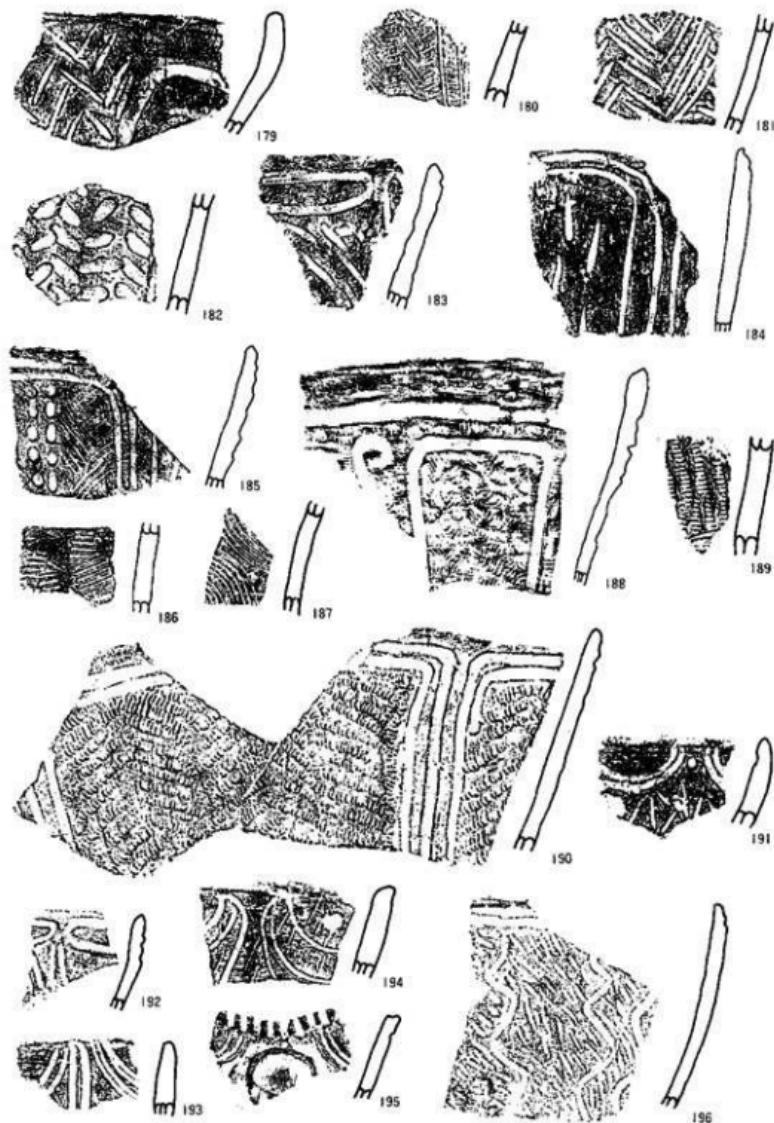
器部全体は無文であり、口縁部及び縦に区画するかのように沈線がひかれているもの。以上のことにより曾利IV式期と思われる。

#### 第9類土器（第62図、205）

胴部に連続して横長の横円がみられるもの。以上のことにより曾利V式期造構の所産であろう。



第60圖 遺構外出土上器実測図(1)



第61図 遠縄外出土土器実測図(2)

### 性格不明遺構（第62図、206～209）

遺構数は4基確認されているが、遺構の性格を裏付ける構造がないため現時点では不明であるが、以下の遺物が出土している。

206は第2号性格不明遺構からであり、横倒しになっていたものが耕作により上部側面が欠如していた。207・208は第3号性格不明遺構からであり、台付き深鉢の底部である。いずれも残存状況は、不良であった。209は出土地区不明であるが、鉢の一部と思われる。

## 2 石 器

遺跡内全体で出土した石器は、磨石24点、閃石24点、打製石斧7点、石鎌18点、軽石製石器2点、石錐2点（うち1点は石匙の転用）、石皿3点、石匙2点、黒曜石製の特殊遺物3点、磨製石斧2点、翡翠製大珠1点等の84点である。

### 磨石・凹石・石皿

遺構内から37点、遺構外から14点の計51点出土し、石材としては地元に豊富にみられる安山岩を用いている。260と273は土壇内からの一括出土であり、セット関係になるものであろう。

### 軽 石

遺構内から2点出土し加工の有無が不鮮明であるため、使用用途としては不明である。

### 打製石斧

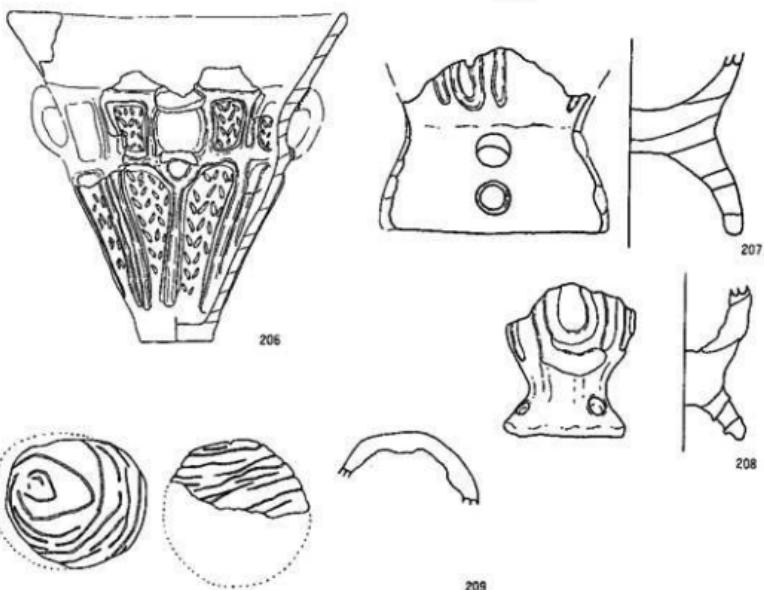
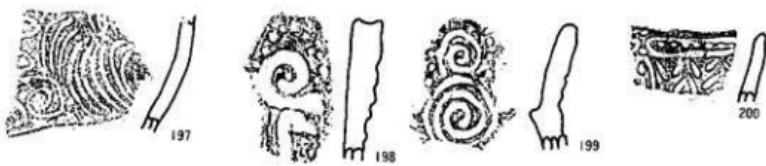
遺構内から2点、遺構外から5点出土し、出土した7点とも擦型のものであり、石材はホルンフェルスや粘板岩製であった。

### 磨製石斧

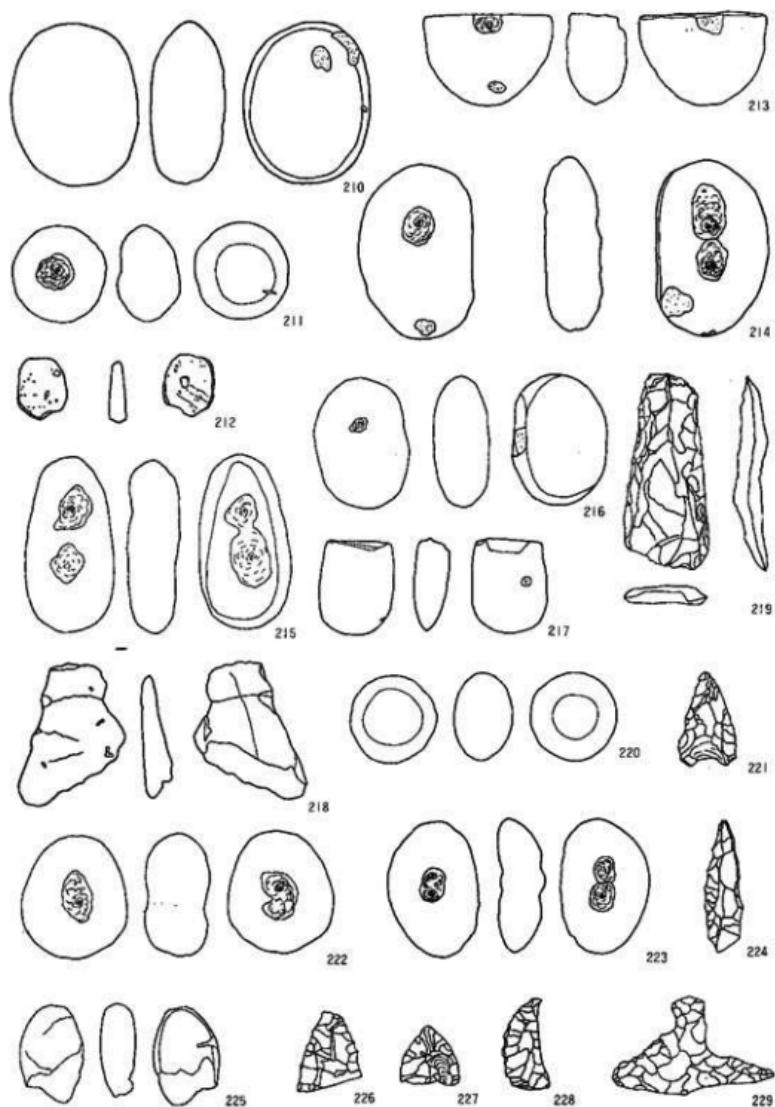
遺構内から1点、遺構外から1点出土し、遺跡内全体で2点と極端に出土量が少なく、折れて出土しているため、廃棄されたものであろう。

### 石 鎌

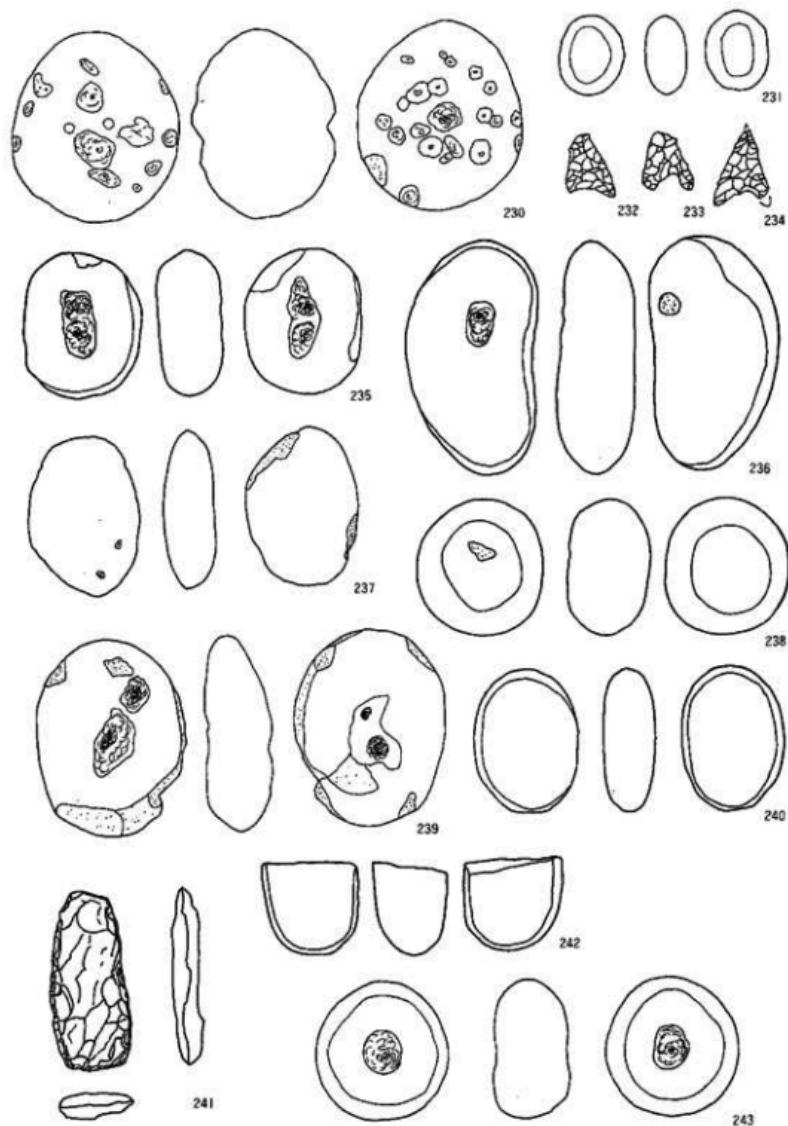
遺構内から6点、遺構外から11点の計17点出土し、すべてが黒曜石製である。無茎鎌で基部に抉入のあるもの（凹基無茎鎌）が9点、基部が直線的なもの（平基無茎鎌）が2点、破損しているものが6点ある。これらの石鎌の中には、左右対称ではなくどちらかの返しの部分が大きいものがある。



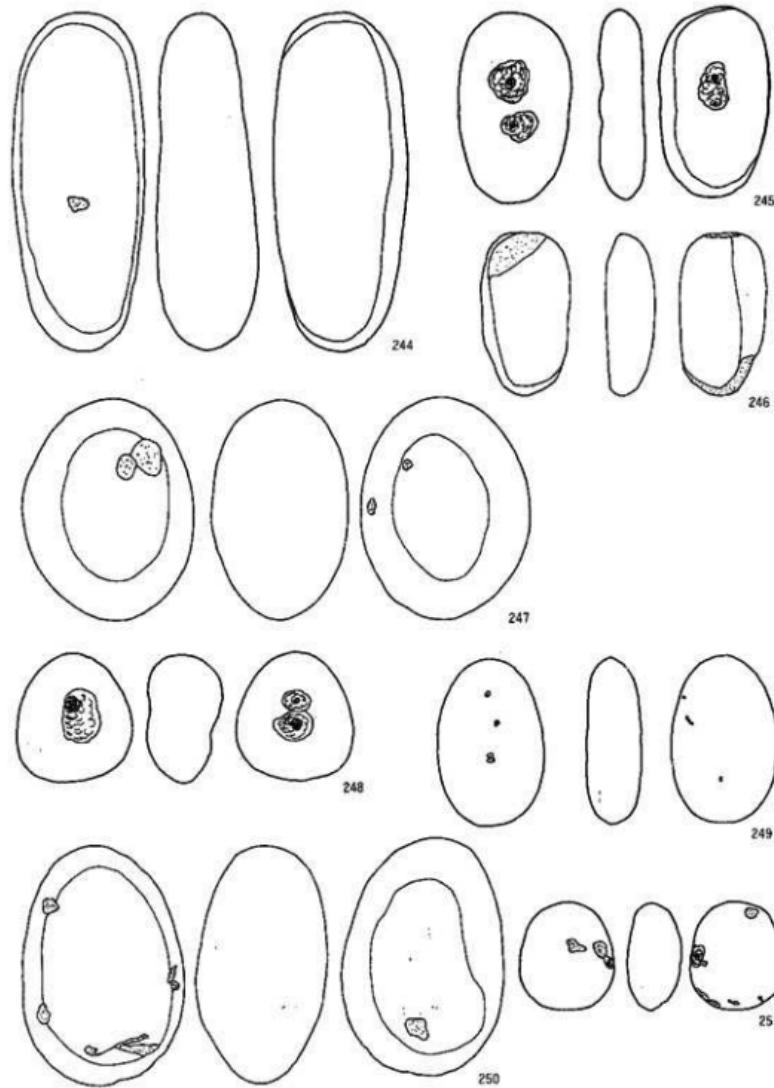
第62圖 遺構外出土土器測圖(3)



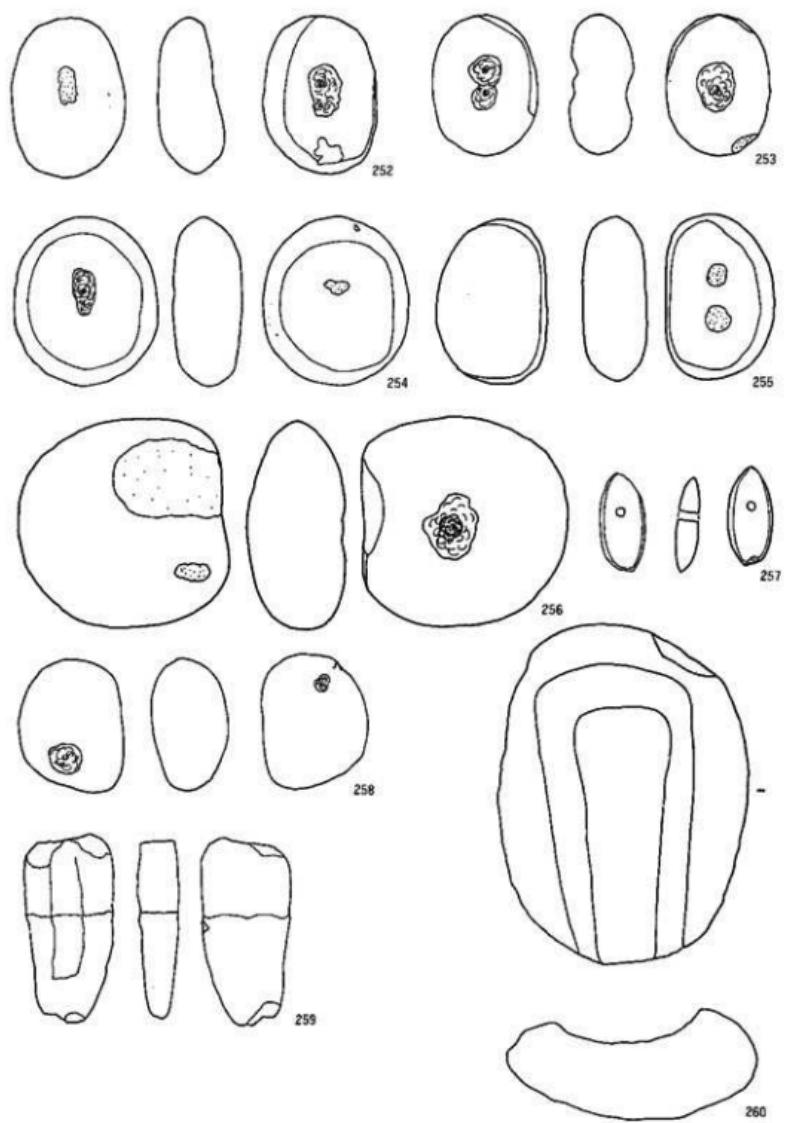
第63圖 出土石器尖測圖 (磨石系1/4、打制系1/2)



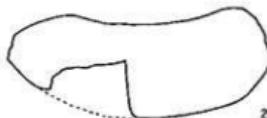
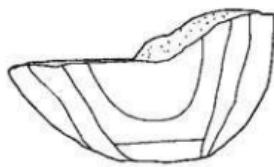
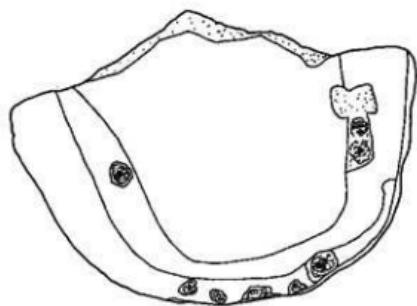
第64図 出土石器実測図 (磨石系1/4、打斧系1/2)



第65図 出土石器実測図 (1/4)



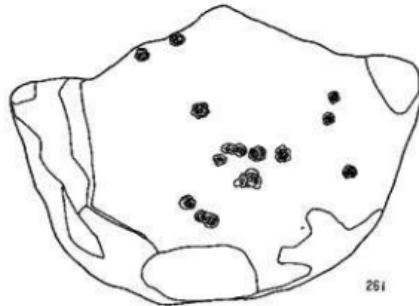
第66図 出土石器実測図 (1/4)



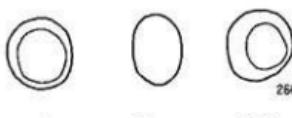
264



265



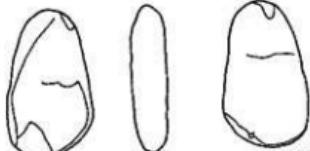
261



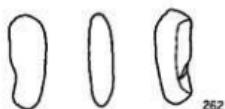
266



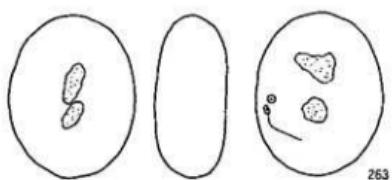
267



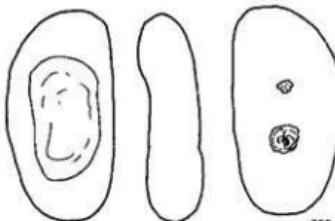
268



262

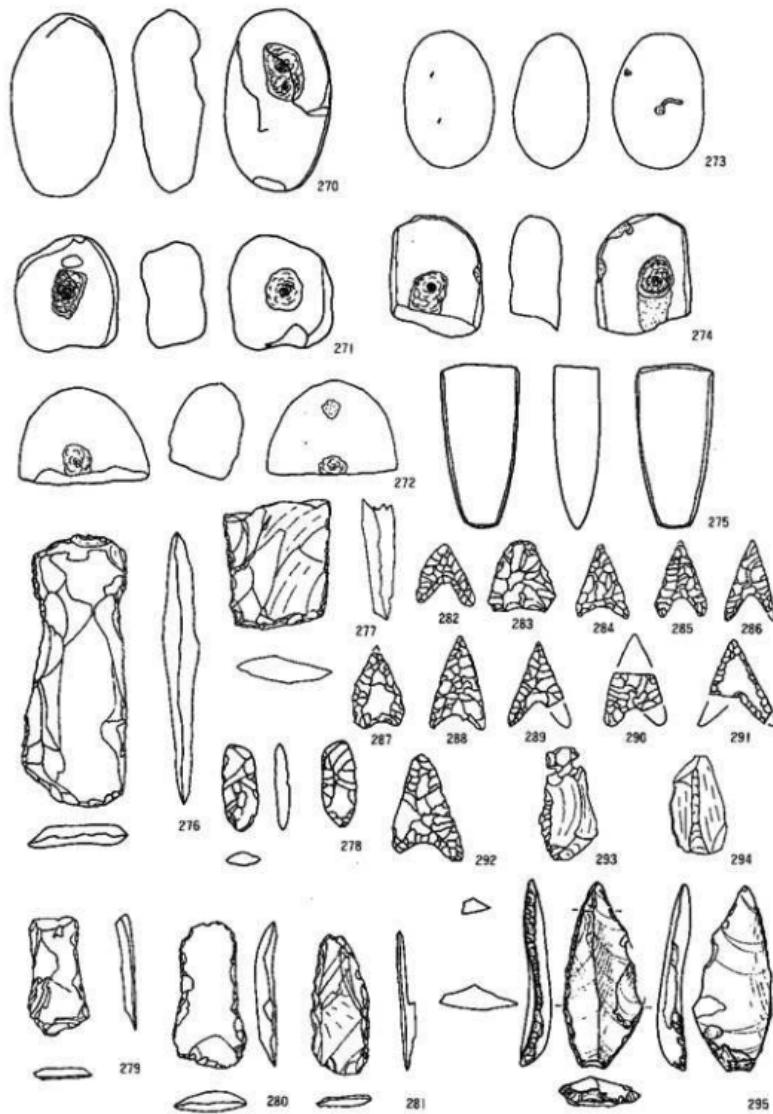


263



269

第67図 出土石器実測図 (1/4)



第68図 出土石器実測図 (磨石系1/4、打斧系1/2)



第69図 住居址内および土塚出土土器実測図 (1/4)

## 石 錐

黒曜石製であり、横長に作られているが、刃部欠損後転用して石錐として使用している。

## 石 锥

黒曜石製であり、途中から欠損して先端のみである。

## 黒曜石製の特殊遺物

229は三日月型をしており、半分が欠損している。293は形態的には石匙と思われるが、一般的なものより非常に小さく作られている。294は断面は台形状をついし、1面に刃がつけられている。

## 用途不明石器

278は遺構外の出土であり、著しく風化しており加工は確認されるものの用途は不明である。石材は硬質砂岩と思われる。

## 翡翠製大珠（図絵、257）

第149号土塹内からの出土であるが、判出した遺物がないため時期の極め手にはかけるが、遺跡の性格から中期後葉の所産であろう。全体的に研磨され面取されているが、一部には擦り切りによって切り離した部分が確認できる。穿孔された部分については、丁寧に調整されている。

## ナイフ型石器（図絵、295）

第1号溝中より出土したものであり、黒曜石製である。この石器1個体のみの確認である。この溝は遺跡内のもっとも東に位置し、形状は薬研鑿であり、依存状況は良好であった。このことから、流れ込みによる混入と思われるが、当該地周辺に、この時期の遺跡があることあるいはその広がりを証明するものであろう。

# 第III章 総 括

## 1 遺構について

検出されて遺構は住居址が13軒、土塙186基、時代不明の溝3条、時代不明の井戸2基性格不明遺構4基の計208遺構である。これらの遺構のうち、住居址についてはその全貌を調査することができたと思われ、若干の考察を行ってみたい。

住居址のプランは、大半が円形及び橢円形であり、規模も概ね規則制があったようにうかが

える。規模は直径約4から5mであり、柱穴も4から6本の構成であり、炉は中央よりかなり北に奥まった位置に石窓がとして構築されていた。第3号住居址のように石窓の回りに平石を配置したものもあったが、このような例は少ないとと思われる。このような配石の検出例は高根町内においては、3例目であり、いずれも曾利III式期である。この様式が後に発展・発達して敷石住居へ引き継がれていくかは、現段階では不十分であり今後の資料の集積を待ちたい。検出された住居址の中には、プランが方形をつくるものもあったが、耕作等により破壊を受けていた。

住居内に埋甕を伴う住居址が7軒検出され、そのうち複数の埋甕を持つものが4軒あり、埋甕を持つ住居と持たない住居、複数の埋甕を持つものと単独の埋甕しか持たないもの、屋外の埋甕（屋外の埋設土器）との比較検討が必要である。

住居址の全体的な配置を見ると非常に散在的ではあるが、2軒1対として形成されているようである。住居址群は両側に存在する第1・2・3号住居址を別にすれば土壇群を取り囲むようにも見え、この住居址を入れると土壇群とは反対側を取り囲むようにも見えるが、南側は沢を挟むことになり、試掘調査によっても南側に伸びることは確認できなかったため、この土壇群を中心として集落は、営まれていたと思われる。

全体的にみると調査面積の割には確認された住居址は少なく遺構の広がりとしては、北側へ伸びるものと思われる。

検出された住居の中には第10・12号住居址のように、極端に小さく、検出された柱穴も2ないし3本という変則的な住居が存在し、前述のように炉に伴う平石についても、今後資料の増加を待って検討していく。

土壇は、調査区内の西側に集中して確認され、いくつかの土壇は重複して存在している。このことは、この集落内においてかなり重要な場所であったことが推測することができ、そのことは土壇内から出土したほぼ完形の上器からも言えることができる。

井戸については、2木とも、底まで掘り下げたが、時代を決定する遺物の確認はできなかつた。しかし、比較的深く掘抜いていることから、中近世によるものと思われる。

## 2 遺物について

全体的に確認された土器は、曾利期にあたるもののがほとんどであり、形式ではIII・IV・Vまでの遺物が確認され、主とする時期はIII・IV期である。これらの中に加曾利E式のものもみられるほか、当遺跡独自の上器も数点みられた。この遺物は、曾利期の範疇に入ると思われ、現在までの報告では確認されていないことから今後この土器の広がりについては注目されよう。

特殊な遺物としては、翡翠製大珠があげることができる。この遺物は、形態がはっきりせず、深さもそれほどない土壇からの出土である。この他には破片ではあるが、土鉢と思われる土器片が2点出土している。

## 【参考・引用文献】

『高根町誌 通史編』	上巻	1989	高根町教育委員会
『高根町誌 通史編』	下巻	1988	高根町教育委員会
雨宮正樹	『東久保遺跡』	1984	高根町教育委員会
雨宮正樹	『町内遺跡分布調査』	1987	高根町教育委員会
雨宮正樹	『西原・当町遺跡』	1987	高根町教育委員会
米田明訓他	『柳坪遺跡』	1986	山梨県教育委員会
鶴原功一	『姥神遺跡』	1987	大泉村教育委員会
新津 健他	『川又坂上遺跡』	1993	山梨県教育委員会
伊藤公明	『大和田・大和田第2遺跡』	1989	大泉村教育委員会
板倉欽之他	『健康村遺跡』	1994	新宿区区民健康村遺跡調査団
平野 修	『根古屋遺跡』	1985	白州町教育委員会
小林公明他	『片渡宮』	1988	富士見町教育委員会
小林公明他	『曾利』	1981	富士見町教育委員会
末木 健	『曾利式土器』縄文文化の研究 4	1981	雄山閣
末木 健	『曾利式土器様式』縄文土器大観 3	1991	小学館
鈴木保彦	『縄文中期の土器』縄文土器大成 2	1981	講談社
中村龍雄編集	『中部山地 縄文土器集成』諏訪湖周辺考古学(2)	1970	

### おわりに

次郎構遺跡の発掘調査が、ここに一冊の報告書としてまとめることができ、文化財保護の一つである記録保存としての成果を発表することができた。本書において次郎構遺跡の遺構、遺物の性格、内容についての若干の検討を行ったが、浅学のため十分な分析をなしたとはいがたい。…続していただき御叱正・御教授いただければ幸いである。本書が縄文文化・時代の研究の一助となれば幸いである。

最後に発掘調査及び遺物整理、本書作成に当たり御協力・御指導いただいた関係各位に対し、心より厚く感謝申し上げます。



# 付 編



次郎構遺跡は、曾利式後半期にのみ集落が営まれた。曾利式期の集落は、前半と後半とで、若干の時間幅をもって継続するのが多くの場合であるが、次郎構遺跡のように、後半期に僅かな期間でもって、集落が廃絶される事例が散見される。ここでは、各遺構の時期をより細かく区分し、そうした特徴的な集落の形成・廃絶の過程を概観したい。なお、報告書作成の時間的制約上、提示しきれなかった資料が少なからずある。それらは、補圖として付録後半に掲載した。一部重複する図もある。また、土器片断面図については、口縁部破片のみ断面図を提示した。以上の不備については、どうかご寛宥いただきたい。

### 編年基準の検討

本文でも、遺構の時期について触れているが、ここではもう少し、細分した編年基準をもとに、遺構の時期を考えてみたい。

曾利式の編年は、1987年に刊行された、中央自動車道関連の2遺跡、すなわち、柳坪遺跡と糸迦堂遺跡の報告書中の考察をもって整備され、その後さしたる追加、変更を加えることなく、現在に至っている。

この2編年案は、口縁部文様帯とその変遷過程の捉え方の違いにより、特に後半部分が大きく異なる。ここでは、ハの字の綾杉文地文の土器に、蛇行沈線が施されたり、蛇行沈線をもつ条線地文土器が共伴するという経験的事実から、糸迦堂遺跡での編年案（小野1987）に従っておきたいが、そのままでは、次郎構遺跡の遺構のほとんどが曾利新式第4段階に含まれてしまう。そこで、次郎構遺跡出土の土器を基準に、曾利新式第4段階をさらに3細分し、遺構の動態を考察したい。

細分の内容と基準は以下のとおりである。

#### 曾利新式第4段階1期

条線地文主体で、ハの字綾杉文地文はまだみられない。条線地文は、蛇行沈線をはさんで、ハの字を構成するが、傾きが少なかったり、水平であるものが多い。

#### 曾利新式第4段階2期

条線地文主体で、ハの字綾杉文地文はまだみられない。蛇行沈線の左右で、それぞれハの字を構成する条線地文がみられるようになる。

#### 曾利新式第4段階3期

ハの字綾杉文地文が登場する。曾利新式にくらべて、地文となる綾杉文は、深く力強く施文される。ハの字の配列も整っている。

なお、加曾利E式の編年は、鈴木（1988）に従っておきたい。

### 遺構の時期

上記の細分基準により、遺構は次の表のとおり、時期決定した。

造機番	期	図版番号
S B 01	新式4段階3期	41図1、補図1-1~3
S B 02	新式4段階3期	41図5~7、補図1-4~2-1
S B 03	新式4段階3期	41図8~42図10、69図296 補図2-2~9
S B 04	新式4段階2期	42図11~43図20、69図297 補図2-10~3-1
S B 05	新式4段階3期	43図21~46図54、69図298 補図3-2~8
S B 06	新式4段階2期	46図55~48図83、補図3-9~4-4
S B 07	新式4段階1期	48図84~51図104、補図4-5~8
S B 08	新式4段階3期	51図105~52図118、69図299
S B 09	新式4段階2期	47図63、53図119~120、69図300、補図4-9~5-3
S B 10	新式4段階2~3期	補図5-4~8
S B 11	新式4段階3期	53図-121~122、補図5-9~12
S B 12	新式4段階1~2期	53図-123~125
S K 01	新式4段階3期	54図126~127、補図5-18~20
S K 03	加曾利E 3式	54図128~130、補図5-21~23
S K 04	曾利新々式	補図5-24~33
S K 09	新式4段階3期	55図131
S K 11	曾利新々式	55図132、補図5-34~6-11
S K 12	新式4段階3期	55図-133、補図6-12~15
S K 22	新式4段階5期	補図6-16~20
S K 23	新式4段階3期	補図6-21~25
S K 26	新式4段階3期	55図134、補図6-26~32
S K 29	新式4段階3期	55図135~136
S K 41	新式4段階2期	55図137~56図139、補図7-1~2
S K 42	新式4段階1期	補図7-3~9
S K 43	新式4段階3期	56図140、補図7-10~12
S K 45	新式4段階3期	補図7-13~15
S K 47	新式4段階3期	補図7-16~22
S K 49	新式4段階3期	56図141~142
S K 52	加曾利E 3式	59図302
S K 54	新式4段階3期	補図7-23~27
S K 59	曾利新々式	補図7-28~8-7
S K 62	新式4段階3期	56図144、補図8-8~12
S K 63	加曾利E 4 a式	56図143、補図8-13~15
S K 64	加曾利E 4 a式	57図145、補図8-16~18
S K 58	新式4段階3期	補図8-19~24
S K 69	新式4段階3期	補図8-25~31
S K 73	新式4段階3期	補図8-32~37
S K 74	新式4段階2期	57図146、補図9-1
S K 78	曾利新々式	補図9-2~4
S K 79	曾利新々式	補図9-5
S K 82	加曾利E 3式	57図147
S K 88	加曾利E 4 b式	補図9-6
S K 93	加曾利E 3式	補図9-7~8
S K 94	新式4段階3期	57図148、69図301、補図9-9
S K 95	新式4段階3期	58図149、補図9-10~11
S K 96	曾利新々式	58図150
S K 116	新式4段階3期	補図9-12~14
S K 118	新式4段階	58図151、補図9-15~16
S K 128	新式4段階2期	補図9-17~18
S K 132	新式4段階1期	58図152~153
S K 133	新式4段階5期	補図9-19~25
S K 134	新式4段階3期	補図9-26~31
S K 135	新式4段階3期	補図9-32~37
S K 136	新式4段階3期	補図9-38~39
S K 138	新式4段階3期	補図9-40~41
S K 142	新式4段階3期	補図9-42~44
S K 143	新式4段階2期	補図9-45~47
S K 147	新式4段階3期	補図10-1~5
S K 159	新式4段階3期	58図154、補図10-6~7
S K 160	曾利新々式	補図10-8~14

S K 161	新式 4 段階 3 期	補図 10-15~19
S K 165	新式 4 段階 1 期	補図 10-20~23
S K 171	新式 4 段階 3 期	補図 10-24~25
S K 174	新式 4 段階 3 期	58図 155、補図 10-26
S K 176	新式 4 段階 3 期	58図 157、補図 10-27~28
S K 181	新式 4 段階 3 期	59図 158~159
S K 186	新式 4 段階	58図 156
M P 01	新式 4 段階 3 期	59図 160
M P 04	新式 4 段階	59図 161
S X 02	新式 4 段階 3 期	補図 5-13~17 60図 162 62図 206

### 遺構と遺物の検討

以上のように次郎構遺跡は、S B07号住居など新式 4 段階 1 期をもって集落が形成されはじめ、住居は新式 4 段階 3 期をもって廃絶する。新式 4 段階 3 期に属する遺構が多いのは、なおこの時期が細分される可能性を示すものと考えられる。この点については後日、再論したい。

土坑も住居とはほぼ同様の推移を示すが、住居が廃絶された後も土坑はつくられ続けたらしい。特に S K 63、64など、加曾利 E 3 式以降の遺物のみが出土する土坑があり、加曾利 E 3 式後半頃から、加曾利 E 式土器が卓越することがうかがえる。

加曾利 E 4 式と曾利式の明確な共伴事例は S K 47など僅かしかみられなかったものの、S K 11では、縦文とヘラ書きの退化したハの字文を地文に有し、断面が三角形の微粒起線をもつ土器片が出土しており、注目される。こうした加曾利 E 4 式といわゆる曾利 V 式の折衷土器は、このほか、曾利遺跡 4 号土坑例、尾崎遺跡 30 号住居例などを挙げることができ、曾利式最末期と加曾利 E 4 式の併行関係を示す根拠とも考えられている。しかし、曾利式最末期の土器の姿が未だおぼろげにしか分からぬなかで、こうした土器は、平林（1990）のいう、「変容し、再移入された」加曾利 E 式のなかにおけるべき土器である可能性もあり、安直に併行関係を述べる根拠と考えてよいものかどうか、悩むところでもある。次郎構遺跡では、加曾利 E 4 式と曾利式最末期の併行関係を肯定するものの、曾利式は変容した形で命脈を保ちながら、加曾利 E 4 式に先立ち消滅したと考えておきたい。

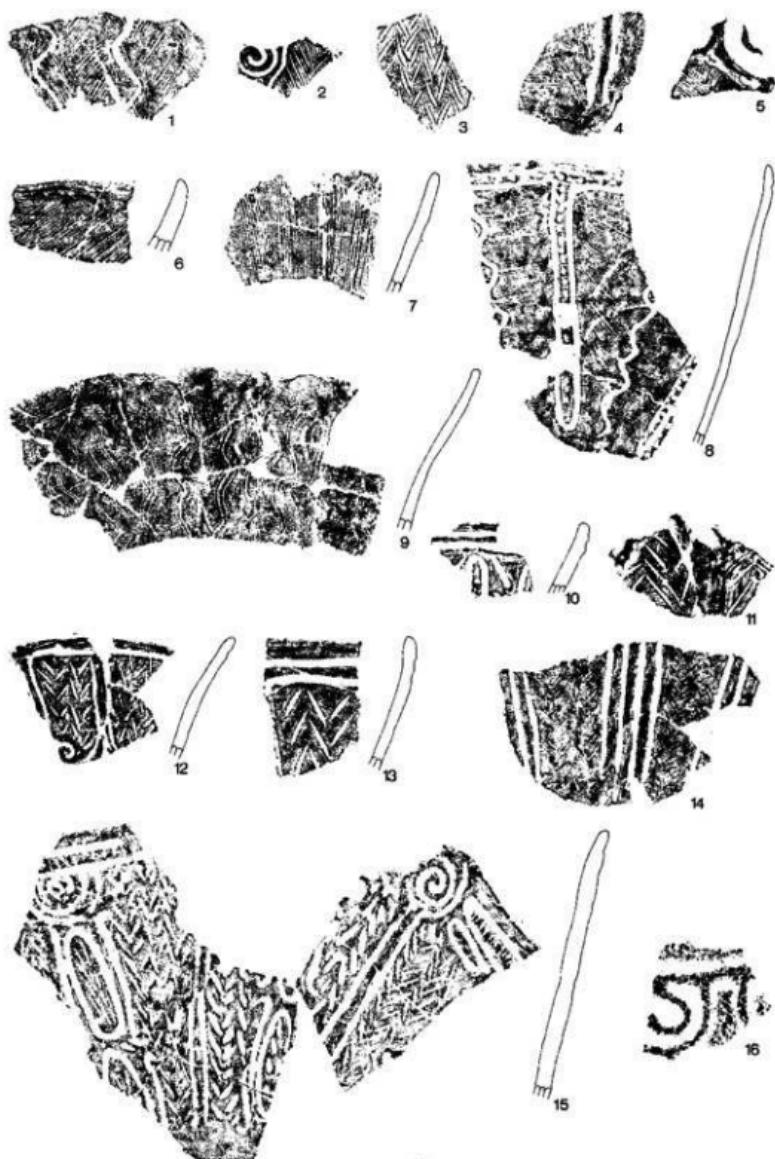
S K 45では、唐草文系土器が出土しているのが注目される。

次郎構遺跡の住居の構造は、円形プランに 4 本柱穴がほとんどである。S B01、S B04などを除くと、柱穴が壁面に沿って配されている。やや大型の S B07では、周溝中に小ピットがいくつか検出され、主柱穴と壁柱穴という構造がみられる。

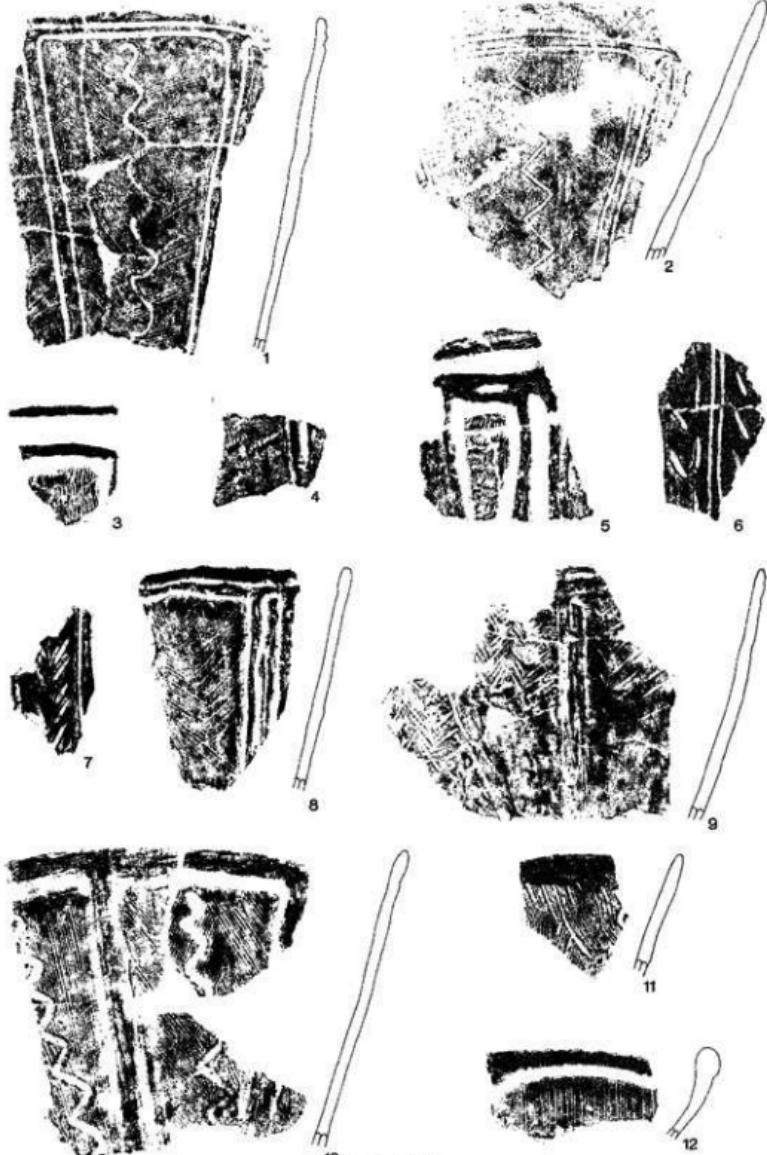
埋甕は S B02 で 1 基、S B05 で 2 基、S B06 で 1 基、S B07 で 2 基、S B08 で 3 基、S B09 で 2 基と、5 割の住居が埋甕を有し、3 割の住居が複数の埋甕を有する。もっとも多いのは、曾利新式 4 段階 2 期とされる七器であり、3 期に該当するのは、S B08 の 1 号埋甕のみである。

紙幅の制約上、気がついた点を羅列するにとどまってしまったが、報告書と検討の不備については、後日、曾利式土器後半の編年の中検討とともに再論する予定である。大方のご教示をお願いしたい。

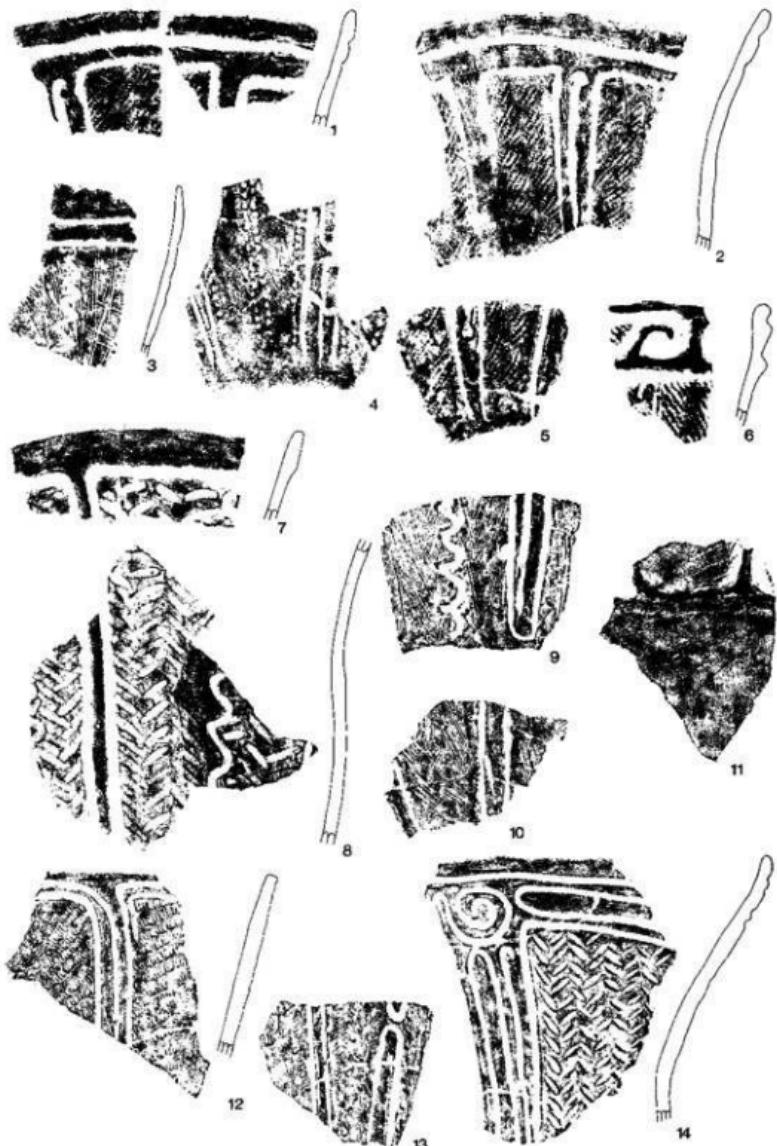
（佐野 謙）



補圖 I (1/4)



10 添図 2 (1/4)



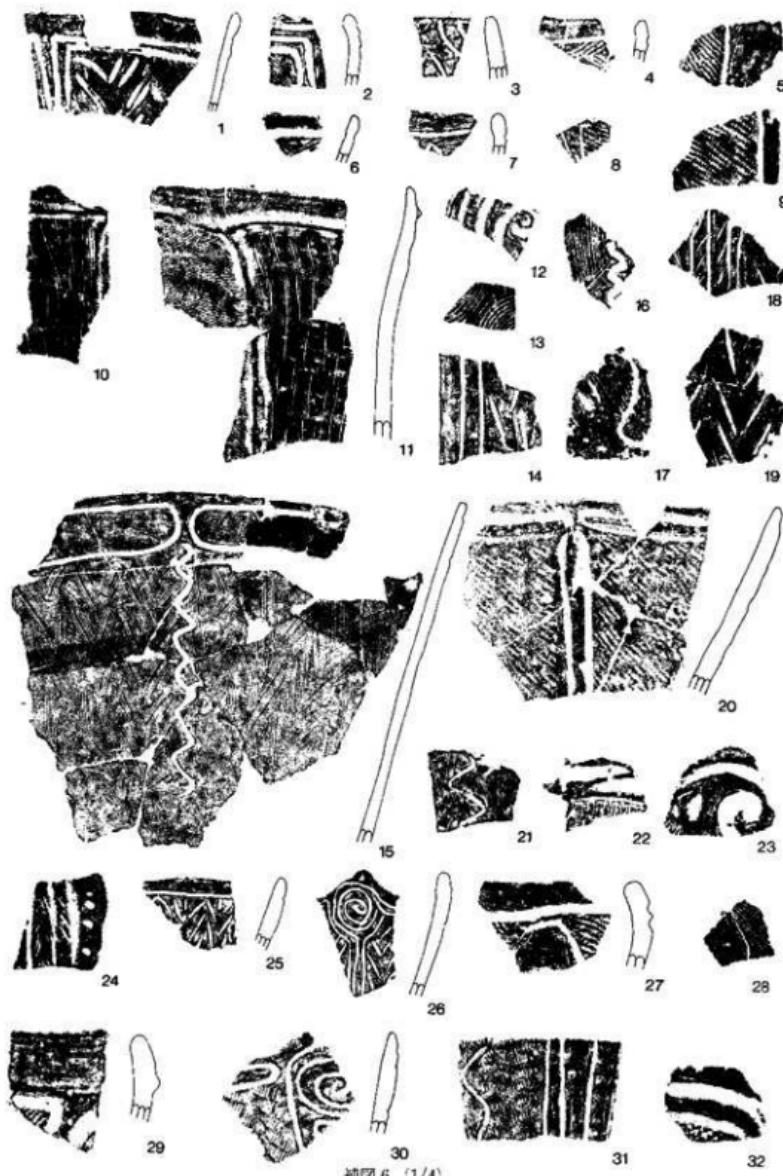
補圖 3 (1/4)



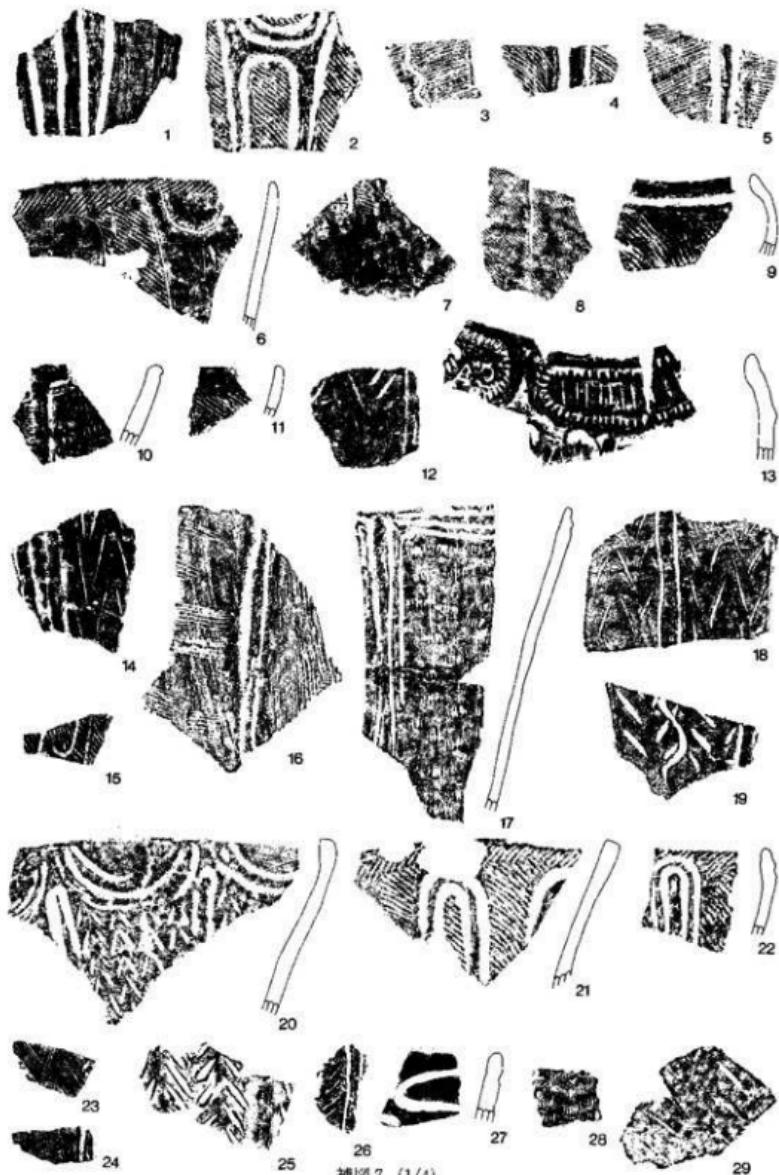
補図 4 (1/4)



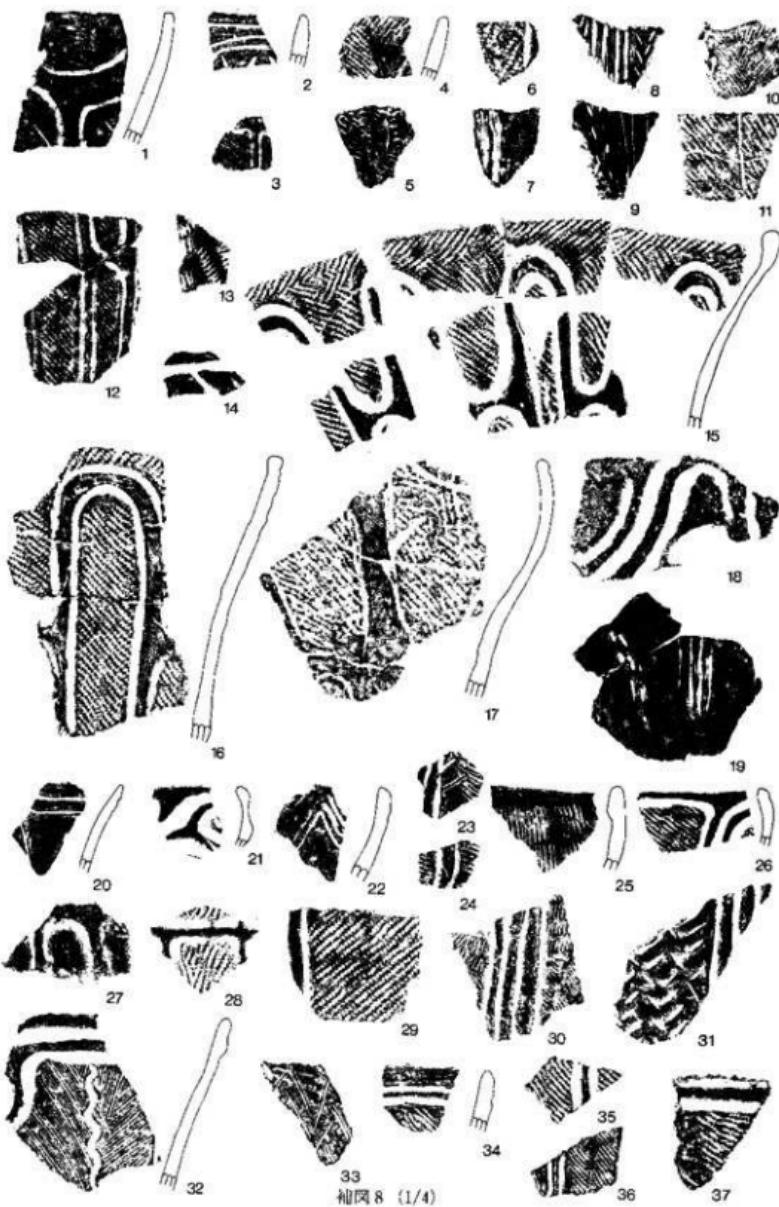
補圖 5 (1/4)

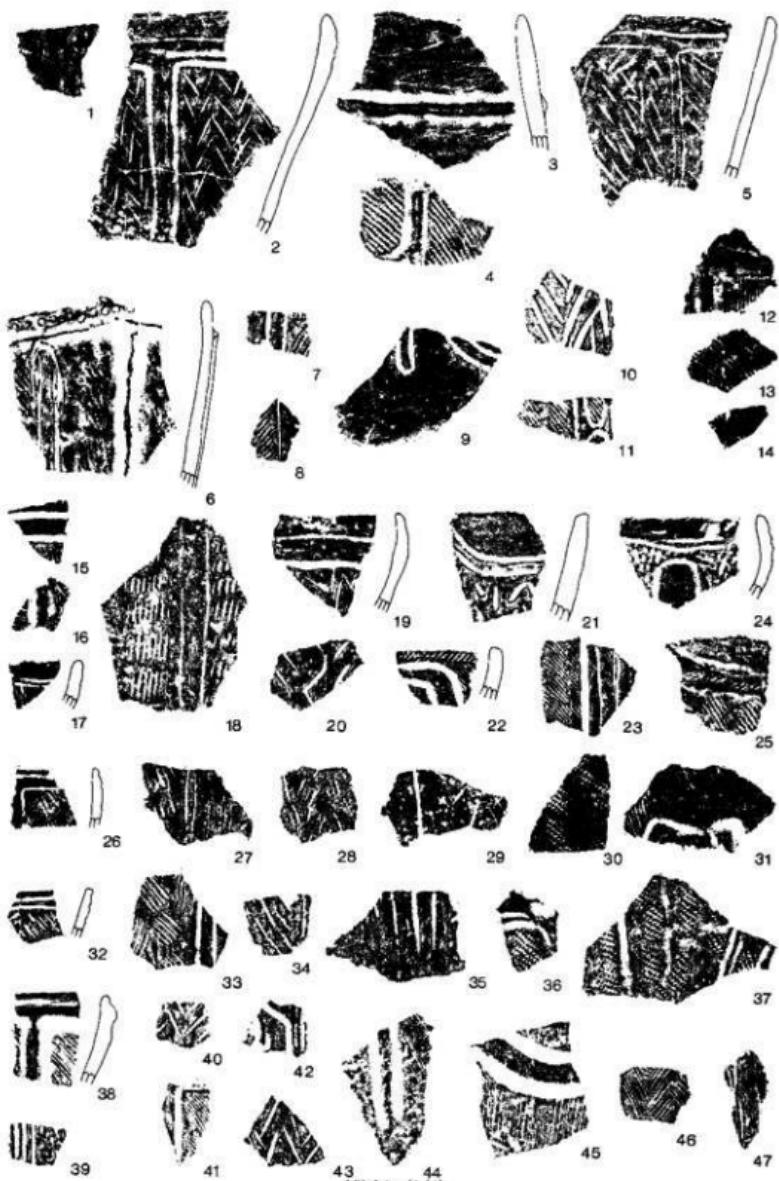


補図 6 (1/4)



補圖 7 (1/4)





補圖 9 (1/4)

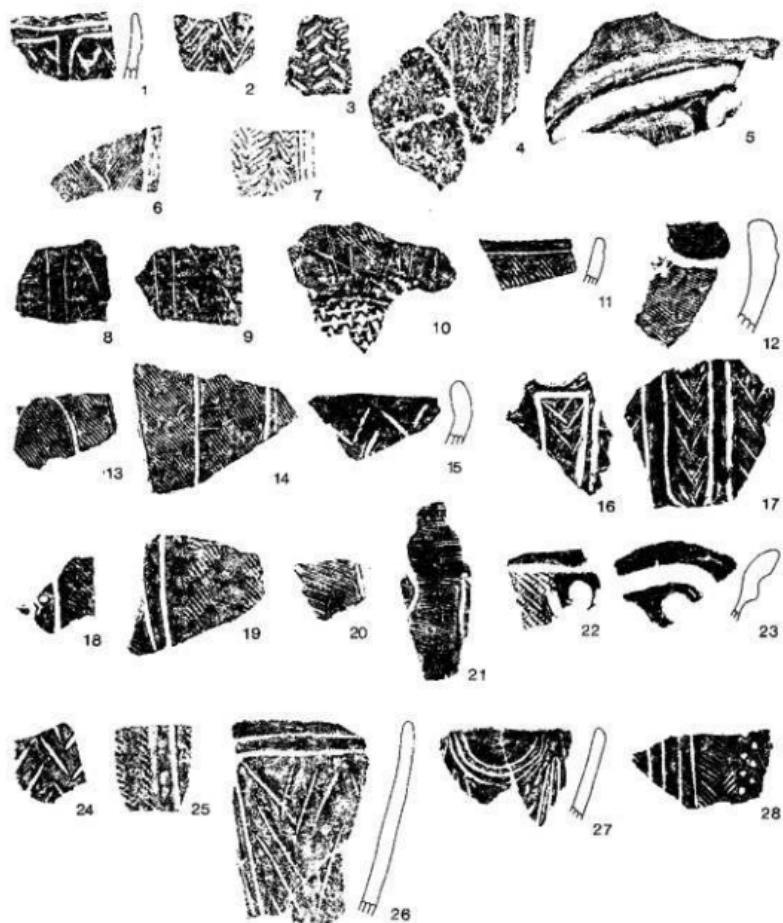


插图10 (1/4)

### 参考文献

- 岡本孝之ほか 1977 『尾崎遺跡』 神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦 1988 「加曾利E式土器様式」「縄文土器大観2」 小学館
- 平林 彰 1990 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」「調査研究集録」7  
横浜市埋蔵文化財センター
- 米田明訓 1986 『柳坪遺跡』 山梨県教育委員会
- 小野正文 1987 『秋迦堂II』 山梨県教育委員会

# 写真図版



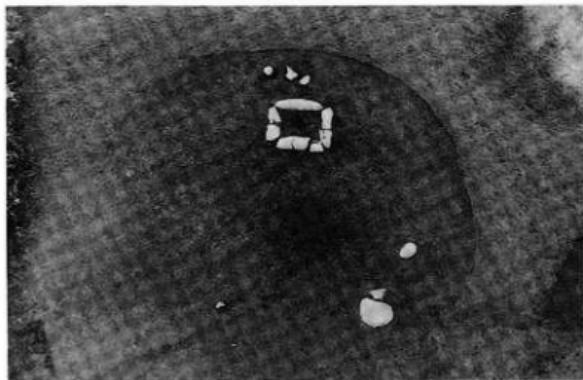
全景北より



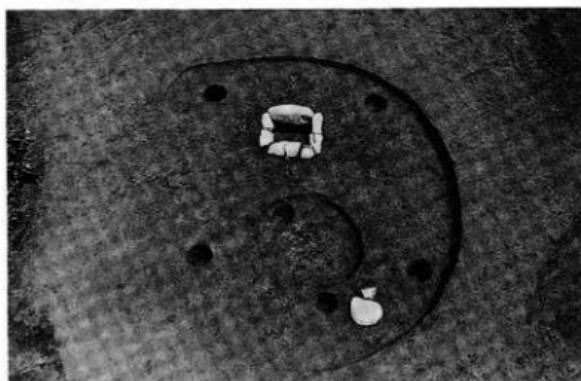
全景東より



全景南より



第1号住遺物出土状況



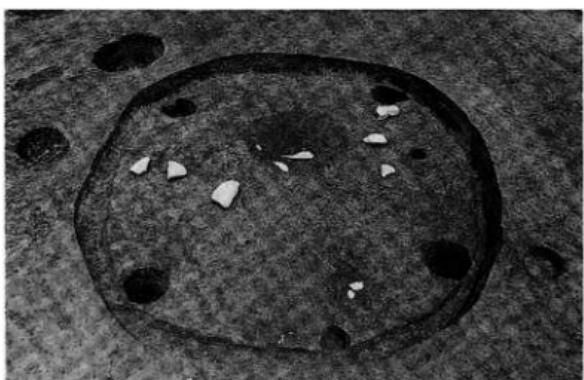
完掘状況



第1号住炉完掘状況



第2号住遗物出土状况



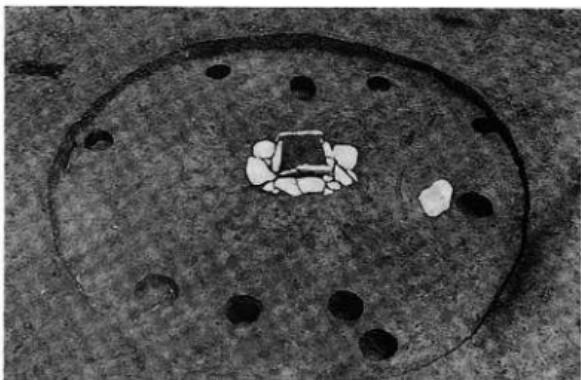
完掘状况



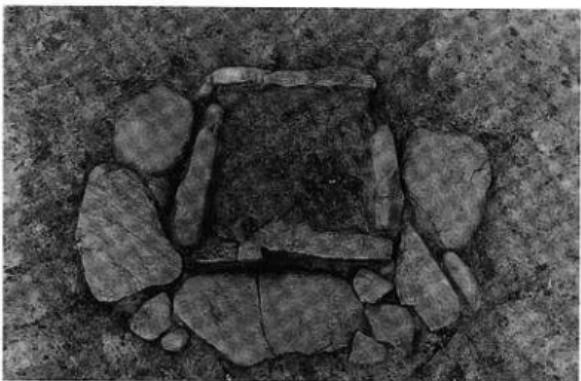
埋甕半截状况



第3号住遺物出土状況



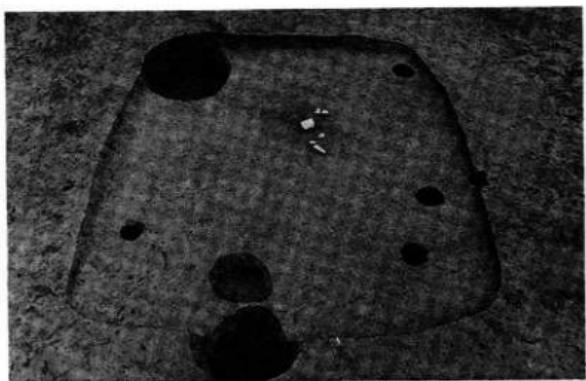
完掘状況



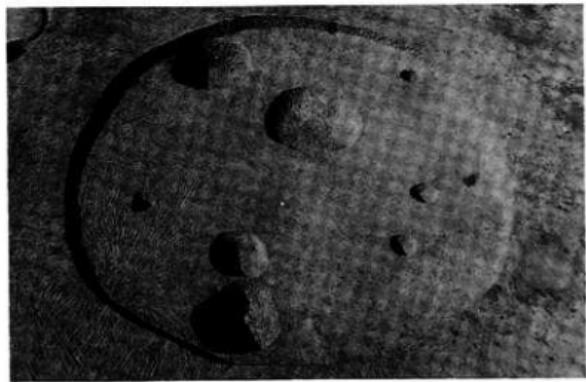
炉状況



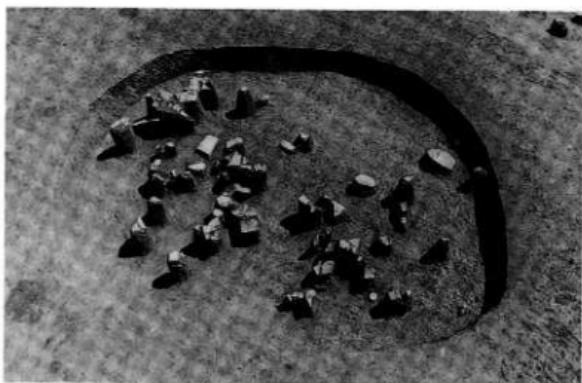
第4号住遺物出土状況



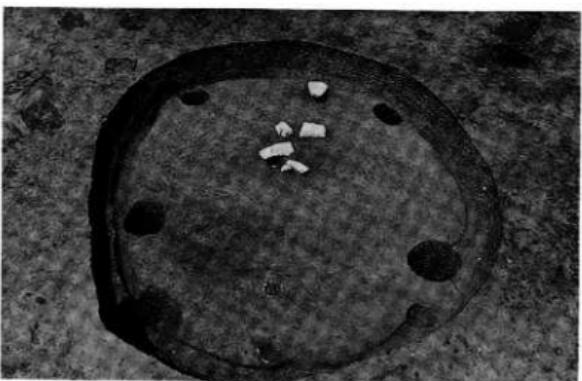
遺物取上状況



完掘状況



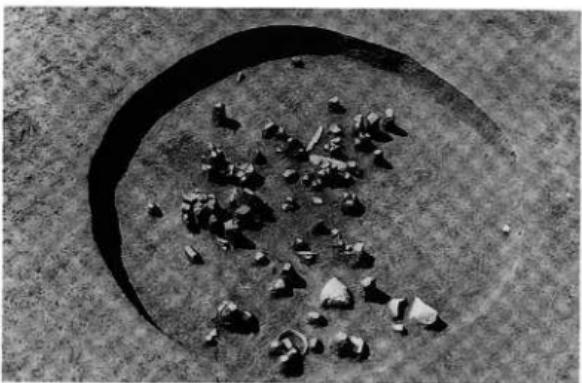
第5号住遺物出土状況



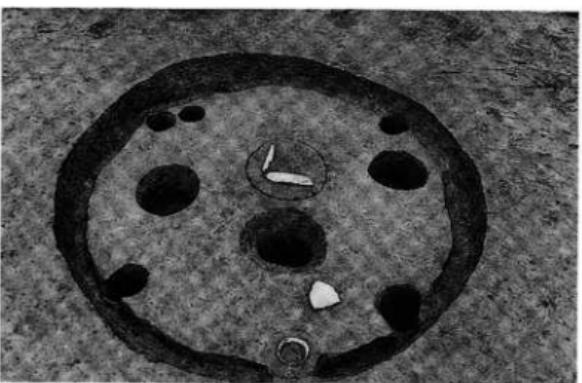
住居地完掘状況



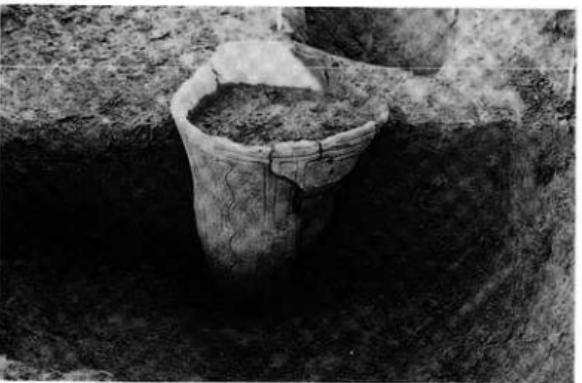
埋甕半截状況



第6号住遺物出土状況



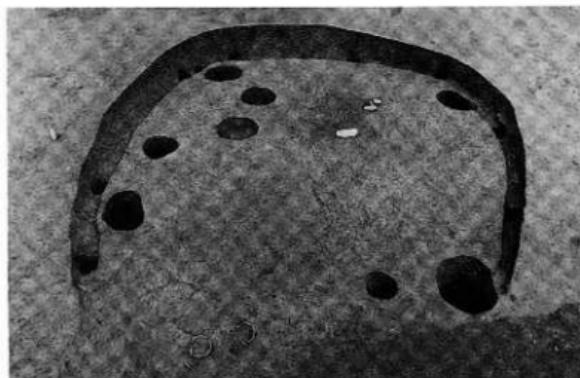
住居内光掘状況



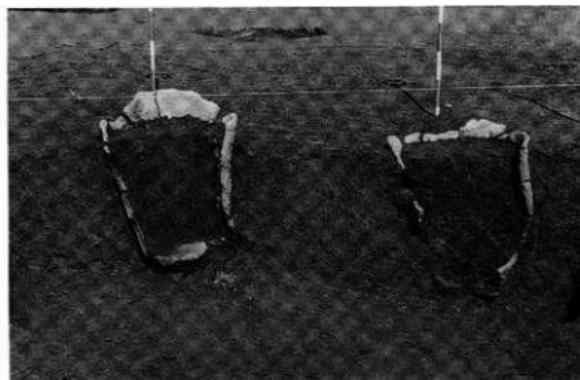
埋甕半截状況



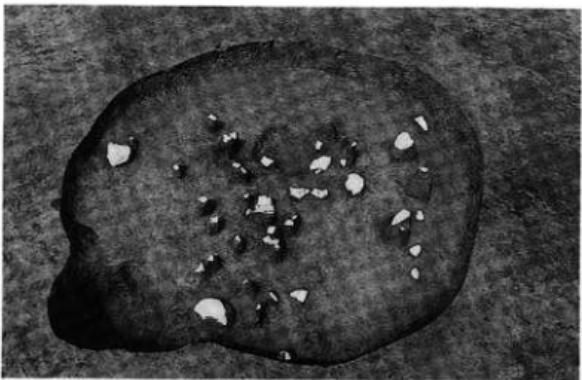
第7号住遺物出土状況



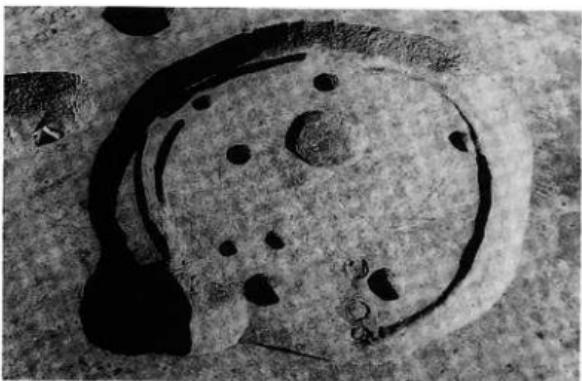
住居内完掘状況



埋甕半棺状況



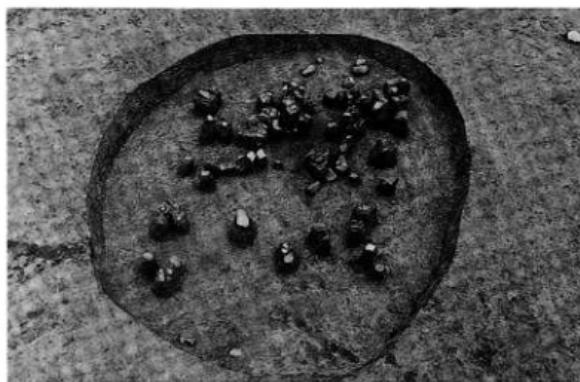
第8号住遗物出土状况



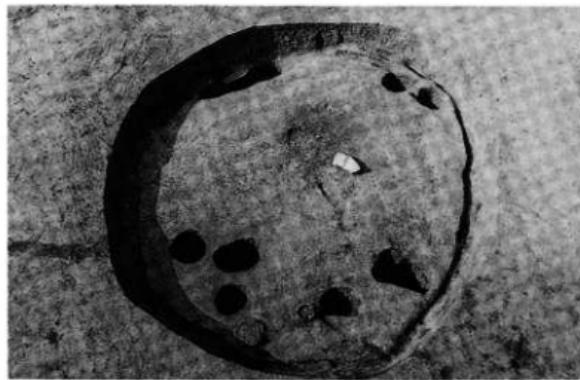
住居内完掘状况



埋葬半截状况



第9号住造物出土状況



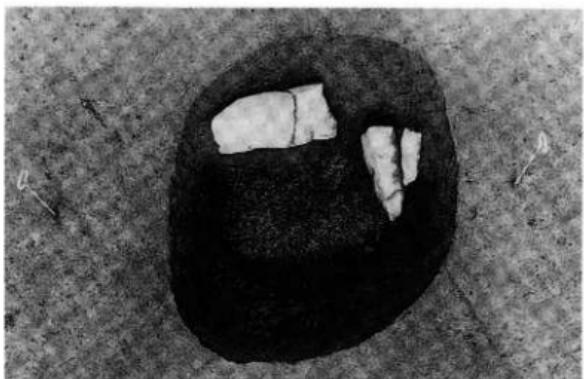
住居内完掘状況



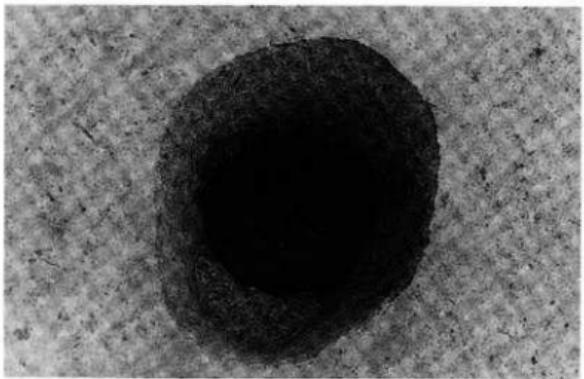
埋甕半截状況



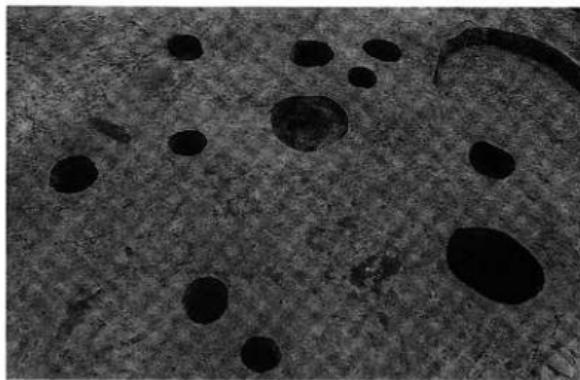
第10号住居内完掘状況



炉完掘状況



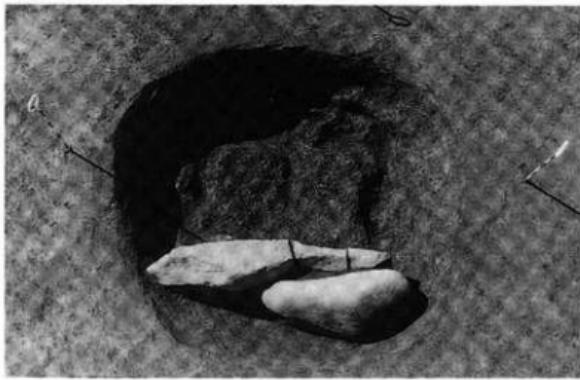
炉下部構造



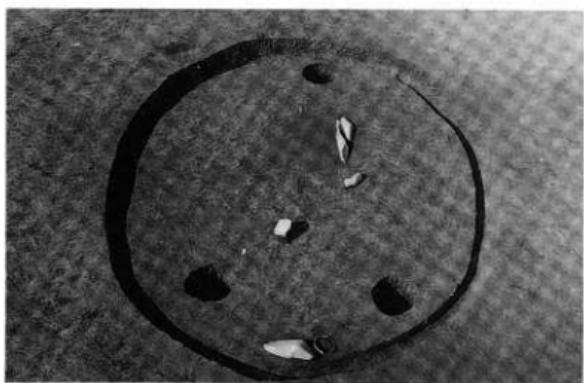
第11号住家掘状況



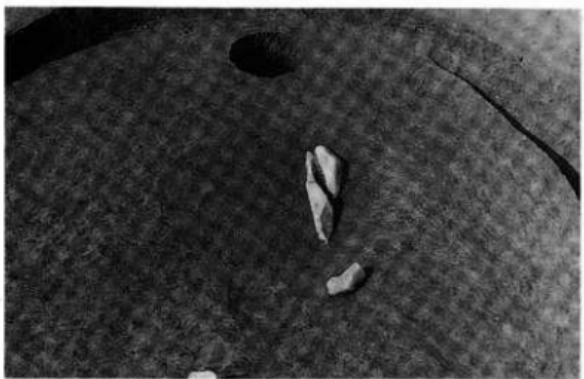
炉調査前



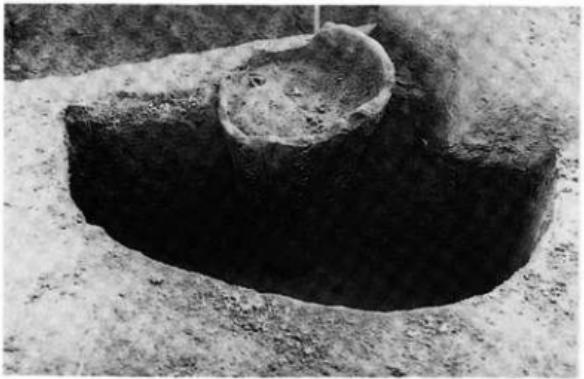
炉完掘状況



第12号住家掘状況



炉周辺アップ



埋甕半裁状況



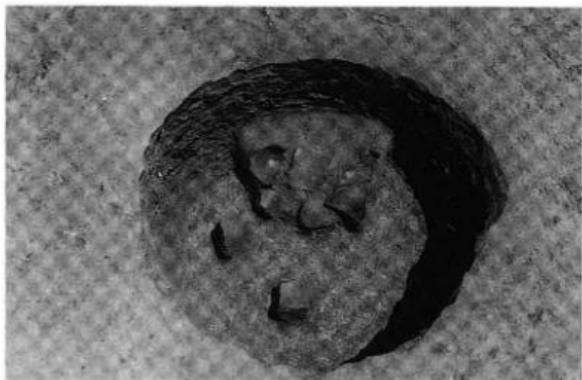
第13号住光掘状況



炉調査前



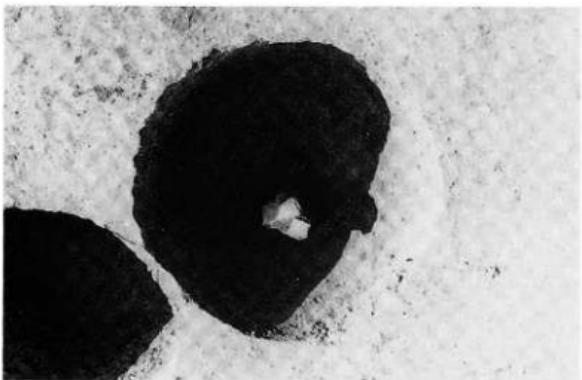
炉完掘状況



第1号土壤遺物出土状況



遺物出土状況アップ



第4号土壤遺物出土状況



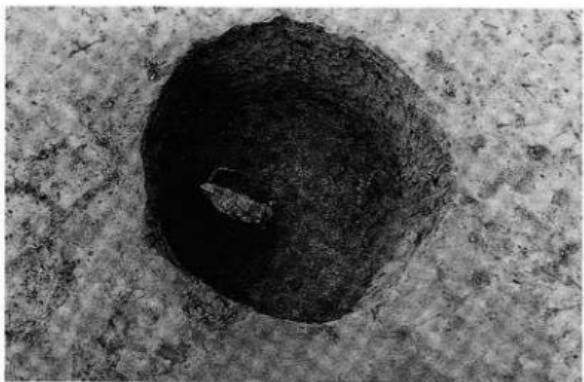
第4号土壤出土遺物アップ



第5号土壤遺物出土状況



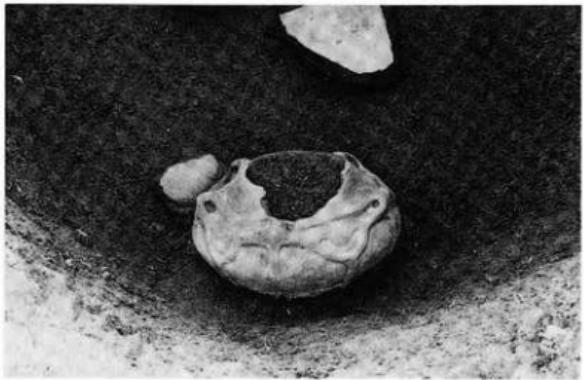
第12号土壤遺物出土状況



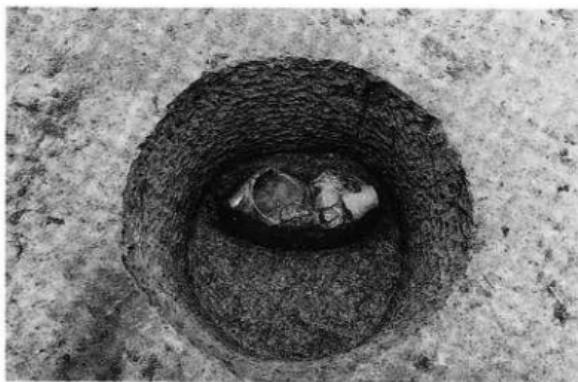
第14号土壙遺物出土状況



第41号土壙遺物出土状況



遺物出土状況アップ



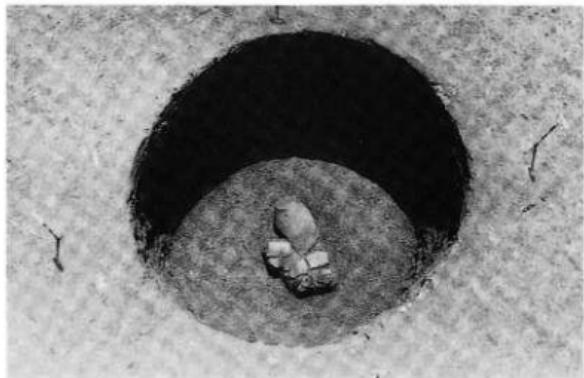
第43号土壤遺物出土状況



出土状況アップ



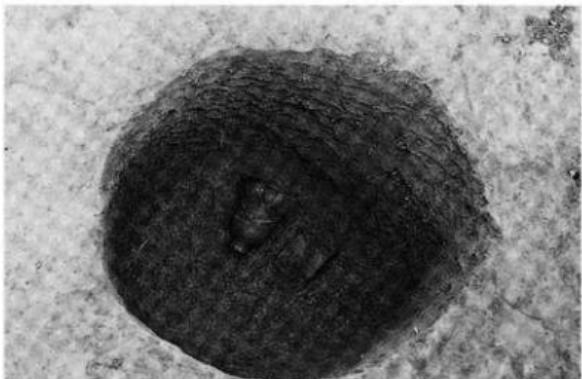
第47号土壤遺物出土状況



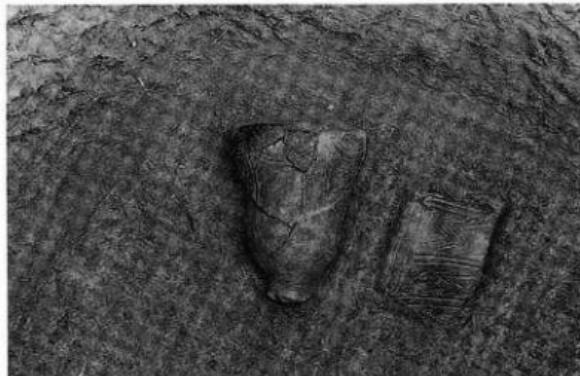
第47号土壤下部遺物出土  
状況写真



出土状況アップ



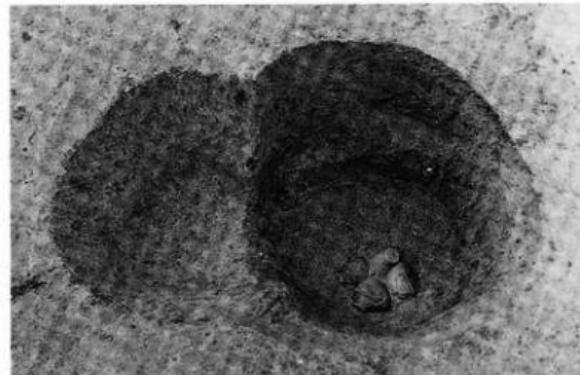
第49号土壤遺物出土状況



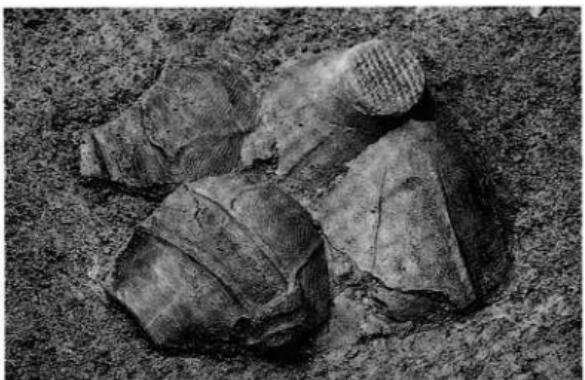
第49号土壤遺物出土状況  
アップ



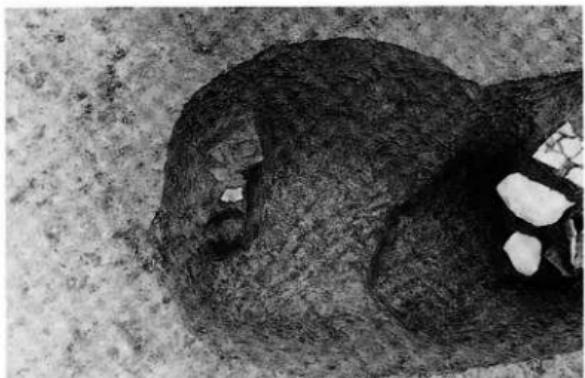
第50号土壤遺物出土状況



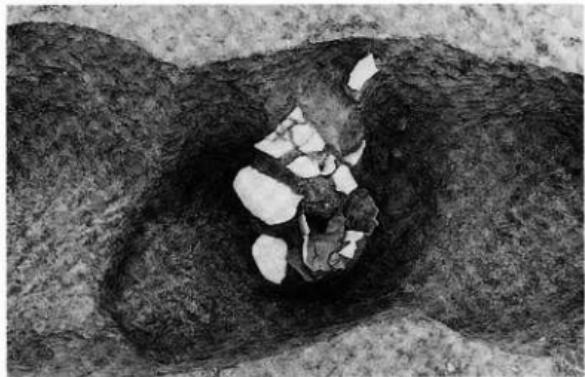
第53号土壤遺物出土状況



第53号土壤遺物出土状況  
アップ

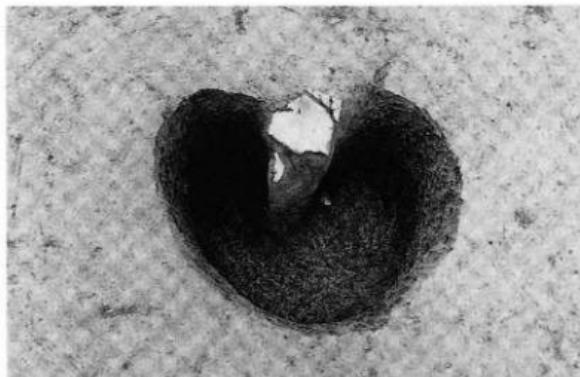


第62号土壤遺物出土状況

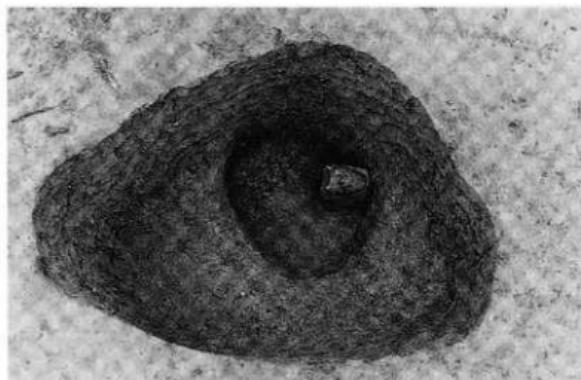


第63号土壤遺物出土状況

図版 22



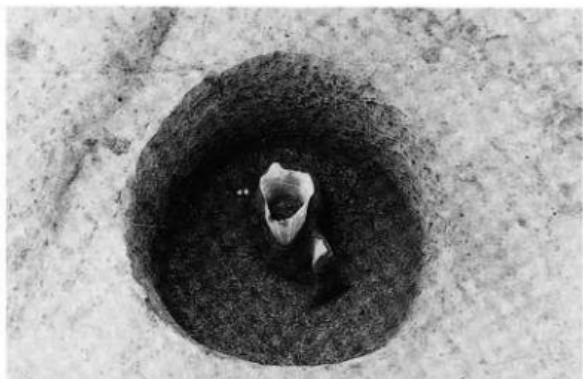
第94号土壤遺物出土状況



第96号土壤遺物出土状況



遺物出土状況アップ



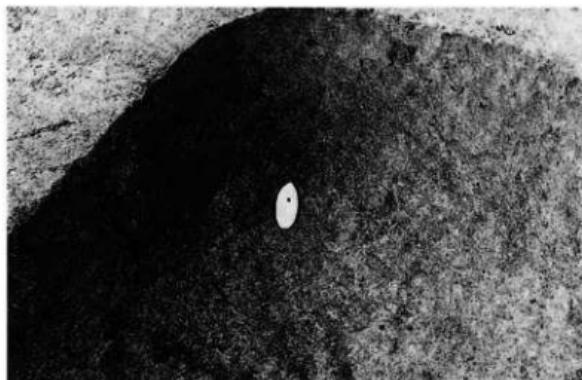
第132号土壤遺物出土状況



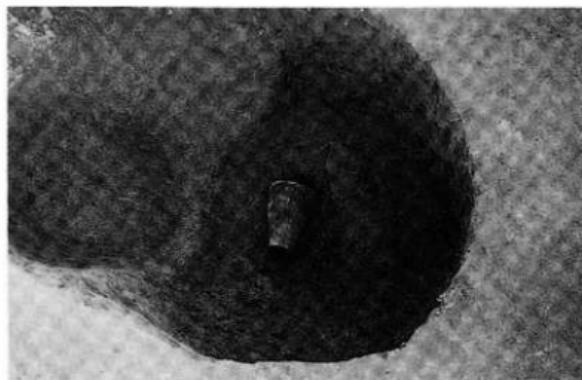
遺物出土状況アップ



第155号土壤遺物出土状況



第156号土壤出土遺物アップ



第174号土壤遺物出土状況



遺物出土状況アップ



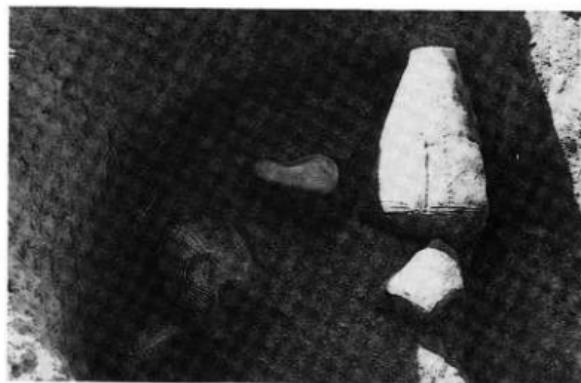
第179号土壤遺物出土状況



遺物出土状況アップ



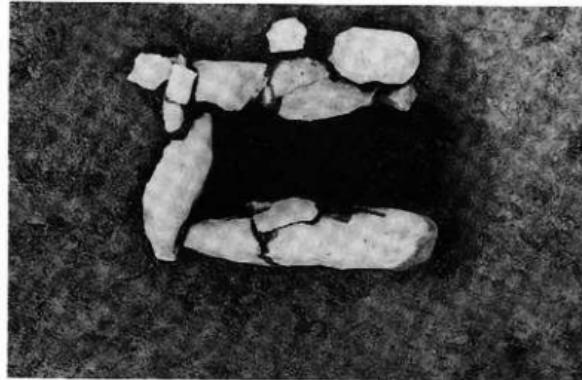
第181号土壤遺物出土状況



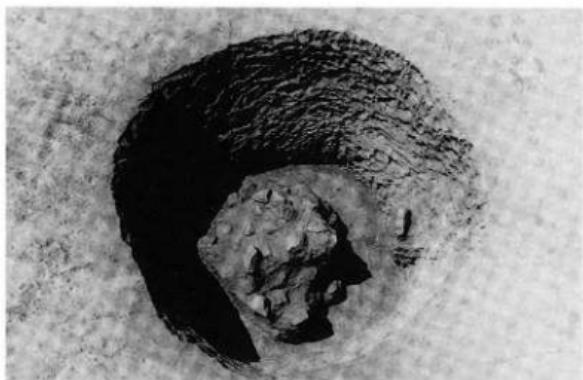
第181号土壌出土遺物アップ



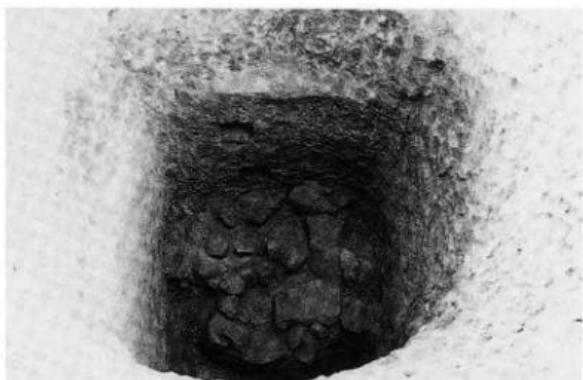
第186号土壌検出状況



第186号土壌完掘状況



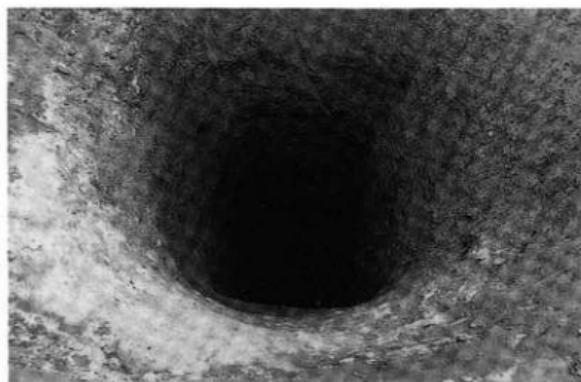
第1号井戸上段



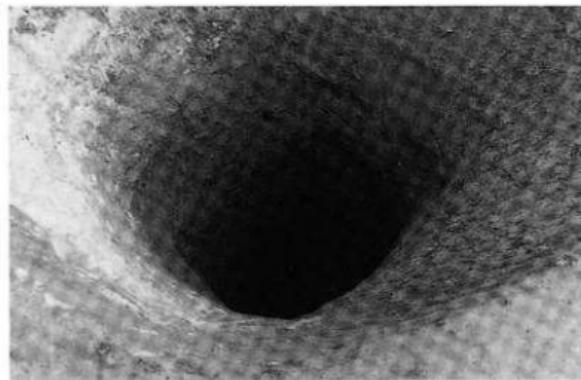
第1号井戸中段



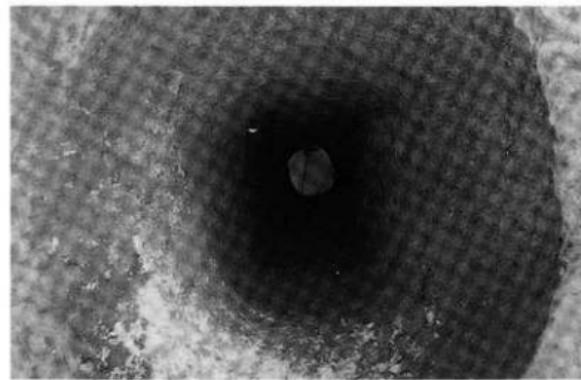
第1号井戸完掘状況



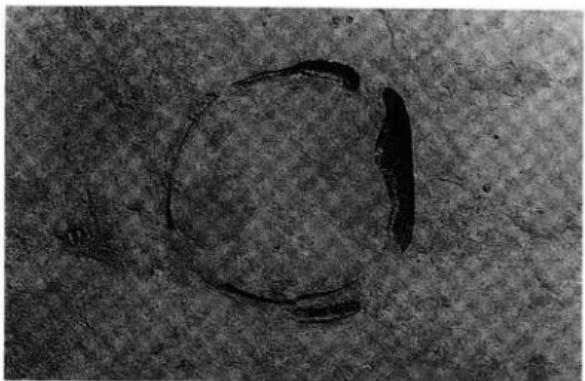
第2号井戸（北より）



第2号井戸（西より）



第2号井戸完掘状況



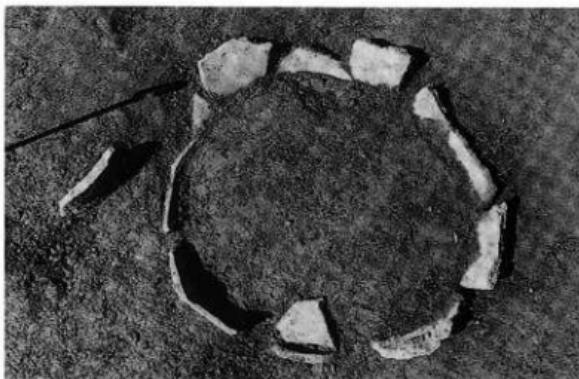
第1号埋設土器検出状況



半截状況



完掘状況



第2号埋設土器検出状況



半截状況



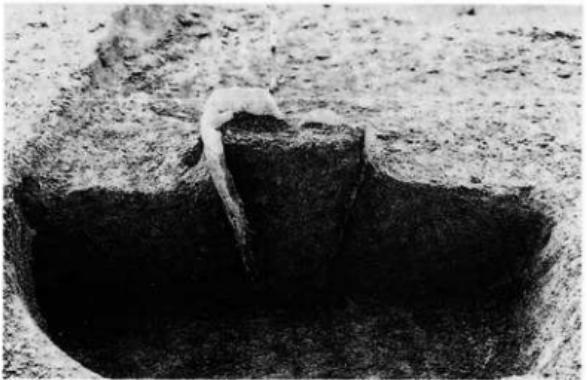
完掘状況



第3号埋設土器検出状況



半截状況



第4号埋設土器半截状況



2住



3住



2住



3住



2住

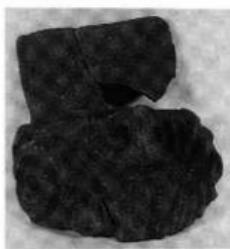


3住

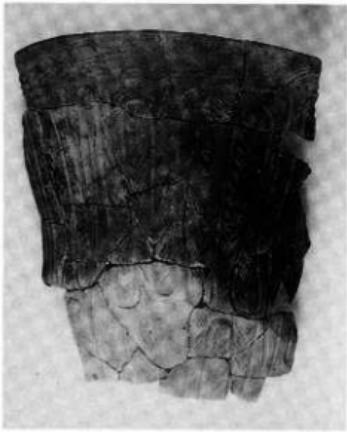
第2、3号住居址出土土器



4住



4住



4住



5住



4住

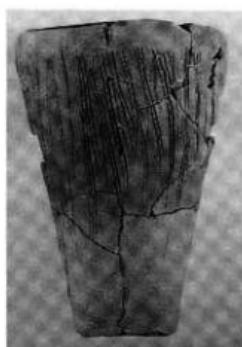
第4、5号住居址出土土器



5住埋1



5住  
埋2



5住



5住



5住



5住



6住埋

第5、6号住居址出土土器



7住



7住



7住  
埋1



7住



7住



7住  
埋2



7住



7住



8住埋1



8住埋2



8住埋3



8住



8住

第7、8号住居址出土土器



9住埋



9住



9住



9住



9住



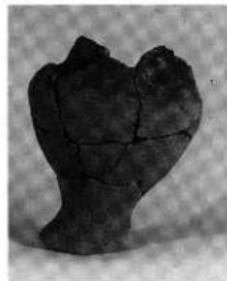
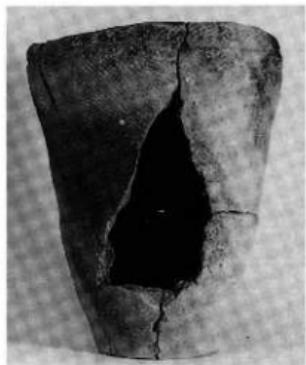
12住埋

第9、12号住居址出土土器

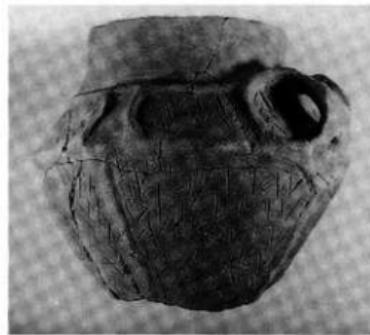
図版 38



1土



4土



14土

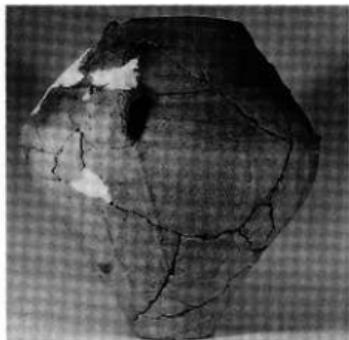


9土



41土

第1、4、9、14、41号土壤出土土器



第43、49、52、94、95、96号土壤出土土器



132上



181上



174上



1号埋設



181上



4号埋設

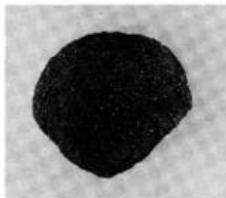
第132、174、181号土壤第1、4号埋設土器



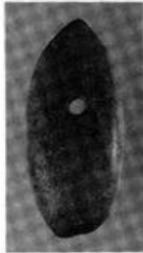
遺構外



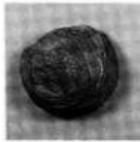
遺構外



6住



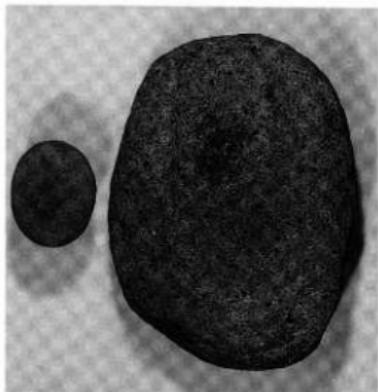
155土



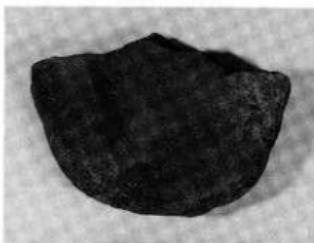
9住



出土遺物



179土 (石皿、磨石のセット)



遺構外



遺構内出土凹石

遺構外出土凹石



出土遺物



土壙内出土磨石



図版 44



丸石、蜂の巣石

磨製石斧、燧石



打製石斧



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	じろうがまえいせき
書名	次郎構遺跡
卷次	
シリーズ名	高根町埋蔵文化財
シリーズ番号	第9集
編著者名	雨宮正樹
編集機関	高根町遺跡調査会
所在地	〒408 山梨県北巨摩郡高根町村山北割3261 ☎0551-47-3111
発行年月日	西暦1996年2月29日
ふりがな	じろうがまえいせき
所取遺跡	次郎構遺跡
ふりがな	たかねちょうしもくろざわあざうちこし
所在地	高根町下黒沢字打越2801番地他
市町村コード	
遺跡番号	
北緯	35°47'50"
東経	138°24'44"
調査期間	1992.11.01～1993.01.31 (第1次) 1993.06.01～1993.12.17 (第2次)
調査面積	15,000m <sup>2</sup>
調査原因	スポーツ公園造成
種別集落跡	次郎構遺跡
主な時代	縄文時代
主な遺構	竪穴住居址13軒、土壙186基、溝4条
主な遺物	土器・石器
特記事項	曾利式と加曾利E式混合

高根町埋蔵文化財 第9集  
平成8年3月25日印刷  
平成8年3月31日発行

## 次郎構遺跡

発掘調査報告書

編集・発行 高根町遺跡調査会  
印 刷 ほおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5

G F E D C B A Z

凡例  
 ○住 - ○号住居址  
 ○土 - ○号土壤  
 ○埋 - ○号埋甕  
 ○溝 - ○号溝  
 ○井 - ○号井戸



付図 次郎構遺跡全体図 (1/400)

